



袖振り合うも
化生の縁廻

オムカゼ

袖振り合うも化生の縁・廻

Ein Gespenst geht um in Phantasmagoria - das Gespenst des Kapitalismus.

——世に錢ほど面白き物はなし。
井原西鶴「日本永代蔵」

袖振り合うもた生の縁・廻

袖痕り合うも化生の縁・廻



第一章



『藍様のわからずや！』

どうせ藍様は、私のことなんて知らないんだ!!』

は、は、と荒い吐息が知らず口をつき、紅葉の中に
儚い白を刻む。

胸に燦ぶる憤りと共に、小さな口元でぎりりと噛み
締めた歯が軋み唸る。全身を巡る熱はなお高まり、心
臓の鼓動は早鐘のよう。野生の滾りに任せて森の中を
駆けてゆく間に、橙はいつしかヒトガタでいるのも忘
れていた。

しなやかに伸び縮む手足が枯れ枝と朽葉を蹴散らし。
苔生した倒木を飛び越える。二本の尻尾をしならせて
傾いた身体のパランスを取り、翻る赤いスカートが稍

を散らすのも構わずに、少女はなお速く速くと手足に
力を込める。

——どこへ。どこだっいいい。

息が上がリ、黒い尻尾が毛を逆立て、耳の裏側まで
血が昇つてぐるぐると沸騰する。今はただただ本能の
まま、頭の中を熱で塗りつぶし、何も解らなくなるま
で走っていたかった。

「——ッ」

走り続ける身体がマヨヒガの境界を越える。見覚え
のある茅葺き屋根が視界の端を掠めた瞬間、

「んにゃ!?!」

がつ、と後ろ足が木の根に躓き、吹きだまつた落ち
葉の山を蹴散らした。足元をすくわれた小さな身体は
紅黄に染まる落ち葉の絨毯の上を転がってゆく。

疾走の勢いのまま古びた廃屋の並ぶ広場に転がり出
し、少女の身体は仰向けになって停止した。宙を舞う
落ち葉の中、吐き出す息は白く、小さな肩が上下に揺

れる。遮二無二動かしていた身体は熱を帯び、耳の奥で激しい拍動を響かせていた。

「……はあ、っ……」

ぜいぜいと大きく上下する胸に手を当て、しばし荒い息を繰り返す。地に付けていた手のひらは泥に汚れ、白い袖には青黒く苔と草の汁が染み付いていた。

マヨヒガの中、一番大きな庭と陽当たりの良い縁側を持つ邸宅が、橙の暮らすねぐらである。庭にある樹齢数五百を超える大木の木陰は橙のお気に入りのひとつで、いつもはここに来れば嫌なことを忘れることができた。

けれど今日は、その効果も今一つ。

「……………」

ようやく呼吸が落ち着いてくる。それと同時に、自分の感情の手綱も握れず、我を忘れて獣じみた振る舞いをしてしまったことへの後悔が膨らみ始めた。

「ううう……ッ」

感情の高ぶりに合わせ、二股の尾が毛を逆立てる。

橙は収まらない苛立ちと共に、足元に転がっていた桶を蹴飛ばした。苔生す桶の裏側に潜んでいた虫達が、突然の日の光に驚いて逃げ出してゆく。

脚先から腰まで響くじんと重い衝撃。桶を蹴飛ばした爪先がずきずきと痛み始める。

「……………」

せつかく堪えていた涙がまた溢れそうになって、橙はぐしぐしと服の袖で顔を擦った。けれど袖口に染み込んだ草の汁がつんと鼻の奥を刺激し、ますます惨めに目元を緩ませる。

見渡すマヨヒガは夕日の朱色に沈んでいた。山の端に落ちる陽と共に、静かに響く虫の声。

終焉と静寂を感じさせる秋の色彩の中、穏やかな縁側の陽だまりは既になく、灯りのない廃屋が夕闇の中に佇むばかり。

そんな庭の中にぼつんと取り残されて。怒りも露わ

にびんと立っていた二股の尻尾は、やがてへにやりと力を失いぱたりと地面に倒れ込んだ。

「はあ……」

今日、何十回目かになる、溜息。

それを聞き付けたか、がさりと近くの茂みを揺らしてマヨヒガに棲む猫達が顔を覗かせる。

黒、白、三毛、虎縞、ぶち。彼等は戻ってきた橙の様子がいづれとは違うことを察し、にいに鳴きながら案じるように橙の足元に身体を寄せてきた。

黒タイツ越しに感じる毛皮のくすぐったさに、橙はようやく表情を緩めた。

「……心配してくれてるの？」

にあお、と賛同の声。マヨヒガの長を自負する橙だが、ここに棲む猫達の中には、保護者気取りで橙に接する者も少なくない。

普段は少し鬱陶しいくらいの彼等の心遣いが、今はとてもありがたかった。

「ありがとう」

猫達が身を寄せ作る毛玉の中で、橙は黒タイツの膝を抱えて座り込んだ。

夕陽はいつしか山の端にかかり、暗さを増す庭の中に、肌寒い風が夜の寒さを運んでくる。

りいりいと虫の音を聞きながら、寄せ合わせた膝の上に頬を押しつけ、呟く。

「……藍様の、ばか」

“——私の事なんて知らないんだ!!”

耳の奥で、感情に任せて主に投げつけた醜い言葉が反響する。橙は嫌な記憶から逃れるようにぎゅつときつく、眼をつぶった。



——きっかけは些細なものだったのだ。

言い訳するつもりはないけれど、橙だって幻想郷の

妖怪を区分けした時に、チルノやルーミア達と一緒にたにされてしまうことを不当だと思っているわけではない。

ガチンコの弾幕ごっこの戦績だっていい勝負だし、テストの点数も似たようなものだ。ことさらに、自分が特別だなんて意地を張る気はない。

けれど、そんなチルノ達の遊び仲間に、橙が含まれていないことが多いのは、決して彼女達と一緒にいるのが苦手だからではない。

まず絶対にあり得ない事だと分かっているけれど、それでも。万が一——いや、億の億乗分の一くらいの確率で、紫様や、大結界になにかがあつたとして。

その時は橙もきちんと、八雲の式の務めを果たさなければならぬから、だ。

だから、今日の朝に八雲のお屋敷に向つた時、いつものように結界の点検と修復に出かけようとしていた藍に付いて行きたいと申し出たのだから、断じて藍を

困らせたり、邪魔したりしたかつたわけじゃなかった。ちゃんと、橙なりの理由があつてのことだ。それなのに——

『すまないね橙、ちよつと今日は忙しいんだ。たまには私じゃなく、他の子たちと遊んでおいで』

そんな風に、まるで、他に友達がいらない橙が、わざと藍を困らせているみたいな言い方はないんじゃないかと思う。

確かに橙もいつも良い子ではないかもしれない。きちんと宿題を済ませているわけじゃないし、お留守番を言いつかつた時に、紫様の分のおやつを勝手に食べてしまつたり、お使いの途中でつい寄り道をしてしまつたりしたこともあるけど。

いざという時の事を心のどこかに留め置くくらいには、橙は幻想郷一の大妖怪、八雲紫の式の式であるこ

とを自認しているつもりでいた。

——それなのに。

(本当に、ただの「つもり」だったのかなあ……)

少なくとも、橙の努力を、自分の主はそう捉えていてはくれなかったのだ。元気を失って垂れ下がった耳と尻尾を、古びた縁側にぺたりと這わせて。すっかり自信を喪ったすきま妖怪の式の式は、うにやあ、と自己嫌悪の鳴き声を上げた。

「どうしよう……」

今さらのように湧き起こる後悔の念にとともに、くうくうとお腹の虫が鳴る。そう言えば、お昼も食わずに飛び出してきたのだった。

今日の晩ご飯は何だろう、とつい考えてしまつてから、橙は慌ててぶるぶると首を振った。

八雲のお屋敷で、三人揃つて食べるご飯は美味しいけれど、あんなに酷いことを言つて飛び出してきたのだ。いまさらどんな顔をして戻れるというのだろうか。

橙が八雲のお屋敷を訪れるのは数日に一度で、紫が冬眠する季節を除けば、橙はこのマヨヒガで独りで暮らしている。けれど、もうあそこには戻れないかもしれないと考えてしまうと、背中がぞつと冷たくなるような不安が押し寄せてくるのだった。

いつのまにか、自分が八雲の式になる前はどうかつて暮らしていたのかを思い出せなくなっていることに気付いて、橙は改めて愕然とする。

そもそも、自分が主の満足のいくような働きのできない未熟者だなんてことは、一番橙自身が良く分かっていることだ。橙は人の姿を取れるようになってまだ百年の半分も過ぎていない。

一人じゃまともな式も打てず、猫型の時の癖はぜんぜん抜けておらず、人を化かすのだって失敗続き。九尾の藍と比べれば、自分は髭も生え揃わない仔猫のようなものだ。

でも、けれど、だからって。

大好きな藍様の役に立ちたいという気持ちには、橙の胸の中、一番大切な場所にちゃんとある。

それを否定されるなんて、絶対に嫌だった。

「……………はああ……………」

思考の袋小路に陥ってしまった頭を冷ますように、再度の溜息。にやあ、と足元に擦り寄ってきたマヨヒガの猫達に、橙はポケットの中の公魚ワカサギの煮干をぽいとばら撒き、残りを口に運んだ。乾いた口の中でぎゅつと濃縮された干魚の味を噛み締める。侘しい夕ご飯だが、とりあえず空腹は紛れる。

「……………どう、しよう……………」

むなしい自問自答が、うにやあという鳴き声と一緒に橙の口を突く。

どう繕おうとも結局の処、意地を張って出てきてしまったのだから、できること、するべきことは二つ。

今からでもおとなしく、お屋敷に戻って謝るか、自分が八雲の式としての覚悟があることを、藍にもきつ

ちりと示してみせるかだ。

頭の中の冷静な部分は前者が正しいと言っていたけれど、橙はどうしてもそれを選ぶ事ができなかった。

「でも、示すって言ってもなあ……………」

まるっきりの八方塞りだ。ぽりぽりと煮干を齧りながら橙は途方に暮れる。

——分からなかったら人に聞け。

主の教えがふと頭をよぎるが、なんだか今はそれにも素直に従いづらい。どうせ意地をはり通すなら、全部自分で決めたのだと胸を張って答えたい。気はすっかり沈んでいたが、それでもまだ橙の胸の中には強い感情が燦っていた。

尻尾を左右にゆらし、小さな頭でむむむと考え込むことしばし。

「……………そうだ！」

橙の頭をよぎったのは、最近できた妖怪寺に招かれたという、外来の大妖怪——

九尾の妖狐・八雲藍の宿敵たる、妖怪狸の噂だった。



命蓮寺。

化主である聖尼公のもと人妖平等を掲げ、積極的に妖怪の救済と保護を行うというこの寺は、人里にほど近い場所にあった。

敷地の塀の上に張り出した樹の枝上に身を潜めて、橙はじつと寺の中の様子を窺う。

(むー……)

公然と妖怪の出入りを認めている一方で、これまで幻想郷には目立たなかった仏門でもあり、立地も相まってどこかの神社よりはずっと繁盛しているようだった。門前に沢山の地藏尊が並ぶ参道には、参拝に訪れる人間達の姿が途切れない。妖怪達の出入りも頻繁で、耳にしていた以上の人気ぶりだ。

式を打った紙飛行機を飛ばして確認したところ、寺の中では複数の妖怪達が共同生活を営んでいるらしい。妖怪寺なんてどうせ荒れ放題だろうと決めつけていた橙だが、目の前に実物を見てさすがに考えを改めざるを得ない。隙を見てこっそり忍び込むなどという甘い考えは捨てねばならないだろう。

(……例の狸って、どこにいるんだろ)

ぴんと立てた耳を済ませ、目を凝らして境内の様子を窺う。

橙が使える式はまだ初歩の初歩で、主やその主のよに、打った式を自在に自分の眼鼻や手足として操る事はできない。

ならばと寺の周りで暮らしている猫たちに話を聞こうとしたが、どういうわけか寺の周辺にはほとんど猫が見当たらなかった。あちこちを探し回ってようやく見つけた連中も、酷く怯えていて橙の顔を見るなり逃げ出す始末で、まるで話にならない。

かくして調査はあつさりと暗礁に乗り上げ、橙はこうして息を潜めて樹上から様子を窺うくらいしかできずにいた。もう半刻ばかりもこうしているが、いまだにそれらしい相手の影も掴めていない。

（狸だから、誰かに化けてるとか……かなあ？）

遠くマヨヒガの橙にまで噂の聞こえてくるほどの大妖怪なのだ。さぞふてぶてしく大きな顔をして居座っているのだらうとたかを括っていたが、どうも当てが外れたらしい。

ほぼ半日を無駄に過ごしたじれったさに、橙は手近な枝を掴んでがじがじと噛む。元々、猫の性質としてあまり長い間ひとつの事に集中しているのは得意ではないのだ。

（んう、いいや。もうちょつと近くまで——）

ついに痺れを切らし、橙は境内に忍び込む事を決意した。人の出入りの機を窺い、塀の中へ飛び移ろうと身をかがめた時——

「——こんなところで何をしている」

「にや!?」

突然に背後に現れた聞き覚えのある声に、橙はびくりと竦み上がった。

慌てて振り向いた先、一面の金色が目飛び込んでくる。

不機嫌そうに鼻に皺を寄せた八雲藍が、豊かな九本の尻尾を風に広げ、頭上から橙を見下ろしていた。

——驚く暇もなかった。

迂闊にも跳び退ろうとした橙の脚はむなしく空を掻き、反射的に爪を立てようとした枝が汗でずるりと滑る。バランスを崩した身体は、そのまま樹上を滑るように宙へと放り出された。

飛べばいいという当たり前の発想も出てこないまま、橙は枝の上から転げ落ちた。

「うにやああ!?」

猫の本能が身を捻って体勢を整えようとするが、猫

の姿ならともかく、人間の女の子のサイズでそれをするには枝の高さと時間が足りない。

かくして橙は塀の上を跳ねて寺の敷地へとダイブ。

掃き清められた境内を突っ切つて、どしんどしんどろろずるべしやびたんつ、と僧坊の裏手に虫干し中の座布団の山に頭から突っ込んだ。

「あうう……」

日向臭い座布団に埋もれ、お尻だけ突き出した無様な格好で目を回す橙に、宙空からけたたましい笑い声が響く。

「ぶつ、くくく……くくくつ、あーつはつはつはつはつは!!」

くらくらする頭を持ち上げて空を見れば、そこには上下さかさまになって胡坐をかき、宙をふわふわと漂いながら腹を抱えて笑う藍の姿があった。

「うくくつ、カッコ悪いー。猫のくせにまともに受け身もできないのかよー? みつともないなー。くくく

つ……ねえ、今どんな気分? どんな気分つ?」

「……藍、様?」

牙を覗かせ、笑い過ぎて目に涙すら浮かべながら、

藍は橙の顔を覗きこんでくる。

普段の落ち着いた物腰とはあまりにも違うその姿に、橙がしばし呆然としていたら——藍はにやにや笑いを浮かべたまま、自分のこめかみの辺りにずぶりと指を突っ込んだ。

「……!?」

あまりの事にもう声も出ない。

藍はそのまま、ぐりぐりと頭の中をこね回す。やがてずるりと抜かれた指には、二十センチほどの小さな、翼の生えた蛇のようなものが握られていた。

蛇がぽんと音を立てて爆ぜると、同時に藍の姿がゆらりと歪み、見たこともない黒衣の少女へと変貌する。

「くくく、ばあーか。騙されてやんのっ」

口元に生え揃った牙を覗かせ、下品な笑顔でけたた

ましく笑う少女に、すっかり事態から取り残された橙はぱちくりと瞬きを繰り返すばかりだ。

「こおら、ぬえ!! またアンタはそんな所で何やってんの!!」

境内の向こうで、尼僧姿の少女が声を上げた。おりよ、とそちらを振り向いた黒衣の少女は口を尖らせ、背中に生えた非対象の羽根で橙を指し示す。

「なんだよ、怪しい奴がいたから捕まえてやったんじゃないか。感謝しろよな」

「あのねえ……雲山!」

肩を怒らせた尼僧が、手に握った輪を振るう。ごうと風が渦巻き、どこからともなく黙々と湧き起こった白い煙が、たちまち見上げるほどの入道となつて屹立する。

尼僧の指示に無言で頷いた雲入道は、巨体に似合わない素早さで黒衣の少女へと飛びかかる。しかし彼女もさるもの、迫る入道の大きな手から巧みにすり抜け、

けたけたと笑いながら空へ身を翻した。

「こらあ、待ちなさいっ!!」

「へーんだ。待つもんか!!」

とどめとばかり橙を見下ろし、べえーつ、と思い切り大きく舌を出してから、黒衣の少女はどこへともなく姿を消す。

「——困ったもんね、聖がないからって……」

走り寄つて来た尼僧が苦々しげに顔をしかめ、腰に手を当てて溜息をつくと共に、境内のあちこちから何の騒ぎかと寺の住人達が集まつてくる。

「どうしたの、一輪?」

「何の騒ぎだい、まったく……」

見ての通りよ、と少女の消えた方を視線で示して応じる尼僧。どうやらこの騒ぎはいつもの事であるらしく、集まつて来た一堂もまたか、と諦めと呆れの入りに混じった表情。

そんな中、彼女達の視線は自然、その場に残さ

れた橙へと向けられる。

「……うにゃあ……」

またたく間に注視の輪の中心に晒され、橙は天を仰いで小さく鳴いた。



「……なるほど。身に覚えのない咎で性質の悪い人間に狩られそうになつていたところ、妖怪を救う寺と聖の話聞きつけ、一体どんな場所か様子を見に来たと……一応、筋は通っているね」

「う、嘘なんかついてないよっ」

向けられる胡乱な視線に、橙は拳を握つて反論する。境内の中央、ちりちりと尻尾の先が焦げるような緊張感の中、橙は周りを取り囲む寺の妖怪達にぶんぶんと手を振つて己の潔白を主張した。

「勘違いしないでくれ、筋は通っているねと言つただ

けだよ。君の言い分を疑うかどうかは別問題だ」

橙を詰問するように立ち塞がるのは、大きな耳をしたナズーリンという鼠の妖怪だった。細長いロッドをしっかりと肩に当て、片目をつぶつて値踏みするような視線を向けてくる。座っている橙と大して目線の高さも変わらないくらい小柄なくせに、態度は随分と尊大である。

「だから、嘘なんかじゃないってば！　ねえ、信じてよお……」

ネズミなんかに良い様に言わせているなんて猫妖の名折れだが——いまは耐える時だ。橙はぐつと堪えて、無害で哀れな妖怪を装おうとする。

こうなつてしまった以上、なんとかしてこのままこの寺に潜りこんでしまふしかない、と、橙は腹を決めていたのである。

自分の哀れな身の上と、噂の妖怪寺にやってきた理由を即興で一席ぶちあげたのもそのためだ。

いつでも逃げられるように様子を窺いながら、さりげなく周囲に視線を巡らせる。ざっと見渡した中には、相変わらず化け狸の姿は見当たらないように思えたが、なにしろ化けることにかけては狐よりも優れるともされる妖怪だ。さっきみたいについて何時不意を打たれるとも限らず、油断はできない。

（それとも、あいつが狸だったのかな？ ……あんまりそんな感じじゃなかったけど）

ぬえと呼ばれていた少女の姿を思い返し、橙はわずかに首を傾げる。

そんな橙の内心を知ってか知らずか、周囲を取り巻く妖怪達は、互いに侵入者に対する妥当な処置の相談を続けていた。

「ムラサ船長、一輪、どう思う？」

「うーん……」

「……そうねえ」

反応は捗々しくない。半信半疑——いや、四信六疑

といったところか。

中でも一番、警戒を強めているのがナズーリンだ。鼠らしい猜疑心の強さで、不信任を隠すことなく、大きな耳を揺らしてじいっと橙の顔を覗きこんでくる。

「やはり、君は——」

彼女の妙な迫力に、仮にも猫と鼠という関係も忘れ、気圧されるままに、橙は硬い唾をこくりと飲み込んだ。

「ほらほらナズーリン。そんなに怖がらせなくてもいいじゃないですか。ここを頼って来た子に不躰なことばかり言うものじゃありませんよ」

助け船はすぐその隣から来た。

「ご主人様。ですが、こう次々に新顔ばかりだと」

「命蓮寺は来るもの拒まずです。聖には後で私から説明しますから。……橙さんと言いましたっけ？」

「は、はい」

「私は寅丸星。この寺の——まあ、ご本尊の代理のよな事をしていきます」

背には仙人のような羽衣、立派な鎧。寅丸星と名乗った彼女は、そつと身をかがめ、橙に視線を合わせてにこりと微笑む。高い背に短い髪、黒と黄色の縞模様。ふわりと鼻先をかすめる匂いに、橙は確かなる強者の証を感じ取る。

(わ……!!)

毘沙門天の威光を纏うのは、威風堂々たるネコ科の王者の佇まい。初めて目にする虎妖の迫力に、橙は我知らず姿勢を正し、ぴよんと丸まっていた背中を伸ばして畏まった。

「私の一存だけでは決められませんが、どうかそう固くならずに。いろいろ辛いこともあったのでしようが、もう安心です」

そう言つて、星は優しく微笑んだ。橙を案じるその言葉は、まるきり子供扱いされているようなものだったが——妙にくすぐったいのと気恥ずかしいのとながい交ぜになり、橙は俯いてしまう。

「……むう」

それを見、ナズーリンは不機嫌そうに眉を潜めた。

「いいのかいご主人、本当に。聖が不在の間にそんな勝手をして」

「ええ。責任は私がとります。皆も良いですね？」

「いいんじゃない？ 星がそう言うならさ。表だって反対する理由もないもの」

「……まあ、ぬえが驚かしちゃったことについては謝らないといけないよね。あとでとつちめて聖にお説教、お願いしないと」

結局——星のその一言が、橙の扱いを決めていたらしい。話は決まったとばかりに皆が立ち上がる。

「二三命蓮寺へ、ようこそ」

声を揃えての歓迎に——

橙は内心、えらいことになっちゃったなあと思いつつ、ぎゅうつと落ち着かない胸元を握り締めた。





命蓮寺の朝は早い。

……というか、本当に洒落にならないくらい半端なく早い。

まだ空が白み始めるよりずっと前から起き出して、氷みたいに冷たい井戸で水浴びを済ませ身繕いをして朝の勤行が始まる。冷たい板の間に座らされて、二時間近くも眠気と戦いながら退屈な念仏を聞かされるのである。しかももれなくヤマビコによる音響完備だ。耳を伏せていてもお構いなしの大音量ステレオに気が遠くなったのは一度や二度ではない。

ようやく終わったと思えば慌ただしく朝餉の用意。肉も魚もなく、一汁一菜にも届かないような質素な食事を味気なくかき込むと、続けて僧坊の掃除に洗濯、

さらに本堂、境内、墓地に広い庭の手入れと、あとからあとから雑務が続く。その合間には修行と經典の暗誦が入り、休む暇などないに等しい。……寺の修行なのだから当然ではあるのだが。

何よりも、寒いのがいただけない。

橙は普段、マヨヒガの縄張りで陽だまりに寝そべり、ぬくぬくと布団にくるまっている化け猫なのだ。隙間風の入り込む簡素な僧坊、堅い煎餅布団での寝起きはとても耐えられず、質素で厳格な新天地での生活はあまりにも馴染まなかった。

「……………ううう……」

そんな訳で、命蓮寺での生活三日目にして早くも音を上げた橙は、裏庭の掃除をサボって縁側に突っ伏し潰れているのだった。命蓮寺の想像以上の魔窟ぶりにすっかり委縮し、自慢の尻尾も耳も、毛並みは乱れ艶を失ってぐりと垂れ下がっていた。

妖怪狸の調査どころか、雑用に追われて疲れ果て、

夜は寒さで満足に眠れず、なにもできていない有様である。

「はあ……もーやだ……」

泣き言が口を突いて出る。干からびたみたいなこんな生活、まともに付き合っていたら本当にどうにかなってしまいそうだ。文句のひとつも言わずに肅々この辛く厳しい修行の日々を続けている、他の妖怪達のことだ。橙には信じられない。

けれど、すっかりめげながらも、橙がいまだに逃げ出せずにいるのは、いまだ耳の奥に強く残る、藍と交わした言葉のせいだ。

「……う……。負ける、もんか……」

短いながらも、ここでの暮らしで分かったことがいくつか。

まず、命蓮寺の化主である聖白蓮は、しばらく寺を留守にしているということ。行き先のやりとりで靈廟がどうこうと聞こえはしたが、詳しい理由までは分か

らなかった。

その間、寺を代行として治めているのが毘沙門天の化身であるという星。橙の大先輩である（ネコ科という意味で）本物の虎妖であるらしいのだが、信じられないことに、とても肉を喰らう獣とは思えないくらいに仏門に馴染み、本物の仏のように立派な立ち居振る舞いをしていた。その清徳さを見込まれて毘沙門天の代行すら務めるくらいだというから相当だ。

そして他の妖怪達——舟幽霊の村紗水蜜、入道使いの雲居一輪と雲山。毘沙門天の使いとして逗留しているダウザーのナズーリン、最近入門したばかりというヤマビコの幽谷響子。主に寺で暮らしているのはこの辺りの面々であり、他にも出入りしている妖怪は数多い。例のぬえという少女や、橙は会った事がないが覺や唐傘お化けなどもいるのだとか。

皆親切で信仰に篤く、決して悪い妖怪ではないのは橙にも分かるが、人にあらざるものが仏の教えを守り、

それを説く人間に従うというのは、まるで飼いなさられているようで、どうにも橙には健康的には思えない。

「……こんなことしてる場合じゃないんだけどなあ」

命蓮寺が無視できない勢力であることは十二分に思ひ知らされるほど、橙は命蓮寺の修行体験コースに没頭させられる羽目になっていたが——そのせいで橙はいまだに最初の目的である化け狸の姿も居場所の手掛かりすら見つけられていない。

（こんな所にとついたら、疲れて死んじゃうよ……）

辛い修業の繰り返しに麻痺していた思考能力が、日向ぼっこのおかげでようやく復帰してくる。とつとと当初の目的を達して、一刻も早くこんな魔窟からは撤退すべきだった。

そうと決めれば善は急げだ。橙はすぐに行動に移る事にした。

（まだ見かけてないってことは、まだ行ったことのない所に居るはずだね……）

幸い、昨日今日と真面目に修業に付き合っていたお陰でそれなりの信用はできたのか、他の妖怪達の姿は見えない。橙は箒を放り投げ、落ち葉の残る庭をあとにする。

身を潜めながら垣根の傍を小走りに抜け、身も軽やかに木の上へ駆け上がる。僧坊の屋根を伝って参拝客の目を逃れながら参道の門を迂回し、大きな声で挨拶をするヤマビコの騒音に紛れて境内を駆け抜けた。

宿坊で食事の支度をする村紗と一輪に気取られぬよう先を急ぎ——

その時。

「どこへ行くんだい？」

「んにゃ?!」

いきなりの背中からの声に、橙は飛び上がった。

顔を半分引き下ろした冷やかな視線を向けられ、恐る恐る振り向く。大きな耳を動かしながら、現れたナズーリンは、手にした箒を橙に突き付けてきた。

「感心しないね。掃除を放り出して。そっちは本堂とは反対方向だよ。君の持ち場は別だろう？」

「……………え、えつと…………」

「…………やはり警戒していて正解だったね。どうにも怪しいと思っていたんだ」

言い淀んでしまう橙に、ナズーリンは不愉快そうな表情を隠そうともせずに小さく鼻を鳴らした。彼女の身長よりも長いし字のロッドをするりと腰後ろから抜き放つて、その先端を橙に突きつける。

「な、なんのこと、かな？」

「とぼけても無駄だよ。とつくに正体は割れてるんだ、観念したまえ。境界の賢者、すきま妖怪八雲紫の式の！」

ざわり。橙の周囲に無数の気配が生まれる。

波のように押し寄せる——小さな小さな灰色の毛玉の大群。数百ではきかない数のネズミ達が、包囲網を敷いて橙を取り囲んでいた。いつの間にか逃げ道を塞

がれ、橙は境内のはずれに孤立させられていたのだ。

橙は知る由もないが、これこそが寺の周辺から野良猫達を駆逐し、心傷^{トラウマ}レベルで萎縮させた原因である。

「大方、すきま妖怪の指示だろうね。聖の不在を狙って悪巧みでも仕掛けに来たところか。…………この寺が妖怪に甘い事を知って、正体を偽れば潜り込めるとても踏んだんだろう？」

「違うよ、私は、そんな——」

「まだ白を切るつもりかい、調べは付いているんだ！」

——視符「ナズーリンペンデュラム」

ナズーリンは問答無用とばかりスペルカードを提示し、一方的に命名決闘を宣言した。橙が受ける意志をみせるよりも先に、賢将は符を発動させる。

ナズーリンの周囲に顕現した巨大な正八面体——銀色のペンデュラムが轟音を立てて旋回を始める。実体

化した巨大な質量は、高速で回転し、蛇がくねるような軌道で加速し、橙へと打ち出される。

「わわっ!!」

周囲を構わず薙ぎ払うペンデュラムに、橙は慌ててその場を飛び退いた。轟音を伴い旋回する鋭い尖端が地面をこつそりと削り、大きな穴を穿つ。

「……ち」

ナズーリンは手元の鎖を繰りながらペンデュラムの軌道を変え、次々に橙へと叩き付けてきた。綺麗に積み上げていた薪の山が吹き飛び、橙の胴の三倍はある太さの太木がへし折られてゆく。

「ちょ——やめて!! 危ないじゃないっ!!」

弧を描くペンデュラムから距離をとり、橙は叫ぶ。

「ふふん、臆したのかい? 八雲の式が聞いて呆れるね」

「なんだと——っ!!」

鼻で笑われ、さすがの橙もちんときた。あからさ

まな挑発だが、ネズミが相手なら話は別だ。馬鹿にされたままなんて猫の沽券に関わる。

「殺^{シヤ}ア————ッ!!」

妖獣の相もあらわに、憤りと共にたつぷりと因縁を乗せた視線を叩き付け、橙は鎚弾の斉射をナズーリンが操るネズミの群れに撃ち込む。危機を悟って、蜘蛛の子を散らすように逃げてゆくネズミ達。橙は敵からの着弾を無視して身を撓め、楔弾をさらに放ちつつ、低く地を蹴る姿勢から右の爪でナズーリンの脚を狙う。妖獣の念を込めた必殺の爪——が、自慢の鋭さを持つ一撃はがきんと硬い手応えに弾かれる。ナズーリンが手元に引き寄せたペンデュラムを盾にして橙の攻撃を受け止めたのだ。鎚弾も同様に防がれ、賢将には傷一つない。

「んな……!?!」

「やれやれ、考えの浅い猫は扱いが楽でいいね」

目を剥く橙を、次のペンデュラムが襲う。咄嗟に身

を引いたものの完全には避け切れず、巨大な質量に跳ね飛ばされて、橙の身体は庭を跳ねた。

んぎゅ、と地面に押し付けられた顔が土に擦れ、口の中に砂が入る。泥にまみれた顔をぬぐい、じやりじやりと舌を擦る不快な味をへっぺと吐き捨てて、橙は頭上を振り仰いだ。

「ははっ、どうした、威勢だけかい？」

「このっ……!!」

再び湧いてきたネズミ達がじわじわと橙を取り囲む。ざわりと尻尾が逆立った。牙を剥いて唸る橙に対し、悠然と宙に陣取るナズーリンはペンデュラムの数を倍に増やし、その旋回速度をさらに上げた。

幾何学的な動きで並ぶ八面体は橙の撃ちこむ弾幕をことごとく防ぎ、弾いてゆく。

（――攻撃じゃなくて、防御用のスペル……!!）

符の性質を見誤った事に橙は歯噛みする。安い挑発に引つかかって、真正面から突っ込んだ所にももの見

事にカウンターを食らった格好だった。

弾幕勝負において、相手のスペルがどんな仕組みで、どんな狙いをもつのかを見極める事は、勝つための基本中の基本だ。

……脳裏をよぎる主の教えに、橙はぶんぶん顔を振る。そんなものは耳が萎れるくらい何度も聞かされてきたことで、今更忘れるようなことじゃないはずなのに。

周囲を取り囲むネズミ達は、徐々にその包囲を狭めてきていた。吠えて威嚇する橙にもまるで動じず、弾幕で撃ち払ってもパツと散つては元に戻り、一糸乱れぬ動きで橙を追い詰める。見事に統率されたネズミの軍勢に、橙は逃げ場を奪われていった。

旋回するペンデュラムに邪魔されて上空に逃れる事もできず、苦し紛れに再度繰り出した楔弾も、再びペンデュラムの分厚い壁に阻まれる。

「おっと、危ない危ない」

喧嘩を吹っかけておいて守りに入る彼女の慎重さに軽く呆れる橙。だが、旋回する多面体の間に潜りこむことができず、橙は反撃の糸口をつかめない。

優位を得ても、賢将は攻撃の手を緩めなかった。戦列を組んで押し寄せる弾幕と、左右から放たれる大玉の連携が、徐々に橙の余裕を削り取っていく。

「くう……っ」

避ければ避けるほど追い詰められる位置へ誘導されている事は分かっているのだが、将棋の詰め手のように精確なナズーリンの弾幕から逃れられず、橙はいよいよ後を失くす。

再び繰り出されたペンデュラムが、身をかがめた橙の頭上をかすめた。

「さあ、白状してもらおうか！　いったい何を企んでいる！」

「~~~~ッ!!」

うねる鎖がじやらりと音を立て、巨大な質量がさら

に加速。風を切って繰り出されたペンデュラムが、化け猫を容赦なく押し潰さんとする。眼前に迫る危機に橙の背中がぞわりと逆立ち、尻尾がびくりと跳ねた。

そこから先の動作は、ほとんど橙の意識を無視して行われた。

境界の賢者の式、三途の河幅すら計測する八雲藍によつて念入りに組み上げられ、打たれた式は橙の自我と融け合い、橙本人の意識を阻害せずにシームレスに機能を発揮する。

橙を脅かす危機指数が閾値を突破。警告と共に常駐型の防御機構式が待機命令を解いて活性化する。六千四百三十七万八千行の式が休眠状態から高速で活性化し、準稼働状態へ移行。

上位構造体八雲式群は十八次元に折り畳まれた高速演算域を展開して自動化動作を次々に実行。本体から全身の制御を奪い取り、一次式保存領域に確保していた桜点を元に森羅結界を展開し、ペンデュラム

を蒸発させた。

脈打ち活性する式の行動規範^{プロトコル}が弾幕のもつとも濃い部分を視認^{スキャン}して弾き出し、ばら撒かれた大玉の一带に靈撃をぶち込み、突破・相殺する。

響く轟音、閃光。危険を察知したネズミ達は、即座に包囲を解き、我先にとその場を逃げ出してゆく。

「……む!!」

いきなり機動精度を上げた橙に、ナズーリンが顔色を変えた。

橙は身を丸めて地面を飛び回り、細かく左右に跳ねて大玉を誘導。行動指針の中から多少の被弾は覚悟の上で広域を活用した回避行動を選択する。

弾幕の密度を下げて狙いを絞らせないようにしつつ、ステップに複数の罠^{フエイト}を織り交ぜ、ナズーリンの動揺を誘う戦術だ。

「く……」

賢将が初めて動揺を露わにする。守備に長けた。ペン

デュラムの制圧力は、近距離での狭い領域で最も効果を發揮する。いくら数を増やそうとも、距離を離されてしまえば空隙が生まれ、回避は容易だ。

それと並行して橙はナズーリンの弾幕を組み上げる構成要素を演算、物理パターンの関数まで逆解析し、攻撃を構築する変数を特定する。

「——そこだ!!」

弾き出した解の元、意図的に作っていた回避のリズムを崩し、機動を左右^{二次元}から上下^{三次元}へ。ペンデュラムの動きを読んで大きく誘導。その隙間へ鋭く身を寄せた。横から縦へ変じる動作に、ナズーリンは対応しきれない。符を抜いて高く掲げ、橙は大きく地を跳ねる。

——鬼神「飛翔毘沙門天」

渦を巻き螺旋を描く楔弾の作る牙がペンデュラムを打ち砕いた。驚きに目を剥くナズーリンの柔らかな首

元を挟るべく、橙が式の導く冷徹な解のもとに爪を突き立てんとしたその時。

「やめなさい二人ともッ!!」

境内に、大気をびりびりと震わせるほどの音圧すら伴った、大喝が響き渡った。

同時に、突如天を突くように盛り上がった大きな水柱が、二人の元へと押し寄せた。風呂桶をひっくり返したような大量の水が二人を押し流す。

「ふあっ!!」

「にゃ!!」

浴びせかけられた冷水に獣の本能が反射的に恐怖を感じ、委縮した体が自然と丸まった。引込んだ爪が虚空を掻き、視界が青く染まる。

「っ、がぼっ………!!」

声を上げる暇すらなく、橙は大波に飲み込まれていた。訳も分からないうちに肺の中から息が絞り出され、少女の口からがぼと白い泡が立ち昇る。

うねる波、渦巻く水流、青い水が橙の全身を押し包む。上も下も分からなくなつてゆく中で、準稼働まで起動していた式も見える間に剥がれ、流水にさらわれて溶け落ちていった。

「けほ、げほっ………!!」

大波は、現れた時と同様にあつという間に引いていった。

境内の端まで押し流され、びしょ濡れになった橙はぶるぶると首を振つて飛沫を飛ばす。突然のことに飲み込んでしまった水はやたらと塩辛く、目に沁みたま。全身にへばりつく不快な匂いもして橙は背中を丸めむせながら顔を擦る。

その隣、同じく溺れかけたナズーリンが、水を吐いて身を起こし、境内の一角へ声を荒げた。

「っ、ムラサ船長、何をするんだっ——」

「落ち着きなさいっての」

舟幽霊、村紗水蜜は手にした柄杓を返し、激昂した

ナズーリンの顔にぱしやんと水をぶつけた。文字通り濡れ鼠となつて目を白黒させる彼女の前に、爪先を立ててしゃがみ、顔を覗き込む。

その隣には、腰に手を当てて呆れ顔の一輪。

「あんだね、こんな所で弾幕なんてちよつとは周りのこと考えなさい。参拝の人が巻き込まれたらどうするつもり？ もう、ぬえならともかく、あんだまでどうしちゃったのよ。聖がいないと誰も彼も好き勝手始めちゃつて!!」

「う……」

冷水と一緒に指摘を受けてようやく頭に昇っていた血が冷めたか、ナズーリンはバツが悪そうに視線を足元に向ける。

「橙さん、大丈夫ですか？」

「けほっ……んう、……うう……」

駆け寄つた星に手を引かれ、橙はごしごしと顔を擦りながらようやく身体を起こす。

酷い有様だった。全身ずぶ濡れで泥まみれ。濡れた服が身体に張り付き、尻尾も耳もぼたぼたと雫を垂らしている。橙はぶるぶると頭を振つて水気を飛ばし、しきりに痛む目を擦った。水の中で目を開けられない橙には、さっきの大波は少々強烈過ぎる一撃だ。

咳き込む橙の背中をさすつてやりながら、星は沈み込む部下に視線を向ける。

「ナズーリン、いくらなんでもこれはやりすぎです。橙さんが何をしたというんですか」

「何を言うんだご主人っ、私は、そいつが悪事を企んでここに潜り込んだきたのを——」

「……ナズーリン」

静かに名を呼ばれ、ナズーリンは口を嚙む。毘沙門天の化身を務める虎妖の一言は、感情に任せた反駁を押しとどめるには十分だった。有無を言わせぬその迫力は、対象となっていないはずの橙まで、思わず硬直してしまうほど。

鋭い視線に射抜かれて、小さな賢将は喉の奥で唸りを上げる。それでも彼女はそこで泣き出したり、感情のまま橙を罵るような無様を晒す事はなかった。

「……すまない」

小さな声で謝罪の言葉を喉から押し出し、橙に頭を下げる。

そのままナズーリンはもぞもぞと大きな耳を動かし、決まり悪そうに俯く。

「その、……幾分、感情的になっていたことは確かだけれど」

猫が相手なんだ、しょうがないだろう、と小さく口の中で言い訳をし、

「信じてくれ、調査自体に私情は挟んでいない。その子が八雲紫の係累であることは間違いないんだ。……

ダウザーの威信にかけて、嘘はない」

「え」

一度は収まりかけた事態がまたややこしい方向に転

がり始めた気配がした。ナズーリンは気圧されることなく、ゆっくり皆の顔を見回す。

「彼女はその立場も、素性も偽ってここにやつてきた。それを怪しむのは、別段おかしいことじゃないだろう？ 仮に、彼女が八雲の式を辞めたなりして行くところを失い、困った末に命蓮寺を頼ったというなら、敢えてその事情を黙っている理由はないはずだ。それなのに、どうしてわざわざ嘘を吐いたのか。……彼女をこのまま寺に置くというのなら、それについて納得のいく理由が聞きたい」

「……ふむ」

村紗、一輪が顔を見合わせ、星までもが考え込む。

至極、もつともな理屈だった。橙が八雲の式の式であるという事実は、ナズーリンが先走った理由としても十分なものだったからだ。先頃の守矢神社の来訪以来、新興勢力が次々に現れている幻想郷に置いて、結界の管理者である八雲紫の動向は、それだけ重要な意

味を持つのである。

居合わせた妖怪たちの視線が集まる中、橙の顔から血の気が引いてゆく。

(ど、どうしようっ……)

当たり前の事にすら考えが及んでいなかった。動機こそ橙個人のものとは言え、ナズーリンの指摘は概ね当たっているのだ。そして、仮にこの状況、橙が自分の独断だと主張しても、妖怪の賢者の式の式という立場は、それだけで十分に主の、ひいては紫の非になりうる。己の考えの甘さに、橙はただただ、言葉を失っていた。

「どうしたんだい。話せないってことはないんだろう？」

「……………」

本当の事は言えない。かといって、上手い言い訳も思い付かなかった。焦れば焦るほどぐるぐると思考が堂々巡りし、気持ちまでもが空回る。一番いいのは何

もかもほっぽり出して今すぐに逃げ出すことだが、四人に囲まれ、式も剥がれてしまった状態でそれが可能とは思えなかった。次の手段は藍に助けを求めることだが、それも難しい。

橙に打たれた式が剥がれれば、そのことはすぐに主である八雲藍の知るところとなる。緊急性に迫られれば藍も様子を見に来る可能性もあるのだが——橙が不注意で式を剥がしてしまうことは多く、しかも直前にあんな形で喧嘩別れをしたばかりだ。果たしてそう都合よく事が運ぶのだろうか。

第一、自分の未熟を棚に上げて、一体どんな顔をして助けを呼べと言うのか。橙にだって、ちつぽけな二股尻尾にかけて、譲れないことはある。

(ううう……うにやああ……ッ)

いよいよ袋小路に陥った橙が、小さな頭をオーバーヒートさせかけていたその時。

「……ああ、待て待て皆。ちよいといいかの」

助けは全く予想外のところからやつてきた。

「——マミゾウ？」

その名前に、橙は反射的に顔を上げていた。

「一輪ちゃん、みんなに土産じゃ。後で食べておくれ」

「ああ、どうも」

濡れた髪が張り付く視線の先——のんびりとした声の主は、人数分の折り詰めをひよいと一輪に投げ渡し、鼻の上に乗せた丸っこい眼鏡を押し上げる。

茶のベストに波船模様の染め抜きをした長いスカート。肩には紺の毛織の外套を羽織り、頭の上には緑の榆の葉。

二ッ岩マミゾウ。橙の探し求めていた藍の宿敵——妖怪狸その人である。

「この件、儂に預からせて貰えんか？」

茶目つ気たつぷりに、ふさふさとした縞模様の大きな尻尾を揺らし、橙の探し求めていた二ッ岩の古狸は、すきま妖怪の式の式が全く予想していなかったことを

言ってきた。

佐渡の二ッ岩狸は、屋島の禿や阿波の金長大親分に並び称され、武闘派で鳴らした古狸だ。外の世界では狐たちに血の掟を持つて当たつたと噂され、自らの領土である佐渡を余所者に踏ませぬよう、狡猾にして卑劣な策を打ち、島に攻め込まんとする狐達を残らず海の底に沈めてしまったなどという逸話である。

さぞ極悪卑劣、恐ろしくも狡猾な狸なのだろうと思つていただけに、徳利を抱え、愛嬌のある丸眼鏡の奥に笑みを絶やさぬマミゾウの姿がそれと結びつかない。「ちよいと前から聞かせて貰ったが、要するにすきま妖怪殿の式を寺においておけんという話のようじゃの。なら、儂の所なら角は立たん。同じ化生のよしみじゃ、捨てる神あればなんとやらじゃよ」

「いいの、マミゾウ？」

「……良いも悪いもあるもんかね。なあに、皆に迷惑はかけんよ。白蓮ちゃんには、戻ったらまたあらため

て話をさせてもらうとするわい」

「じ、しかし……」

「いいじゃないですか」

同意の声を上げたのは、これまでじつと事態を見守つていた星だ。

「ナズーリンの指摘ももつともです。でも、私としては、橙さんの言葉をいたずらに疑いたくはありません。命蓮寺はそのような寺であつてはならないですし、聖はそのようなことをなさないはずです。……であるならば、ミミゾウの提案は渡りに船でしょう」

言つて、寅丸はさらにナズーリンへと視線を合わせ、
「ナズーリン。この寺に居る者達が皆、最初から聖を慕つていたわけではなかったはずです。肌の合わない相手であれど、お互いを拒絶するのではなく、適度な距離を保つこともまた肝要。このまま彼女を追い出すよりは、却つて良いと思います」

彼女の真摯な口調に、ナズーリンはやや気押されな

がら——不承不承といった体で頷く。

「……仕方ないな。ご主人様が、そう言うなら」

「なら決まりじゃな」

これで手打ちとばかりにぽんとひとつ大きく手を叩き、ミミゾウはにこやかな笑顔を浮かべる。いつしか場の空気から毒気は抜け、呆氣に取られ流されるままの橙だけが、目を白黒させていた。

袖振り合うもた生の縁・廻





マミゾウに連れられ、橙は僧坊の風呂場へとやって来ていた。

先頃の温泉ブームにあやかっただけ、命蓮寺にも参拝客向けに天然温泉の湯殿があり、僧坊にも湯が引かれている。地下深くから豊富に湧き出す良質の単純泉は寺を訪れる里の老若男女に好評を博していた。そんな人気の温泉だが、水嫌いの橙にはさして興味を引くものではない。昨日も一昨日も、入浴の時間には鴉もびつくりの行水で済ませている。

だが、それも今は話が違ふ。

脱衣所の床に座り込んでびしょ濡れの服を脱ぎ、脚に絡みつく黒タイツを苦勞して剥ぎ取る。洗い場にべちやりと放り投げた服は、ごわごわと硬く軋んで気持

ちが悪い。腰の上、ゴムが食い込んだドロワーズの下には、擦れたような赤いかぶれが出来ていた。

「……うえ」

すん、と腕に鼻をつけてみれば、べた付く不快な感触に、藻の腐ったような嫌な匂い。舟幽霊に浴びせられた水はただの水ではないようだった。猫の本能は今すぐ砂浴びをして匂いとべたべたを取りたいと訴えていたが、二股尻尾の沽券にかけてそんな幼い振る舞いは自重しなければならない

一糸まとわぬ姿となり、橙は洗い桶を手に湯船に歩み寄った。なみなみと湯をたたえた檜の浴槽から湯面をじつと睨むことしばし、覚悟と共にえいと気合いを込めて頭からお湯をかぶる。

洗い場にばしゃんと大きく飛沫が散る。ぶるぶると身を揺すって水気を飛ばしたいのを堪え、何度もそれを繰り返す。

「ぶあつ……」

風呂桶のお湯が半分を切る頃になって、ようやく気持ちの悪い感触を洗い流すことができた。尻尾と髪の毛を落としてようやく一息つき、ぺしやんとその場に座り込んで大きく息を吐いた。

「……………はあ……………」

助かった——の、だろう。まさか当の狸本人に助け船を出されるなんて思いもしなかったけれど。

おろおろしているうちにどういう具合か本命の相手の懷に潜り込む事ができたわけだが、その経緯を見ればお世辞にも上手くいったとは言いがたい。繰り返す不注意と失態が何度も招いた自業自得の危機を、偶然の上に偶然が重なって助けられただけの事だ。引き上げられた先が泥船だと言う可能性だって捨てきれない。

おまけにずぶ濡れになってお気に入りの服まで台無し。どんよりと頭の後ろが重く、気分も沈む。波にのまれた時にたらふく水を飲み込んでしまったせいでお腹も重く、まだ喉と鼻の奥が痛んでいた。二本の尻尾

は元気を失って洗い場にぺたりと垂れ下がるばかり。

「にやあ……………」

知らず、溢れそうになった涙に、橙は慌てて目元を擦る。

ネズミなんかには負けそうになった悔しさと、安い挑発にひっかかり、迂闊にも式をフル稼働させてしまったことへの後悔がこみあげてくる。相手を侮った挙句、最終的に自分の正体までバラしてしまう結果となったのだ。

油断せず、最大限に効率よく式を稼働させていれば、あの程度の弾幕に圧倒される事もなく、自分が八雲の式である事も隠す事が出来たはずなのに——

（——そうだ、式!!）

一番の重大事を思い出し、橙は自分の身体を検める。一縷の望みをかけ、縋るように確認を繰り返すこと三度。僅かな期待は無慈悲な現実にあっさりと打ち砕かれた。

主の打ってくれた式はあの大波で全て解け、綺麗さっぱり欠片も残らず落ちてしまっていた。ここに居るのはただの化け猫、素の橙一匹である。

「うにゃあ……」

喉から落胆の鳴き声を絞り出し、橙は湯船の縁にもたれかかる。

式というものは、それが高度で強い機能を備えていればいるほど繊細なものになる。幻想郷随一の式の使い手、八雲紫直々の薫陶を受けた藍の式もその例に漏れず精密なものであった。そうした強力な式はいざとなれば非常に危うく脆いため、慎重な扱いが要求される。特に厄介なのが電気と水で、これらを浴びると式はあっさりと剥がれてしまうのだ。外の世界のコンピュータと言う式も同じなのだと言われたことがあった。

一部の式にはそれらへの対処を講じた防御機構も組み込まれているが、橙に打たれた式にはそこまでの機

能は付与されていない。これには橙の化け猫としての性質を捻じ曲げることのないよう、負担を掛けぬように配慮されている側面もあるのだが——橙にとつてこの状況で式を失うことは、戦力的大幅減に他ならない。それは即ち、もう一度弾幕になったら、今度はナズーリンにすら敵わないだろう事を意味していた。

「……………」

あらためて、自分が丸裸で敵地のただ中に居る事を思い出し、橙は背筋を這い降りる冷たさにこくりと唾を飲む。

ちょうどその時、実にいいタイミングで風呂場のドアが押し開けられ、そこからひよいとマミゾウの顔が覗いた。

「終わったかの？」

「にゃーっ!？」

跳び上がった弾みで湯船に頭から飛び込み、橙は一瞬溺れかけるほどに我を失う。

慌てて浮上し、ぴゅうと口から水を吐いてむせる化け猫。腰上までしかない水で溺れるなんてあまりの情けなさにまた緩みかけた目元をぬぐい、橙は背筋を逆立て、精一杯の威嚇を奮めて風呂場の入口を睨む。

「ふうーッ!!」

「おう。すまんすまん。驚かすつもりはなかったんじやが……」

橙の恨みがましげな視線に、マミゾウは湯気に曇った眼鏡を外し、レンズを拭きながらバツが悪そうに頭をかいた。

「——どうもこの様子は僕の悪い風聞が立ちそうなんで、ちよいと前を隠してくれると嬉しいのう」

「うにゃ!？」

自分が惜しげもなく凹凸のない素肌を晒してしまっていた事に気付き、橙は慌てて湯船の中に身体を漬ける。いい加減水は浴び飽きたつもりだったが、それでも馴染まないお湯の感触に背筋がむずむずした。

「そこに着替えを置いておくぞい。お前さんの服は……おう、これじゃな」

手際良く洗い場に積み上げられた橙の服を拾い上げ、マミゾウはううむと一言。

「む、そう言えばこっちにはこいんらんどりーなぞ無いんじゃないあ。……手洗いなんぞ何年振りかのお……。ええい、格好つかんが一輪ちゃんにお願いするか」

「あ、あの」

ぶつぶつとつぶやくマミゾウの背中に、橙は声を掛けた。ん、と肩越しに振り向くニツ岩狸に、ぐつと拳を握って告げる。

「あ……ありがとうございます……」

お世話になったらお礼を言う。主に躰けられた通りに頭を下げると、マミゾウは眼鏡の奥の目を細め、口元を緩めた。何故だか見えている橙まで落ち着くような笑顔だった。

「着替えたら表に来ておくれ。ああ、急がんで良いぞ。」

ゆつくりでな」

言い残し、マミゾウは外套の裾を翻して去ってゆく。遠ざかる足音に思わず呆けてしまつてからしばし。

橙はぴしゃんと頬を叩いて、決意を新たにする。

過ぎた事は後悔したつて仕方がない。なにはどうあれ、これからののだ。

「……よしっ」

ぐっと拳を握り、橙はもう一度、ざぱりと頭からお湯をかぶつた。



ほこほこと湯気が立ち上る頭にタオルを乗せ、生乾きの耳がせわしく揺れる。

先月までの夏の陽射しも今ではすっかり和らぎ、吹き抜ける涼やかな風は肌を撫で、湯上がりの身体には心地いい。太陽はすっかり傾き、秋の空は早くも夕刻

の気配を見せている。

「ん、済んだかの？　じゃあ行こうかい」

僧坊の玄關で待つていたマミゾウが、よいしよと腰を上げる。後に続いた橙はそのまま借り物の草履を履いて、玄關を降りた。

「尻尾が窮屈じやろうがしばらく辛抱しておくれ。穴を開けるわけにもいかんしのお」

橙が身に付けているのは寺の雑務を務める妖怪たちが着ている黒染めの単衣だ。普段とは違う足元のすかさした感覚がいまいち馴染まず、橙は何度折つてもずり落ちてくる袖を捲り直し、まだ毛並みの湿った尻尾を所在なげにくねらせる。

この妖怪寺で修業をするものはこれを身につける決まりになっているのだが——律儀にそれを守っているのは一輪くらいのもので、他の妖怪達は見えての通り。橙を除けば一番新顔の響子ですらあの格好なのだから、ほとんど形骸化していると言つていい。

マミゾウの住まいは僧坊から本堂を挟んで反対側の庵であつた。生け垣に囲まれた小ぢんまりとした屋根は、寺の敷地の外とも内ともとれる絶妙な距離を保っている。橙が見つけれなかったのも道理で、彼女の立場を如実に表しているとも言えた。

道行く途中、橙は足を速めてマミゾウの隣に並んだ。二本尻尾に力を込め、顔を上げる。

「あの……」

「ん？ なんじゃ？」

どこから取り出したか、マミゾウは見事な細工の煙管を咥え、ぷかぷかと煙を吐き出した。人懐こい笑顔でにこりと微笑みかけられ、橙は思わず言葉に詰まる。だが、勇気を奮い立たせて橙は顎に張り付いた舌を動かした。

「どうして、私を助けてくれるんですか？」

「おや、おぬし、あのまま見捨てられた方が良かったんかの？」

「で、でも」

「佐渡の二ツ岩狸が九尾狐の式を助ける理由がない、と？ それは道理じゃなあ。こちらでも儂の恐ろしさが伝わっておつて何よりじゃ」

「にや!!」

どうして、という驚きがそのまま言葉に出た。ぴんとまつすぐ跳ねた二本の尻尾が僧服の裾を大きく捲りあげてしまう。

一瞬あとに、迂闊な事をしたと気付いたがもう遅い。慌てて自分の口を塞ぐ橙を見て、マミゾウは大きく口を開け、歯を覗かせてかかか、と笑った。

「そう警戒せんでも良い。おぬしの事は知っておるよ、もう大分前からのう」

一体どういうことか——問い返す事もできない。貫録たつぷりに歩き出すマミゾウの醸し出す大物の気配に、橙はすっかり吞まれてしまっていた。

そうこうしているうちに離れに着き、橙は、マミゾ

ウに続いて玄關を上がる。

「お邪魔します……」

「ん、気にせんでいいよ」

気さくに答えたマミゾウの元へ、廊下の向こうから飛んでくる影がある。

「お迎え御苦労。なんぞ変わった事はあったかの？……あん？ 瓢森の銀蔵が？……あやつも諦め悪いのう。いくら言われてもお断りじゃというのに」

人、鳥、獣、蛙。子供のラクガキめいた彼等は、どうやらマミゾウの使い魔らしい。マミゾウの荷物と外套を受け取った彼等は甲斐甲斐しく主人を出迎える。

（わあっ……）

人や獣の姿をしたカラフルな線画に案内され、橙も廊下の奥へと進む。

離れは小ぢんまりとしながらもなかなか立派なもので、寺の建築というよりは旅館めいて見える。新築ではないところを見ると、近くに建てられていた民家を

再利用したのだろうか。

庭に紅葉が茂る離れの一室、狸に相応しい十畳敷きの一間に通され、橙はかちこちになつて座布団に腰を下ろした。二本の尻尾は脚の下に挟み、相手に対して敵意のない事を示す。

そうして無意識のうちに猫妖の礼儀を通してしまうほど、橙はマミゾウの前に緊張していた。

一方マミゾウはどかりと座布団の上に胡坐をかき、古妖の貫録たつぷりだ。使い魔に持つて来させた煙草盆に煙管の口をちゃんと叩き付けた。新しい葉を詰めて火を灯し、吸い口をくわえれば白い煙がふわりと立ち昇る。

緊張の中で、橙は出されたお茶にちびりと口を付け、その熱さに顔をしかめた。

「んにゃ!？」

「おう、すまんすまん。おぬしは猫舌じゃったか」
マミゾウがちらりと視線で命じると、奥から駆け寄

つてきた使い魔が湯呑みと急須を抱えてやつてくる。

てつきり狸の部下が住んでいるのだろうと思つていたが、どうやらここはマミゾウ一人の住まいであるらしい。家事の担当はこの不可思議な色とりどりの使い魔達のように、彼等は橙の傍にも興味深げに近づいてくる。

そつと指を伸ばせば、鳥型の使い魔が嘴を伸ばしてつんつんと橙の爪をつつき返した。

「さて——どこまで話したんじやつたかな」

自分の湯呑みを傾け、マミゾウは吐息。

「そうそう、おぬしの主の事じやつたな。こちらに来る前に色々調べさせて貰つたんじやよ。長生きしておるせいで伝手は色々もあるもんでな。……なにせ九尾と言えばかの傾国の大妖。幻想郷に狐の総大将が居るというのが本当なら、ここの狸たちはさぞ肩身の狭い思いをしておるんじやろうと思つての」

事実、マミゾウがこちらに来て程なく、幻想郷各地

の狸の親分衆達はこぞつて命蓮寺に詰めかけた。酒に食い物にと山の献上品を抱えてやつて来た彼等は、口々に狐たちの横暴と狸達の窮状を訴え、高名なる佐渡の二ツ岩狸に救いを求めてきたのだという。

「なんでも九尾狐は幻想郷の支配者とも言える大妖、すきま妖怪八雲紫の後ろ盾を得て益々増長し、悪辣な狐たちを率いて無辜なる狸たちを虐げておると言うんじやな。その専横ここに極まれりと聞かされるにつけ、こりやあ相当に血腥いことになるなと覚悟までしておつたんじやがなあ」

言いながら口元を緩め、マミゾウは煙管の端をぴこぴこと上下させる。

「じゃが実際に確かめてみれば何のことはない、九尾は配下を纏めるどころか、他の妖怪の式になつて忙しく走り回るばかり。狐たちの統治などに微塵も興味を示しておらんのだ。ま、狐たちの方は九尾が何も言わんのを良いことに、勝手に自分達の総大将と称してお

るようじゃがなあ。かつては傾国で鳴らしたあやつが、一体なんの心変わりか、本人にその氣がまるでないとなれば仕方なからうがな。……いやはや、少しばかり狐どもにも同情するわい。一応、狐の増長が目之余つた分だけは、きつーく仕返しさせて貰つたがのお。

まあ、恥ずかしながら狸の方も似たようなものでな、各地の親分衆も団結して事に当たるわけでもなく、めいめいに狐たちと小競り合いする程度。旗印がなければ打つて出る氣概もない。ありやあどちらも団栗の背比べじゃ。実に平和で結構なことよ」

かかか、と高らかに笑うマミゾウ。自分の同族の振る舞いすら皮肉にする口ぶりに、橙は俄かに彼女の言う事が理解できず、ばちくりと瞬きするばかりだ。

そして。そこまで承知の上でどうして自分を助けたのか、橙にはますますわからなくなる。

「さてなあ、あまり深い理由はないかも知れん。おぬしが狐じやつたら、少しは苛めてやつてもよかつたか

も知れんが」

もう一度、笑みと共に白い煙の輪を吐き出して、マミゾウは大きな尻尾をふわりと揺らした。

「こうして危急に陥つて尚、あの狐がすつ飛んでこないところを見るに、お前さんにも戻れぬ事情があるんじゃないろう？」

「それは……その……ええと……」

答えられない問いかけに、うつむく橙。

離れの十畳間に、静寂が落ちる。口籠る橙を急かすでもなく、マミゾウはゆつくりと紫煙をくゆらせる。

お互い何も言わぬまま、数分ばかり静寂の時が過ぎた。——と。俯いた化け猫のおながくうと音を立てる。

すつかり落ち込んだ気分とは対照的に、身体は正直だった。

顔を赤くする橙に、マミゾウはくわえ煙管のまま、ぷかぷかと煙を吐き出して笑う。

「……かつつか。ま、言いたくないことを無理に聞

き出しても仕方がないのう。面倒な話は抜きにして、今日はおぬしの歓迎会と行くか」

くすりと微笑んだマミゾウはそう橙に宣言し、煙管を煙草盆へと押し込んだ。

言うが早いかマミゾウの使い魔達が奥の間からちやぶ台を引っ張り出し、用意した鍋に山のような材料を持ち出して鍋の準備を始めた。

よいしょと腰を上げたマミゾウが、その場でぐるん一回転すると、たちまちその姿は三角巾、割烹着姿に変じる。手洗いを済ませた二ッ岩狸は携帯ガスコンロに慣れた手つきで火を入れて、昆布で出汁を取った鍋に、豪快に刻んだ具材を次々と放りこんでゆく。

橙に配慮してのことか、葱の類は抜いてあった。吸血鬼にとつての太陽のようなもので、妖怪になれば食べられない事はないが、ぴりぴりと辛いので得意ではないのは確かだ。

鍋の出汁の具合を見つつ、マミゾウは呟く。

「寺の食事は健康的で実に結構なじやが、やはりちと物足りなくてのお」

マミゾウも、一週間に半分ほどは他の者たちと共に寺で食卓を囲むそうだが——もう半分はぶらぶらと人里を出歩いて外食したり、こうして自分の部屋で料理に勤しんでいるらしい。

「おぬしも驚いたんじゃないかの。ここの食事は来たばかりの妖怪には慣れんじやろ？」

「はい。お肉、食べないなんて……」

妖怪が妖怪としてあるためには、人肉食は欠かせないものだ。良くも悪くも、妖怪は人を襲うことでその存在を確立させている。人を恐れさせることで成り立つ妖怪が、それを拒絶することは妖怪としての存在の死にも繋がるのだ。

「まあ、全員がなまぐさを避けとるわけでもないんじやが……ちよいと白蓮ちゃんのところは特殊じやからなあ」

そんな事を言いながらもマミゾウは手を止めない。いつの間にか鍋はいい具合に煮立ち始め、この上なく美味しそうに音を立てる。

煮立つ出汁は昆布と鰹節の利いた色の薄い関西風。白身の魚に白菜、茸、豆腐の立てる湯気に、橙は口から零れかけていた涎を啜る。

「仏門でも三種の浄肉と言う教えがあつてな。たとえば生臭であつても、相手のためを思つて出されたものならありがたく感謝して食べましょうというものじゃ。

なに、難しい事は抜きで、こうして美味しいものにありつけることに感謝すれば良い」

「マミぞー、今日のご飯何ー？」

あたりに良い匂いが漂い始めた頃合いを見計らつたように、廊下からぱたと脚音が響く。障子の向こうから覗いた顔を見て橙は『げっ』と声を上げそうになつた。

背中に左右非対称の羽根をもつ、黒衣の少女——封

獣ぬえ。なんと彼女、あの平安京の夜を騒がせた伝説の大妖怪、鵺その人であるという。寺の妖怪達に説明されても自分とそう変わらない外見に橙は耳を疑つたものだが——どうやらそれは事実のようだ。

命蓮寺の一員として数えられてはいるが、最初の遭遇以来、寺では滅多に顔を見掛けなかった。出会いが最悪だっただけに橙はそれに安堵しているのも事実だったが——まさかここで出くわすとは。

じりじりと距離を取りながら警戒を強める橙を余所に、マミゾウは三角巾を取つてぬえを出迎える。

「おお、ぬえ。ちょうどできたところじゃ。折角じゃからアレも開けるか。もつて来ておくれ」

「おっけー」

ぬえも慣れた様子でぱたと土間に走り、一抱えもある清酒の瓶を手に戻ってくる。

「……ん？　こいつどうしたの？」

そこでようやく、ぬえは今気付いたというように橙

を見た。

「ああ、ちよいと不幸な身の上でな、事情があつて寺に駆け込んだそうなのじゃが、儂が預かることになつてのお」

「ふうん……マミゾーも物好きだねえ。昼間、ナズーリンが追つかけて回してたのに」

「袖振り合うもなんとやらじゃよ。……それよりぬえ、おぬしそれ全部一人で吞むつもりじゃなからうな」

「えー、いいじゃんか、マミゾーのけち」

「貴重品なんじゃぞそれ。もう蔵元も残つてないんじやが」

清酒の瓶を――恐らくあれがマミゾウの『とつておき』なのだろう――抱きかかえ、離そうとしないぬえ。

以前の印象とまるで違ふ、二人のやり取りはまるで祖母と孫娘を見るようだった。呆氣にとられる橙に、マミゾウはこつそりと片目をつぶつてみせた。

「思うところはあるじやろうが、仲良くしてやつてお

くれ、橙」

「――え、つと……」

佐渡の二ツ岩狸と、京の夜に君臨した正体不明の鶴、二人が一体どんな経緯で仲良くなつたのか。橙ならずとも氣になるところだ。

不審げではあつたが、諦めて瓶から離れると、ぬえは自分の腕を持つて卓袱台に陣取る。

橙の所在についてそれ以上抗弁をしないところを見ると、彼女もマミゾウには一定以上の信服を置いているようだった。

「マミゾー、はーやーくー!! 腹減つたよー」

どうでもいいやとばかりに腰を下ろし、行儀悪く脚を投げ出して、ぬえはかんかんと自分の腕を叩く。

「わかつたわかつた……さて、もうよかる。橙、お前さんはこれじゃ」

「あ、はいっ」

橙も下ろしたばかりの腕と箸を貰い、席に着く。ぬ

えは早々にコップの冷酒を空け、卓にぺったりと突っ伏して頬を膨らませる。

「はあーあ、やんなつちやうよもー。色々面倒でさあ。

私はちよつと里で人間からかつただけなのに、ムラサも一輪もすぐ怒るんだもん」

「何やらかしたんじゃ？」

「弓なんか持ち出して私の事馬鹿にしてる生意気なガキがいたんだよ。むかつくから井戸に落としてやつたら、なんか寺子屋の先生とかつて五月蠅いのがでてきてさー」

「……おぬしそれ怒られんで済むと思つとつたのか？」
「るっさいなー」

呆れた様子のマミゾウに口を尖らせ、寺の面々の横暴を訴えるぬえ。妖怪本来の性質を抑制する命蓮寺の方針は、妖怪達の倫理からすれば決して正しいものではない。ぬえとしては人里でのひと暴れも、妖怪の正当な権利を行っただけの事でしかないのだろう。

「ま、良い。では、頂くとしようかの」

「いただきます」

ぬえとマミゾウが揃って手を合わせたのを見て、橙も慌ててそれに倣う。きちんと言うことを聞いているぬえが少し可笑しかった。

取り分けた鍋を、ふうふうと冷ましながら口に運ぶ。

「にや……!!」

口の中でとろけるような、脂の乗った白身の鰯——生まれて初めて口にした海魚の衝撃に、橙は目を丸くしていた。

変化が緩み、ぴんと頬からヒゲが立つ。

抗いがたい潮の風味——遠く猫の遺伝子に刻み込まれた、母なる大海の味。橙は海の魚を口にした経験はほとんどないが、それでも分かる。これこそが、至高なる猫の食性であると。

海の風味はそれほど抗いがたいまでの美味さを持っていた。

「おう、そう言えばお前さんは幻想郷育ちじゃったか。海の魚は初めてかの？」

「ん……前に、はぐ、はふ。……紫様がむぐ。持ってきてくださったのを、むぐ、食べたことがありますっ」

それでも、海の幸なんて滅多に食べられない御馳走だ。ましてこんな新鮮な鱈なんて初体験である。もふもふと、冷ますのもそこそこに、白身魚を頬張り、火傷しそうな舌を出しながら、箸は止められない。この数日粗食だったことを割りいても、この美味しさは格別だった。

夢中で食べ始めた橙に、ぬえも対抗心を燃やしたようだった。

「マミぞー、おかわりっ」

「わかったわかった」

カラフルな使い魔たちがぬえの茶碗に白飯をよそう中、二人の様子を眼を細めて眺め、マミゾウは鍋の鱈をつつき、くいと燗酒を煽る。

「……んむ。川魚も美味いが、やはり僕は海魚のほうが好みじゃな。八雲の賢者とやらも、大結界に海を含めなかったのは片手落ちじゃなあ」

「白蓮には感謝してるけどさ。やつぱ味気ないご飯ばかりだと気が滅入るよね」

ぬえの口ぶりからするに、他の住人達もちよくちよく抜け出してくることはあるらしい。あの立派な星までもそうなのだと知って、橙は少し意外に感じた。

「食い物に関して言えば、人間の食欲さは見習うべきじゃのお。外じゃ自然食ぶーむだと言うて、粗末な食にも高い金を払うようになって久しい。元をただせば精進からして、なまぐさものを食べれない坊主たちが千年もかけて考え出したものじゃしな。げに恐ろしきは食への執念じゃなあ」

そう語るマミゾウの仕草こそ、どんな妖怪よりもずっと人間臭い。人間の中にも、老境に差しかかった者の中には妖怪とまっとう渡り合うようなツワモノがい

るが、マミゾウはそんな年季の入った人間を思わせる妖怪だった。

もちろん藍も人間のなかに混じれと言われれば、そのように振る舞うことは苦もなくやつてのけるだろうが——マミゾウのそれはなんというか、どこまでも自然体なのだ。

さも、そこにいるのが当たり前という顔をして、妖怪であることをさして隠してもいないのに、人間達が自然とそれを受け入れる。化かし化かされた佐渡の大明神は、こうして千年以上もの時を過ごしてきたのだろうか。

「いやあ、食べられる側のマミゾーがいうと含蓄あるねえ」

「五月蠅いのう」

額に皺を刻むマミゾウに、きししと、口元から牙を覗かせてぬえは笑い、腕の中身をすごい勢いで口の中に放りこんでゆく。

悔しいが、この味を知ってしまうと橙も反論できなかった。

「ほれ、おぬしも食わんとなくなるぞ」

言われるまでもない。橙も負けじと鍋を頬張り、力強くお代わりを叫ぶのだった。



第四章



「さて」

一夜明け、洗濯を終えたいいつもの服に袖を通し緊張の面持ちで正座した橙を前に、マミゾウは腕組みを一つ。

本堂では修行中の妖怪達を集めて日課の読経が行われている時刻だ。マミゾウも命蓮寺の世話になっている建前上、たまに顔を出すらしいが、普段は基本的に彼らと関与はしていないという。

白蓮への面通しは、行くところを失った妖怪を、ひとまずマミゾウが預かるということであつさりと済んだ。妖怪の救済を掲げる化主は、まさに聖人然として橙の身の上を案じ、もし橙さえよければずっと寺に居ても良いのだというような人の良いことを躊躇い無く

口にした。世話になる橙ですらこんなにあつさりと大丈夫なのだろうかと心配になってしまうほど。

案外、この寺に棲む妖怪達はこんな白蓮の人柄を信頼し、同時に案じながら放っておけないと思つて集まっているのかもしれない。

「こうしておぬしを預かることになったわけじゃが、何もさsenseでただ居付かせておく訳にはいかん。儂が九尾の式を奪ったと風聞を立てられるのも宜しくないし、かといつて人質のように誤解されてもかなわんしな。……そこで橙、おぬしに一つ聞きたいんじゃが、お前さんの顔は人里に知られておるかの？」

橙はしばし思案の後、ぷるぷると首を振る。猫たちのコミュニティを除けば橙の顔は広いとは言えないだろう。直接橙を見知っている妖怪というのは限られているし、猫は基本的に外向きのテリトリーをもたないのだ。

幻想郷縁起にはいろいろと細かいことが書かれてい

るが、あれを丁寧に読みこんでいる人間というのは実はそんなに多くない。しかも著者である阿求の偏見や勘違いが混じっていて、結構間違いだらけなのだ。

「左様か。ではもう一つ。おぬしは計算は得意かの？」

「え？ えっと、苦手じゃない、です」

数字を、計算を扱うことは、式とつての基礎の基礎だ。藍に文字を習い始めたのは式になつてすぐのことだが、漢字を覚えるよりも先に九九を覚えきつた。つい気分屋でひとつの事に集中できない猫頭のことか恨めしくなる事もあるけれど、増えたり減ったりする数字を眺めるのは嫌いではない。ひよつとすると、それは主と自分の尻尾の数を比べたときから始まつていたのかもしれない。……そんな橙の返事を聞き、マミゾウは満足げに頷く。

「うむうむ。ならば良いな。お前さんには僕の商売を手伝ってもらおうでしょう」

「里での仕事……ですか？」

耳慣れない単語に橙は首を傾けた。幻想郷でも職を持つている妖怪というのは限られている。妖怪の山や地底のような場所では、天狗や河童がそれぞれの種族に基づいた役割を果たして強固な社会をつくっているが、好んで里に出入りし人間相手に商売する妖怪となれば話は別である。

そこまで人間社会に溶け込んでいる妖怪は、橙には殆ど思いつかない。幻想郷に来て日の浅いマミゾウが、そんな事を言い出したものだから驚いたのだ。

「こつちの狸にも手伝つて貰つておるが、これがなかなか難儀しておつての。姿は変えても真つ当な商売でもつい相手を化かそう、騙そうとしてしまう。化生の因果じゃなあ」

妖怪としての化け狸は、やはり人を化かす事で存在を成り立たせている。それで一時腹は膨れても、マミゾウにとつてはありがた迷惑であるらしい。

「お前さんがその手伝いをしてくれるのならありがた

いのお。……なに、これも見聞を広げる良い機会と思えばよから」

「あの、何をすれば？」

段々と不安になつてきた橙が恐る恐る聞いてみれば、腰を上げたマミゾウは、茶紅に芒の外套を羽織り、灰を落とした煙管を咥えてにまりと笑いながら、傍らにあつた分厚い帳面をぼんと叩いてみせた。

「——金貸しじゃよ」



二ツ岩明神——それがマミゾウの通り名だつた。

その名はすでに人里を含む幻想郷の経済界に知れ渡つており、その商売は実に手広い。金の融通から、経営の相談、麦や小豆の相場、堆肥ビジネスの立ち上げから農業指導、造り酒屋に両替商、反物や染め物の流行柄について、新しい店の立地に門構えの相談、果て

は隣家との土地境界の諍いの仲裁までに及ぶ。

「この度は本当に何とお礼を言つてよいやら……!!」
二ツ岩明神さんの御好意がなければ、今頃手前どもは首を括るしかなかった所で……!!」

「良い良い、お前さんが良い商売をしてくれれば僕も儲かる。持ちつ持たれつじゃよ」

人の良さそうな笑みを、丸い眼鏡の奥から覗かせて。しきりに頭を下げる年配の男性にマミゾウは鷹揚に応じる

金物問屋の主人であるという男は、薄い頭を畳に擦り付け、繰り返し礼を述べていた。

文福——名前を氣にいられて二ツ岩明神の懇意となつた人里の料亭の二階では、昼から延々とこんな光景が続いている。

卓の上で見た事もない桁数の証文や貨幣がやり取りされる前で、橙はマミゾウの隣、文字通りの借りてきた猫の体であつた。

「何から何までお世話になりました、このご恩は必ず……!!」

「んむ、今後ともよろしくな」

部屋を後にする男を鷹揚に見送り、マミゾウは傍らの帳面にさらさらと何事かを書き付ける。

首を伸ばして覗きこめば——『要注意、回収の見込み薄』。

聞けば、二ッ岩明神は故郷の佐渡でもこうして人間社会に混じって、手広い商売を営んでいたという。

丸に一つ瓢の羽織に、大きく房を膨らませた羽織り紐。長く伸ばした髪を背中で結い、立派な商人のいでたちだ。実に世古長けた様子の二ッ岩狸は、卓に残された冷めた茶に手を伸ばした。

慌ててお代わりを用意しようとする橙を制し、湯呑みを手にはあと吐息を一つ。

「次は誰じゃったかの」

「ええと、六辻の白沢さんが——」

「おう、あの親爺殿かい。先月孫が産まれたとか言っておったかの」

「……失礼します」

橙が予定を読み上げると、すぐに別の相手が見せる。十日に一度、こうしてマミゾウは人里の料亭を借りて商売の場としていた。儲けだの相場だのといった生臭いやりとりは、寺の近くにするには少々都合が悪いということらしい。

橙は今日、その場に見習いという体でここに同席している。尻尾は服の中、耳は髪の毛に撫でつけて隠し、人の装いだ。

「いやいや、二ッ岩さんに比べちゃあ、あたしもまだまだ若造だ。とてもじゃないが敵いませんよ。参った参った。」

「……ところで、そちらは？」

ふいに話を向けられ、橙は我に返った。

熱心に商談をしていた糸目の男にきかれ、マミゾウ

は橙の背中をぽんと叩き、

「ん、橙^{トウコ}子と言う。知り合いの娘なんじゃが、いずれは店を継がせたいので、今の内に見分を広めさせて欲しいと頼まれてな。しばらく預かる事になってのお」

「よ、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる橙に、商人はうんうんと頷いた。

「ほほう。そりやあ良いねえ。二ツ岩明神さんのところで商いを学べるなんてのは、商売人にとってなかなか無い幸せだよ。お励み、お橙^{トウコ}ちゃん」

「は、はい」

「そいつあちよいと褒めすぎじゃないかの」

「何をおっしゃるんで。二ツ岩明神さんに脚を向けて寝られない輩は、里のそこらじゅうに居るじゃないですか」

男の世辞にマミゾウも苦笑い。そんな中、橙は隠した耳と尻尾が飛び出ないようにするので精一杯だった。完全な人への変化はとても難しいことなのだが、マミ

ゾウは涼しい顔をしてそれをこなしていた。

化け狸や化け狐——化生にとって、本性というのは隠すべきものとされる。猫であれ狐であれ、『化ける』ことを存在意義にもつ妖怪ならば、いかに自分を偽れるかがひとつのステータスとなるからだ。一方で、耳や尻尾は妖獣としての力の証であり、誇りでもある。それを隠しておくことは化生である自己の否定につながる。

だからこそ、いかに自然に人の姿に化け、ボロを出さずにいられるかが化生の格を決めるのだ。

人里に入る時、マミゾウは必ず尻尾と耳を隠し、人の姿を取る。見知っている者が見ればすぐに彼女と分かる程度の化術だが、それでも、人に交わり力を貸す建前として、マミゾウは妖怪である事を隠すべきだと考えていた。

『ま、商売相手が人であるというのは一つの方便になつておるんじゃないかな。……しかし、人というのは難

儀なものでなあ。それまでどれだけ仲良くしておつても、こちらの正体に嘘が一つ混じる程度で手のひらを返したように妖怪めふざけるな、騙していたのかとこちらを罵る。相手が誰だろうと貸し借りした金の額は変わらんし、隠し事されたくないのはこちらと同じなのにお。橙、おぬしも経験はあるじやろ?』

橙は大きく頷く。人の姿を取れるようになってすぐに一度、藍の式となつて、人里に出入りするようになってから三度、橙を妖怪と見破つた人間達との間で、余計なトラブルを招いた事がある。幸いすぐに危機を察して逃げ出したため、大事には及ばなかったが——『それを理不尽と怒るのは簡単じゃが、儂の見解は少し違つてな。化かすなら、最後まで責任を持つて化かしきつてくれと、人間人は言つておるのではないかと思ふんじやなあ』

『責任を、ですか?』

ぱちくりと瞬きをする橙。聞いたことも無い理屈だ

つた。

『化かすと言うのは、要するに相手に嘘をつくと言う事じやな。その是非は様々議論はあるうが、どちらにせよ嘘というのは心の重しになるものでな。抱え込んでおくと、次第に気持ちも暗く、しんどくなつてくる。それゆえに、全部ばらしてすっきり、重しを放り捨ててしまいたくなるものじゃが、それは騙した側の理屈じやな。

無論、騙された側が気付いておるのなら、なお悪足掻きをするのはみつともないが——相手が騙されたままであるなら、一度抱え込んだ重しは、責任を持つて騙した側が抱えておかねばならん。その重さに耐えられんようなら、そもそも嘘など吐くなどということじやな。だからこそ、儂ら化生はそのための努力を怠つてはいかんのじやよ』

そう語る古狸の口ぶりは、これまで橙が見たどんな大妖怪のものとも違つていた。

これで七人目。仕立てのいい服を着ている歳を取った人間達——恐らく人里ではそれなりの地位や経歴を持つであろう彼等が、揃ってマミゾウに頭を下げ、感謝の言葉と共に去つてゆく。こんな妖怪を、橙は見たことも聞いたことも無い。

里一番の呉服屋、永鳥庵の若旦那から受け取った丁銀を丁寧にしまうと、マミゾウは煙管から白い煙を吐き出した。店の者を呼びつけ、餡蜜に渋茶のお代わりを注文する。

「さあて、今日はこんな所かの。……橙、ご苦労さんじゃったな」

「は、はい」

マミゾウは隠していた耳と尻尾を出し、ううんと大きく伸びをひとつ。

「ほれ。今日のおぬしの取り分じやよ。少ないがのお」

「にや？ いいんですか？」

ちやりんと渡された十銭硬貨三枚に、橙は驚いてマ

ミゾウを見る。里でちよつと買いい食いをすれば無くなつてしまうような額だが、普段、藍からお小遣いを貰うなんて事なんて滅多になかったのだ。

「自分で稼いだ金じやよ、好きにするといいぞい。」

……いや、しかしおぬしが金も銀も扱えて助かるわい。前に西から来たとかいう犬妖^{「ボルド」}にお使いをさせたんじやが、あいつらめごつそり銀を台無しにしておつてなあ」

マミゾウはそう言うが、橙は今日言われるままに金勘定をしたり、客の案内をしただけで、肝心な事はほとんどマミゾウが一人でやつていたようなものだ。

「あの」

「むぐ。……なんじゃの？」

遅いおやつにと餡蜜を口に運ぶマミゾウに、橙は聞く。

「マミゾウ……さんは、ずっとこういう、人間相手の商売をしてるんですか？」

「んー。僕は弾幕よりこっちのほうが得意でのお」

そう言つてマミゾウは手元の紙束を示す。達筆な文字で名前と日付、そして金額が記された紙が束ねられたそれは、二ツ岩明神の商売を記録した帳簿である。

「なに、理屈は弾幕（こ）と同じじやよ。守るべき規範（ルール）があつて、そのなかで金と証文（カード）をやりとりする。……支払うのはコインいっこじや済まぬかもしれぬがな」

スペルカードは、それ単体で弾幕勝負を強いるような強制力を持つわけではない。魔法や妖力を一定の書式に則つて記し、複雑な準備を全て事前に済ませる事で発動を簡単に行っているという点はあるが、結局使用者本人にしか使うことはできないし、他人のスペルを奪つたところでコレクション以上の価値はない。

「この証文も似たようなものじや。契約に関わる当人以外には、ただの数字の書かれた紙でしかない。だが、こいつは同時に複雑でややこしくて、命よりも重い約束の証になるものじやな。弾幕もそうじやろう、お互

いがお互いを信用して成り立つ。ルールなんぞ無視してズルをしようとするれば、勝つのは難しくないしのお」
 そもそも、力の隔たつた人と妖怪が同じ地平に立つて争うための規範だ。スペルカードはデッキ枚数、上限、制限時間、様々な制約をもつて成り立っている。その多くが、実力の隔たつた物でも公平な勝負ができるように工夫されたものだ。

だからこそ、やろうと思えば妖精だって異変の中心人物になれることもあるし、名立たる大妖怪に勝つことだってある。

……あくまで、『可能性』の話ではあるけれど。

「んん……？」

それでも、人間達が後生大事に抱え込んだり、時にはそのために悪事を働いたり命を落したりする『お金』というものが、橙にはいまいち理解ができない。そんなややこしい場所に好んで身を置きたがるマミゾウの事も。

橙はこれまで、彼女のように人として生きようとする妖怪なんて見たことが無かった。

人と妖怪は違う。多くの妖怪達は、本能的にそれを知っているものだ。橙がそんな疑問を口にする、マミゾウは遠い目をして、ぽつりとつぶやく。

「そう言えば、そんな事もあったのお」

——化学復興。

昭和の終わりを過ぎた頃、外の世界ではそんな事を目論んだ狸達が、自分たちの棲家の森から人間達を追いつくため、合戦を仕掛けたことがあるのだという。

多摩に住む彼らは化け術の指南を求め、名のある狸達にこぞって指導を請うた。佐渡にいたマミゾウの元にもはるばる海を越えて使いが来たが、当時既にマミゾウは爛熟し始めた人間の社会から距離を置くことを考えており、戦後の混乱期にこつそりと命を落としたように細工して、表舞台から姿を消していた。

しかし、人間達の繁栄と横暴に不満を抱いていた狸

たちは少なくなかった。

多摩の狸達の元には四国八百八狸の総帥、隠神刑部や屋島の禿、六代目金長ほか、高名なる化け狸達がこぞって力を貸したと言うが——結局は人間達との対立という構図に活路を見出すことはできず、徒に一族の数を減らしたに過ぎなかった。

彼等は合戦を諦め、いち早く人間に同化していた堀之内の狐たちに倣い、人間達に混じって暮らすようになったという。

「あいつらのしたことが正しかったかどうか、僕には分かん。じゃがなあ、そう言う代わり者というのは、案外まだ多くいるものじゃよ。……多分、な」

「……にやあ……？」

首を捻って人間達と一緒に暮らす化け狸達の姿を想像してみようとする橙に、マミゾウはかかかと笑うのだった。



▼五

二ッ岩明神の橙子^{トウコ}としての橙の仕事は多岐に渡った。中でも主なものが、集金と伝達。はマミゾウの代理として、商家や両替商の間を巡る連絡役である。

マミゾウも化術で人や鳥や獣を模した使い魔を使役することができるので、手は十分にあるのだが、表面き人間の金貸しを営んでいる以上それらを大っぴらに使う訳にもいかない。

人の成りといつても耳と尻尾を隠した程度の変化で、明らかに子供の外見なのだが、二ッ岩明神の名前を出せば橙がないがしろにされることはなかった。それは取りもなおさず人里に対するマミゾウの影響力の大きさを示していた。

「こんにはー！」

「おう、お橙ちゃんか。あがんなあがんな。……旦那様、二ッ岩さんがお見えですよ」

「はいはい、奥にお通ししておくれ」

……万事がこんな調子である。

ほんの十日で橙はこれまでの人生の倍近い出会いをするようになった。人里にもあつという間に顔見知りが増え、里の家猫たちとも友達になった。これまでほとんど知らなかった里の路地の道順も沢山覚え、中々の道の美味しい焼串屋も、綺麗な硝子のビーズを格安で扱う露天の場所も知った。

新しい事は戸惑うばかりだったが、橙は年若い妖怪らしい柔軟さで少しずつ仕事を覚えていった。マミゾウも若い妖怪を使うのには慣れたものらしく、いきなり橙の手に余るような複雑なことを押しつけたりせず、橙が仕事に慣れるに従って少しずつ面倒な事を任せるようにしていた。

もともと、橙は数字には強いのだ。八雲の式の扱い

はごくごく単純なものでも、数学や計算の素養がないと不可能である。橙のまとめた今四半期決算の統計表を眺め、マミゾウは唸るように顎を撫でる。

「橙、おぬしこれを一人で書いたのかの？ うーむ、こりや九尾の式なんぞにしとくのは勿体ないのう。ぬえよりよっぽど見込みがありそうじやな」

「えー!? なんだよそれー」

自分は手伝う気なんかまるでないのに、ぬえは不満そうに牙を見せて唸る。

かつての京都を恐怖に陥れたはずの大妖怪は、やる事がないのかいつも庵の近くでマミゾウのやつている事を眺めているのだ。橙としては色々やり辛くて仕方がない。

「しかし勿体ないのお、おぬしのような優秀な式を遊ばせておくなぞ。見る目がないんじゃないやなあ、九尾も」

「でも、藍様は——私の力ではまだまだ、紫様の助けになれないって」

「ふむ。力になれぬことを正直に告げるその誠実さは良し。が、従者の意欲を素直に受け入れんのは悪しじやな。大切に思うことと、その力を伸ばすのは別。おぬしの主は主として従者としては優秀じやが、師としては少々足りぬところがあるのう」

藍のことを悪し様に言われて、本来は怒るべきなのかもしれないが、いまの橙には素直にそうできない気持ちの方が強い。

いつしか、橙にはこの佐渡の化け狸の元での日々が日常となりつつあったのだ。

人里での二ツ岩明神の商売はけして悪辣なものではない。むしろ、人間達が営む金貸しよりもほど誠実であったと言ってもいい。損こそ出さなかったが、無期限・無利子の融資や利益が雀の涙しか見込めないような取引にも進んで応じていた。

「他人の縄張りに後から割り込む奴は、それくらいが良いんじゃないや。『こいつなら一緒に居ても俺の損にはな

らない』と思わせておかねば、始まるものもはじまらんからのお」

そしてまた折りに触れて、マミゾウは金貸しの基本に織り交ぜて化術のイロハを橙に語った。

「……化かすということとはな、橙。相手を知ることから始めねばならん。相手が何を望んでいて、何を欲しがっていて、どんな事を考えているのか。それをよく知って付き合わねばな。

そして、騙すならここ一番という場所で一度きり、これが肝要じゃ。相手を騙すということは、それまでの信頼全部を裏切つてなお利益を出すことじゃからな。騙しようによつては恨まれるし、命を狙われることもある。無論同じ相手に何度も通用するわけがないし、次があるなどと考えるのも論外じゃ。いくら美味しい話でも、それ一度きりできつちりと儲けを出して、それ以上の欲を治めねばならん。……ま、こいつが一番難しいんじゃないかのお」

欲というものと、金というのは良く似ているのだと、マミゾウは続ける。

「金も欲も、わずかであればその意味も価値も些細なものじゃ。ちよいとした小遣い程度なら儲けるのも使うのも大した苦労は要らん。だがこれが一所に集まりはじめると、いつのまにか言うことを聞かなくなるのじゃなあ」

「——なんとなくだけど、わかります」

二ツ岩明神のもとで働くようになって、橙はそれを実感している。初めはただの紙切れにしか見えなかった借金証文が、その実情を知るに従い、今はとても重く感じられる。橙がそう告げると、マミゾウは嬉しそうに頷いた。

「うむ。貧乏だった頃には百万円あれば一生遊んで樂ができる——そう思つておつても、いざそれを手にしてみた時にやれ良かった満足で終わらせるのは至極難しい。橙、金はな、一所に集まるととたんに命を

持つ。……何もせんでも勝手に増えようとしたり、減ろうとしたり、実に厄介じゃよ。

文字通りの這い寄る金貨、"もんすたあさふらいずどゆう" じゃな。"

帳面に並べた出納の金額を、ただの数字と見れなくなる時に。欲が生まれ判断を惑わせる。今のままでいい、という一見謙虚な姿勢でさえ、現状維持という欲なのだ。

本来、流通の仲立ちをするだけのものではなかった貨幣が、いつしか経済という概念を生み、人々の生活を支配していった。気付けば、人間達の社会はそれを抜きにして語れないほどに隆盛している。

そしていつしか、莫大な金は人を支配し動かしてしまふことすらあるのだ。商売にはトラブルはつきもので、橙も我が事ではないながら、何度もそんな場面を目にしてきた。

「儂はおぬしの主のように緻密な計算は出来んがの、

鉄火場の場合数はそれなりに踏んでおるよ。そういう時に頼りになるのはな、普段の行いじゃ。頭の回りの良さ、度胸の有る無し、積み上げた信用、なんでも構わん、おぬし自身の真価が問われるのはその時じゃな。

その、計算できぬ予測できぬ不可解な何かをモノにすることじゃな。理解しろとは言わぬ。感じる。何万回もそれに触れて失敗して、予想外に慣れておく。それが一番良い"

商売には正道はあれど常道はない。利子も手付も一律ではなく、一銭の誤差も許容しない厳格さと、端数を見捨てる豪胆さを併せ持ち、時に理不尽にも見えるほどに肝要だ。明らかに合わない数字を、奇妙奇天烈な理屈で合わせてしまうことだつてあつた。

精確さだけを求めると、なにもできなくなってしまう——数字を扱っていないながらそんな世界があるのだというのは、橙には思いもよらないことだつた。

「藍様なら、もっとうまくやるのかな……」

「さてなあ。金貸しに頭の良さはさほど要らんからの。……まあ、さすがに損得の勘定もできんでは話にならんが、明後日までに一〇万円の儲けが出ると、それだけを見ておるのでは半人前にも届かん。貸し借りをするのは数字ではなく相手じやからの。帳面から顔をあげて相手を見ねば始まるものも始まらんぞ？」

「ううう……」

時に不測の事態に遭遇し、何度やり直そうとしても上手くいかずに、朝から晩まで帳面と睨めっこをして頭から煙を吹きそうになっている橙に、マミゾウは良くそんな事を語った。

「おぬしの主も、その主も。どんなことがあるうと対処できるように計算するが、その及ばない領域を必ず残しておるぞ。……おぬしはそれを全部計算してしまおうとしよるのがいかんのじやろうなあ」

あまりのややこしさに目を回す橙に、佐渡の化け狸はかかか、と笑う。

「人間というのは妖怪に輪をかけて、曖昧なものじゃよ。農らと違つて『なんのために』と生まれてきたわけではないからの。何をするか何をしないかなど、気紛れで変わる。賽の目と同じで、予測しておくだけ無駄になるもんじや」

例えば、付喪神は道具に対する執着から生まれる。彼等が妖怪へと変じる原因が大切に使ってもらった持ち主への感謝であれ、粗末に扱われたことへの恨みであれ、その中心には確固たる芯があるものだ。揺らぎこそ生まれようとも、彼らの行動はその根源に基づき一貫しているものだ。

しかし、人間にはそれが無いのだと、マミゾウは語る。

「泣いた子供がもう笑う。昨日の敵は今日の友。……まったく、奇妙奇天烈、不可思議極まる。面白いぞ、人と言うのはな」

そうやって笑う佐渡の二ツ岩狸の言葉の真意を、橙

は程なく知ることになった。



二ッ岩明神の客の一人が、返済期限を前に一夜にして行方をくらましたのはその翌日のことだった。

橙子としていつものように集金に向かった人里で、さして繁盛しているとも思えない小さな店舗兼住宅の中は、家財道具も残さず蛻の殻となっていた。

「にや……!?!」

確かにここ暫く連絡の滞りがちになっていた相手だが——まさか突然煙と消えてしまうほど胡散臭い相手だったわけでもない。目の前の光景が信じられず、橙は何度も目を擦る。帽子から飛び出した耳が半分はみ出していた。

混乱の中、慌てて店を飛び出した橙は、そこで丁度路地を曲がって来た人影と出くわす。

「おっと」

「にや!?! べ、ごめんなさいっ」

「おや、お橙ちゃんじゃないかい」

驚いて見上げれば、橙がぶつかりそうになったのは二ッ岩明神と懇意にしている糸目の商人である。倒れそうになった橙を支え、帽子を拾ってくれた商人は袖を探ると飴を取り出して橙の手のひらに握らせる。

「どうしたんだい、そんなに急いで」

「あ、あの、ここのお店の人、どこに行ったか知りませんか!?!」

「普賢堂さんかい? さあねえ、あたしやあまりあすことは商売はないんでねえ。ちよいと前に慌ただしくしていたようだったけど……ああ、白沢のご隠居ならご存じじゃないかね」

「ありがとうございましたっ!!」

挨拶もそこそこに、橙は商人に頭を下げると駆け出していた。

その後、男の姿を求めて慌てて里じゅうを探し回った橙だが、その日の夕方になるまでかかつても件の男——普賢堂は数日前に突如行方をくらまし、行き先も分からぬままということ以外、ほとんど何も解らなかった。商売の品も家財道具も、人に頼んですべて処分させているという徹底ぶりである。

もはや自分の手には負えないと判断した橙は、式を使つてすぐにマミゾウを呼び寄せた。

夕暮れ時の陽が差し込む、がらんとした空き家の中、橙から詳しい報告を受けたマミゾウは無言で屋内を丹念に眺め、最後に鋭く舌打ちひとつ。

「——あのダボ、飛びよったな」

「ななな、なんてことだ……」

騒ぎを聞いてすつ飛んできた永鳥庵の若旦那も蒼い顔だ。二ツ岩明神に普賢堂を紹介したのは何を隠そう彼なのである。

信用できる相手と取り持った相手が借金を踏み倒し

て逃げると言う失態に呉服屋の若旦那がぶつ倒れる中、マミゾウは眼鏡の奥にぎりりと鋭い眼光を滾らせ、聞き間違ひと思うほど低い声で短く呟いた。くしやりと証文を握り締め、やにわに腰を上げる。

「橙、行くぞ。追い込みじゃ」

「にや!？」

マミゾウの行動は迅速だった。すぐさま使い魔を放ち、幻想郷中の狸の親分衆に報せを送ったのである。

大恩ある二ツ岩大親分直々の呼びかけに、瓢森の外れの朽ちかけた古寺に、幻想郷じゅうの名のある狸達が詰めかけた。その数はゆうに百を超える。

満月の下、呼びかけに集まった歴戦の狸衆は、やれ性悪鬼を泥船に突つ込んで溺れさせたのだ、狸の大絨毯で狐を十匹絞め殺したのだ、化け勝負で鳴らした魑を罌に嵌めてやったのだ、片目に鉛弾を食らうのと引き換えに獵師をぶちのめしたのだ、どいつもこいつも揃いも揃って剣呑な面構えの古強者ばかり。

それが口々に気炎を上げ、鎧に槍に大太刀と物騒な得物を持ち出して詰めかけているのだ。あたりには熱気が渦巻き、すぐにも大喧嘩が始まりそうな緊張が張り詰める。

「おうおう聞いたかよう野郎ども、今こそご恩返しの時だぞ！」

「二ッ岩の大將に盾突くたあ、なんつてえ太え野郎だ、俺らが直々に叩ッ殺してやる！」

「言うまでもねえ。舐めた真似した人間なんぞ、一人残らず縊り殺してやらあ！」

(……うわあ)

次々といきり立つ彼等の傍で、橙は生きた心地もしない。邪魔にならないようにじっと身を縮ませ、廃寺の端に控えるばかりだ。

「……皆、揃ってくれたかの」

狸衆の怒声がいよいよ激しさを増す中、まんまるの月を背に、満を持して廃寺の堂の中からマミゾウが姿

を現した。

「大親分!!」

「大將!!」

狸達の興奮は最高潮に達し、割れんばかりの歓声が起る。大音声に橙はたまらず耳を塞いでいた。

そんな中、広場の中へ壮年の狸が進み出る。太い眉に厳つい顔、鍛えられた太い手足。額と頬には大きな二本の向こう傷まである。

彼こそ瓢森ひょうしんの銀蔵、ここいら一帯の森の狸達の元締めである。

「二ッ岩殿!! 話あ聞かせて貰いましたぜ!! 瓢森さびれ寂森かすか、幽森むくろ骸森他、ここいらの十と七つの森の狸、揃って心得ておりまさあ。大親分がひと声欠けてくださりやあ、今すぐにでも出張れる用意はできておりやす!!」

満月の下、合戦のような鬨の声が上がった。いまにも敵陣を前に全軍突撃を仕掛けそうな有様である。基

本的に、狸というのはその場の雰囲気呑まれやすい、直情的な生き物だ。

マミゾウはしかし、そんな彼等を前に落ち着きはらつて咳払いを一つ。

「おほん、うおっほん。あー、待て待ておぬしら、ちよいと聞け」

ざわつく狸衆を腹鼓一つで黙らせて。マミゾウはゆつくりと、集まつた者達の顔を見回した。おもむろに縁側を降り、地の上に膝を付いて深く頭を下げる。

「おぬしらの気持ちは大層有難いがな、これはな、儂の不幸際じゃ。人の成りをして失敗しくじつたんじゃないかの。むしろ頭を下げんといかんのは儂の方じゃよ」

「お、大親分!! 何をなさるんで!!」

「やめて下せえ!! 俺らなんかに!!」

敬愛する二ッ岩の大親分にいきなり頭を下げられ、狸の頭領達は動揺する。彼等が慌てて引き起こそうとするのを制し、マミゾウは静かに言った。

「その上で、恥を忍んで頼みたい。どうか儂に力を貸してくれんか。本来なら余所筋の儂が言える義理はないのは承知の上じゃ」

「何をおっしゃるんで!! ここの森の狸は一匹残らず、まだ乳離れもしてねえ餓鬼まで、大親分には大恩のある身じゃありませんか!! そんな水臭え事は言わねえでくだせえ!!」

「そうだ、頭を上げて下せえ!!」

口々に叫ぶ親分衆。ゆつくりと間を取ってから、マミゾウは顔を上げた。

「……そうか。儂は果報者じゃなあ。恩に着るぞ、皆」

「お、大親分……!!」

「馬鹿野郎、しゃつきりしねえか!!」

このやり取りに、涙もろい親分の中には泣いて喜ぶ者も出る始末。先程までの殺気立った気配は薄れ、いまや彼等はすっかりマミゾウの掌の上だ。百を超える狸達をあつという間に統率してしまつた彼女の手際に、

橙は内心で舌を巻くばかりだった。

「くれぐれも慎重に、万全を期してくれ。人間をな、侮つてはいかんぞ。おぬしたちの腕前を疑う訳ではないがの、追い詰められた人間はどんな姑息で卑劣な手に出るとも知れんのじゃ。霧雨の所の嬢ちゃんに化けて、手酷い目に遭わされたものも居ると聞く。

古きより狸は化術に優れ、だからこそ人は躍起になつて儂らを殺そうとする。決して先走らんようになつたらん理由であたら若い命を落とすのは、儂が承知せんぞ。……まあ、流石にあやつの正体が実は狐じゃつたとかなら、底いようもないがのお」

この説得に、場はどつと沸く。そうしておいてからマミゾウは魔寺の奥へと声をかける。するとそこに控えていたカラフルな使い魔達が、次々と皿に膳に酒にと、珍しい外来の品をたつぷりと乗せた御馳走を運び出してくる。

「景氣づけじゃ、さあ、派手にやってくれ」

マミゾウの一声に、どんと腹鼓が鳴り響く。

たちまち始まつた壮行会という名の大宴会の中、橙は若い狸の娘たちに混じり、給仕として彼等の間を走り回る。

二ツ岩に弟子入りしたマヨヒガの化け猫のことはここでも良く知られていた。あちらへこちらへと料理を運ぶ中、橙は古株の狸たちに次々と呼び止められる。

「おう、橙つてのはお前さんかい。ちよいとこちらで、よく顔を見せてくれんかね」

「――あらまあ可愛い子じゃないの。猫にしておくにやあ勿体ないねえ」

「にや!? あ、あのつ」

「……なあ、お前さんさえ良けりや、ウチの息子の嫁にどうだい。なに、不自由はさせねえよ。二ツ岩の太親分のお弟子さんなら言うことねえや」

「にや!?」

「ちよいと禪吉! 抜け駆けは許さないよ!! アン

タン処の甚六の嫁にやるくらいなら、妾^{あな}の娘の方がよっぽどマシさ!! ねえ?」

「にや、にやああ?」

わっと歓声が起こり、狸の親分衆たちが一齐に詰めかけてくる。俺だ儂だ妾さ僕だと我先に名乗る彼らにたちまち引つ張りだこ。危うく親分たちの間でもみくちやにされかけた橙は、目を回しながらマミゾウに庇われる。

「これこれ、そう困らせちゃいかんぞ。橙は預かっておるだけじゃからの」

「あ、ありがとうこあいまふ……」

「橙、おぬしはもうちよいと、自分のことを知るべきじゃなあ」

すきま妖怪の式の式。その立場は十分に、狸達が興味を持つに十分なのだ。

宴会は夜更けまで続き、一同の結束はいよいよ高まった。宴の締めには、さらにマミゾウから支度金とし

て親分たちに結構な金額が渡され、すっかり感極まつた狸衆は夜も更けぬうちからたちまち幻想郷の各地に散った。

彼等も皆、マミゾウほどではないがめいめいに化術に通じ、年経た老獪な狸の頭領達だ。それが生え抜きの舍弟達を繰り出して、人に妖怪に混じり人海戦術を繰り広げた。

一部の修行不足の狸達が人里で尻尾を出して見破られたり、巫女にちよっかいを出して退治されかけたりといった一幕はあったものの、一度団結して事に当たる彼らの連携の巧みさは目を見張るものがあつた。

かくして搜索はあつという間に進み——宴会から数えて三日目の夜。

嘴^{きざし}森の弾佐という化け狸が、ついに男の所在を突き止めたのである。

どうもこの普賢堂を名乗る男、初めからマミゾウの借金を踏み倒す心算であつたらしい。表向きは胡散臭

さを隠して商売をしていたものの、どうも出自からして怪しく、人目を盗んでは後ろ暗い悪事もこなし、人里でも疎まれる事を繰り返していたという。呉服屋の若旦那には悪いが、見る目がなかったということだろう。

彼には以前に天狗と取引を持った経験があるらしく、その伝手を頼って妖怪の山に逃げ込んでいた。逗留先が妖怪の山の歓楽街となれば、いくら橙が人里を探っても足取りがつかめないのは道理であつた。

「でかした！」

報せを聞いたマミゾウは喜び、すぐに荒事にも化術にも長けた屈強な狸衆を十人ばかり選び、妖怪の山へと踏みこんだ。

天狗の膝元である妖怪の山には、侵入者を蟻一匹通すまいとする厳重な警備網がある。本来なら外部の妖怪が向かおうと問答無用で叩き出されるのがオチだが、マミゾウはそれらを巧みにかわしていった。

話の通じる者には情に訴え、機を見るものには理を説き、不真面目な者には金を掴ませ、権力に弱いものは上司に話を通し。それらには当てはまらない真面目な堅物達は、同じ天狗に化けてやり過ごして。

マミゾウ達は一刻もせぬうちに、妖怪の山の中腹にある歓楽街へと辿り着いていた。古くからある山の艶街だが、最近には新たに温泉も掘られ、その賑わいは以前よりも濃い。

「ちよいと邪魔するよ」

茶でも飲みに来たかのような軽い調子で宿の暖簾を潜ったマミゾウは、店主を呼び寄せて巧みに話を通し、その案内で男の元へとなだれ込む。一連の手並みの鮮やかさに、橙はただただ感心するばかりで、後を追いかけるのが精いっぱいであつた。

普賢堂を名乗る件の男は広い座敷を貸し切り、数名の配下と共に白狼天狗の芸妓を侍らせての乱痴気騒ぎの真っ最中だった。借金を踏み倒した身としては大層

な肝つ玉と言えよう。

追手がかかつているとは思つてもいないのか、すっかりだらけた様子の男達を見て、マミゾウは店の者達を下がらせた。荒事に慣れた狸衆が襖を吹き飛ばさんばかりにこじ開けると、芒に満月柄の羽織を肩に掛け、螺鈿の煙管を咥えた二ツ岩狸は、狸衆をずらりと背後に従えて、座敷へと上がり込む。

「よう、久しぶりじゃのう」

凄みを利かせたマミゾウのひと睨みに、あられな姿の少女芸妓の乳に顔をうずめ、酒に赤らんだ鼻の下を伸ばしていた助平面が、面白いくらいに蒼白になった。

一拍遅れて、どつと狸衆が押し寄せる。たちまち座敷は喧騒に包まれた。上がる悲鳴、逃げまどう芸妓達。

ひっくり返つた食卓が吹き飛び、徳利が宙を舞い茶碗が割れ障子が破れて吹き飛ぶ。

何人かの男達は匕首を抜いて応戦しようとするが、マミゾウが一瞥すると閃く白刃はたちまち毒蛇へと姿

を変え、持ち主の手首へとしたたかに噛み付いた。真っ赤に腫れ上がった手を押さえ、悲鳴を上げてうずくまる男達を、狸衆が次々と叩きのめしてゆく。中には鉄砲まで持ち出そうとする狼藉者もいたが、それは狸達の十疊敷フィルドカベットきに締めあげられて意識を失つた。

「てめえ、女のくせに調子に乗りやがって！」

用心棒気取りの浪人が酒臭い息を吐き散らし、得物を手に左右から打ちかかる。

鉄杖を手にした男達の動きはなかなか素早かったが、マミゾウの敵ではない。二ツ岩狸は剣呑な鉄杖を無手で捌き、かち上げた膝を彼らのにきび面へ叩きこむ。

ごきりと骨の碎ける容赦のない音が響いた。

鼻血を吹き出し泡を吹いて白目をむく男の身体を投げ飛ばし、二ツ岩狸の進撃は止まらない。

上へ下への大騒ぎの中、這いつくばって座敷から逃げようとする普賢堂の眼前に、マミゾウはどかりと脚を叩き付ける。その頃には男達の手下も軒並み叩きの

めされて畳の上に転がつていた。

卓の上、手つかずだった升酒をぐいと呷り、眼鏡を光らせてマミゾウは嗤う。

「お前さん、この二ッ岩相手に逃げられると思ったのか？ いやはや大層な度胸じゃのう。ん？」

「ひぐッ……!!」

男の胸倉を掴みあげ、一睨みで殺しそうな陰を載せた視線を叩き付ける。

一見、華奢な少女の姿に見えても、その実は年季の入った大妖怪である。その膂力は人の比ではない。男は完全に委縮して、がくがくと震え上がった。

「妖怪の金なら踏み倒しても申し開きが立つとも思つたかのう。なあ、にしてもこの有様はちいと調子に乗りすぎとりやせんか。ん？ 舐めるのもいい加減にせえよ」

「っ、こ、ここは天狗の膝元だぞ!! こんな騒ぎをして、ただで済むとでも——」

「ほうほう、騙そうとした妖怪に頼るんかい、こいつは見上げた根性じゃなあ」

マミゾウはぎらりと眼鏡のレンズを光らせ、容赦なく男の襟首を締め上げた。男の喉から蛙の潰れたような呻きが漏れる。

二ッ岩狸の動きに抜かりはない。既に守矢の巫女から八坂の神様を通じて、天狗の一人にこの件を黙認させる了解を取り付けている。これだけの騒ぎを起こして白狼鎮台の警備隊がすつ飛んでこないのがその証拠だった。

ようやく自分が孤立した事に気付いたか、男はがくがくと震え始める。

「そろそろ観念して、念仏でも唱えたらどうじゃ」

「ひ……イッ」

マミゾウが歪めた口元から、肉食の生々しい牙が覗く。ぎらりと尖った歯の隙間から漏れる熱い吐息に、男は既に泡を吹いて倒れる寸前だった。苦悶の呻きの

合間に脂汗を流し、喰わないでくれ助けてくれと叫ぶ男に、マミゾウは呆れて煙管を上下させる。

「阿呆。歳いくつた人間のオスは匂いもきついし筋張って美味くないんじや。誰が好きこのんで喰うもんかい」

その一言に、男の顔にあからさまな安堵が浮かぶ。直後、マミゾウは男の股蔵に容赦なく手を突っ込むと、むんずとそこを掴み上げた。

「そんな金にならんことなんぞするか、たわけが」

まるで万力。ぎりぎりと言が響くほど尋常ではない力加減で雄の命を握りつぶされ、男はついに顔を泡を吹いて白目をむく。力を失った男の身体は、散らかった畳の上に投げ出された。

「あとは任せるぞ。良いかの？」

威勢良く頷く狸衆達が、気絶した彼を戸板に乗せて運び出してゆく。

二ッ岩の大親分に背いた彼の顛末が、一体どのような

なものになるのか——橙はそれを想像して身震いした。汚らしいものをぬぐうように懷紙で何度も手を拭いて、マミゾウは大きく吐息。

恐る恐る様子を見に来た宿の主人に、迷惑をかけたの、と懷から修理代には十分な額の金子を押し込んで、マミゾウは煙管から大きく白い煙を吐き出した。

「やれやれ。偉い手間じやったわい」

疲れを滲ませて吐息を一つ、マミゾウは身を潜めて、茫然としていた橙に声をかけた。

「さて、済んだの。橙、居るかい」

「は、はいっ」

ぴよんと飛び上がり、倒れた屏風の陰を飛び出す橙に、マミゾウは再度煙管をくわえて、長く煙を吐き出しながら、

「脅かして済まんかったな。……のう橙。おぬしの主は、こういうのはお前には見せんようにしておったかね？」

最初、何を聞かれたのか分からずにいた橙だが、やがてゆつくりと、大きく頷く。

——橙にも分かる。誰かの上に、社会の中に立つということは、多かれ少なかれ、こうした側面をもたねばならないということだ。まして、妖怪の賢者としてその名を知られる八雲の大妖怪の腹心ともなれば、避けて通れないことだろう。

「藍様は……私には、知ってほしくはなかったんじゃないかと思います」

答える橙に、マミゾウはそうかと呟いた。座敷の障子をがらりと開け放ち、白み始めた空を見上げる。

吹き込んでくる冷たい風に、室内に満ちていた熱気が静かに散らされてゆく。

「あの男に貸しとつたのは幾らか、覚えて居るかの」「えつと……」

帳簿を捲れば、元金はわずか五〇〇円。利子を付けてもその倍には届かない。マミゾウが今回の件で各所

に支払った詫び料と、親分衆達に振る舞った宴席、支度金を合わせれば、それを遥かに上回っていた。

ふう、と煙の輪を吐き出して、佐渡の二ツ岩狸は言う。

「——その通り、端金じゃな。儂はこの件、眼を瞑った方が損をせんかった。じゃがの、儂はそうせなんだ。その理由がわかるかの」

「……はい」

信頼の裏切りに対して、相応の報復を返す事もまた誠実さであるのだ。答える橙に、マミゾウは目を閉じて小さく頷いた。

足元に散らばった証文を集め、マミゾウはそれを橙に投げ渡す。

「橙、おぬし、この仕事は嫌いになったかの?」「……………」

橙はじつと黙考し、それから静かに首を振った。二本の尻尾を力強く立てて、本心からの偽りない言葉で

ある事を示す。

「マミゾウは満足そうに、そして——どこか安堵する
ように、につこりと笑顔を浮かべた。

「左様か。……なら、おぬしにはもう少し色々任せ
ても良さそうじゃな。きつとおぬしには必要になろう。
妖怪よりも恐ろしい、この資本主義という名の怪物の
飼いならし方がな」

そう言つてマミゾウは肩の羽織を翻し、踵を返す。

満月は山の端に霞み、夜の帳はいつしか薄らいでい
た。

緩やかに、藍から橙へと変わる秋の朝のなか、橙は
じつと、マミゾウの言葉を噛み締めていた。





あの騒がしい夜からまたたく間に日は過ぎて、天にはすっかり削れた上弦の月。それを庭に張り出した枝の上のから見上げ、橙はぴんと耳を立てる。

月は化生の力を増すとされ、年経た妖怪ほどそれを大切にするが、橙には満月の価値というものにはまだいまいち実感がわかない。藍に言わせれば月の明かりは人間にとつての太陽のようなものだと言うが、橙は縁側の日向ぼっこも大好きなのだ。

それでも地面に影を落とすほどの強い月明かりをじつと見上げてみると、心なしか身体に活力が満ちるような気分だった。

「なああ————おお——う……ッ」

胸の奥にこみ上げる衝動に任せ、喉を反らしてひと

声、高らかに鳴く。命蓮寺の境内に他に猫の姿はないが、それでも両の耳をぴんと立てて済ませば、遠く鳴き返す猫達の声があった。

ぴりぴりと尻尾の先端にまで伝わる鳴き声の余韻に、どこか胸がざわめく。

——強くなりたい。

こんなにもはつきりと、自分の力量不足を感じた事は無かったかもしれない。

橙は化け猫だ。嫌なことがあっても、美味しいご飯を食べて、陽だまりや炬燵の中でぬくぬくと丸まっていれば忘れてしまうことが常である。しかしあの騒乱の夜からずっと、橙の胸には強い力を欲する憧れめいた想いがあつた。

妖力を蓄えるために、眠いのを我慢して夜毎に月光浴をするようになったのもそのためだ。おぼろげな藍の教え（居眠りせずにもっとちゃんと勉強していれば良かったと思う）の中で、力を得るために少しでも役

に立ちそんなことは全部試していた。

満月ではない月が高く空に登るようになって、眠くならなくなったというのは、わずかながら進歩なのだろうか。

「……よしっ」

十分に月の光を浴びて、二股の尻尾や首筋の後ろに力が溜まったのを見計らい、橙は枝を飛びおりた。くると身を丸めて庭に降り立ち、袖を探って数枚の符を取り出す。

自前の式符^{スぺルカード}だ。八雲の式として必要なスぺルは藍から与えられていたが、それらは全て、命蓮寺を訪れた時の遭遇戦で水を浴びて使いものにならなくなっている。いま手の中にあるのは全て橙が自分で用意したものだった。

マミゾウに頼んで手に入れてもらった楡の厚紙を所定の比率で切り揃え、朝露と夜霧を集めて磨った墨で式を書き込み、作成者を示す肉球でスタンプを押す。

ピンと端まで魔力の通った、鮮やかな四色刷りの藍のものに比べると縁はふにやふにやで印字も雑、構文もまっすぐ並んでいないけれど、それでも橙の精一杯だ。
「ん……」

呼吸を整え、意識を集中させて式符に妖力を通す。

八雲の式は緻密な計算と構文を無数に積み重ねた膨大で精緻なプログラムである。無数の計算によって組み立てられた式を^{インストールし}打ち、対象に本来とはまったく別の機能を付加するのだ。

チルノ達のスぺルのように、元来妖怪が持つ力に名前と形を与えたものとは違う。経験と知識で身に付ける事が出来る術であった。

対象の本来の形と掛け離れた機能を付与する式ほど高度とされ、主の主である紫に至ってはただの石に恒久的な計算情報処理能力を代行させることも可能だった。幻想郷の大結界はこうした無数の式で維持されている。

細かく書き込まれた構文が順に起動し、式に妖力が通る。橙の手のひらで符は数羽の鳥へと姿を変えた。

「行けっ」

橙の命令に従い、鳥たちはばさばさと翼を広げ、飛び立とうとするが——首が短すぎ、翼の形が歪な鳥たちはほんの数メートルを羽ばたいただけですぐに地面に落ち、ぼてんと尻餅をついた。大きな目を丸くしてくりくりと首を傾げながら、式達は大きな脚の爪を使つてがりがりと地面を引つ掻きます。

主の命令も忘れ、土の中の虫をあさり始めた鳥達を見て、橙は深い溜息と共に肩を落とし、符を解除した。式達は力を失い、元の符へと戻る。

「んー……上手くないなあ……」

地面に散らばった符を拾い上げ、橙はもう一度溜息をついた。

元々空を飛ぶ形の紙飛行機に式を打って動かすのと、ただの一枚の紙でしかない式符を鳥へと変えるのでは

難易度は大きく異なる。鳥の形を象つて羽ばたき、転ぶことなく着地できるのだから以前に比べれば格段の進歩なのだが——毎日続けているのにも関わらず、思うような進歩がない事に橙が焦りを覚えているのも事実だった。

命蓮寺に滞在するようになってからも、橙は時間を見て式の練習を続けていた。

藍の見様見真似で覚えた式のなかで、橙が使えるのはごく単純なものばかり。石や木、紙といった無生物に打つことで、前後左右に動かすことができる程度だ。生物などを動かすことはできないし、動かすことができる手段も限られる。平地にある石を転がす事はできるが、坂を登らせるのは難しく、宙に浮かべて自在に飛ばすような事はまったくできない。

「こんなんじや、いつまで経つても……」

改めて自分の式構文を見返し、その稚拙さに橙はぎゅつと唇を噛んだ。力が足りない事は分かる。けれど、

その不足を埋めるためにどうすればいいのかが分からない。教わるうにも相手もない。形にならないもどかしさが橙の胸の奥で燦る。

結局、式が普段からの積み重ねである以上、その精度と威力は積んだ研鑽に比例する。橙の式は実戦に使えるものと程遠いのは、誰でもない橙自身の責任だった。

(うう……ッ)

収まらない憤りに、橙は自分の尻尾に歯を立てる。がじがじと毛並みが荒れていくのを気にしながらも、やめられなかった。

「ほほう。見事なもんじやのう」

不意の拍手に尻尾を放し、橙は慌てて振り向く。使いた魔たちと一緒に数匹の子狸を引きつれたマミゾウは、朱に銀で鯉の滝登りを染めた着流し姿。首には温かそうなストールが一枚、巻かれている。

今夜は古い馴染みと呑みに出かけていた筈だが――

そこで初めて橙は、月の高さから今がもう夜更けであることに気付く。

「八雲の式というのは、前に何度か見せて貰ったことがあるが――おぬしにも使えたのかね」

マミゾウは足元にじやれついていた子狸を取り上げぼんと叩く。すると子狸は酒瓶へと姿を変えた。酒の持ち運びの手間を省くため、狸に化かして連れて来たのだろう。さらにマミゾウは近くの枝から葉を二枚千切り、素焼きの杯に化かしてその一枚を橙へと放る。

「わ」

取り落としそうになった盃を慌てて受け止める橙に、マミゾウはにつこりとほほ笑んだ。

「一献どうかの？ 少しくらい酔っておった方が、化術のノリは良いもんじやぞ」

「……いただきます」

幻想郷の少女にとって、酒精は弾幕と同じように嗜みの一つである。藍のいる時はあまり飲ませて貰えな

いが、酔つ払った時のゆつたりと視界が回るようなふわふわした感覚は好きだった。

勧められるまま、橙はマミゾウの差し出す酒を口に
する。呑み慣れない風味だが、一口で分かるほどの良
い酒だった。澄んだ味は舌を通り抜けるように喉をす
うと下り、爽快な風味だけが口に広がる。雑味のない
ぶんだけ酒精の効きは強そうだった。

「こちらの造り酒屋は良い仕事をするのお。先の災禍
からこつち、新潟の酒蔵は軒並み苦勞しておるとい
うのになあ。求められておるものが幻想になってこちら
の者達を楽しませるといふのも、なんとも良く出来て
おるよ」

多少、皮肉の混じった口ぶりで、マミゾウはぐいと
杯を空けた。

「橙よ。こんな遅くまで修練に励むのは立派じゃが、
明日も早いのに夜更かしは感心せんぞ？ 根を詰め過
ぎて身体を壊すようでは元も子もない。……まあ、お

ぬしがただの妖怪なら止めはせんのかな。昼を人
里で過ごす以上、あまり人と離れた生活を送るのは宜
しくないからのお」

人間というのはあれで存外、自分たちと行いを異に
するものには敏感で排他的なのだと、マミゾウは続け
る。

長く生きた彼女は、橙の知らない事もたくさん知っ
ているのだろう。だからきつと、その言葉は心から橙
を思つてのことに違いなかった。

けれど。

「んっ……」

橙は杯に残った酒をぐいっと呑み欲し、マミゾウの
顔をまっすぐに見つめ返した。

「あの、マミゾウさんっ」

「ん、なんじゃの？」

「わたし、私は、もっと強くなりたいです！ 藍様の
役に立てるためとか、馬鹿にされたくないとか、そう

いう事だけじゃなくて——、もつと、いっぱい、いろんなことが出来るように！」

ふらりと倒れそうになる脚で地面を踏み締めて、胸中の思いを言葉にして叫ぶ。白い吐息が夜に消え、なお輝く月が地の影を濃くする。

胸の中につかえていた言葉が、みるみる回り出した酔いと一緒に吐き出されてゆく。

「ここに来て、たくさん、知らなくちゃいけないことがあるのが分かりました。だから私は、もつと、もつと、頑張らなくちゃいけないんです。だから、マミゾウさん、教えてください、私はどうすれば、もつと強くなれますか……!?」

それは、橙が初めて口にした、成長への渴望であった。マヨヒガを出、環境のまるで異なる命蓮寺やマミゾウの庵で過ごしたことが、少なからず影響を与えていたかもしれない。

「ふうむ」

橙の訴えに、マミゾウは腕組みをして唸る。

長く生きた彼女は、若い妖怪が性急に力を求めることへの危険性も把握していた。そも、妖怪というのは変化を由としないものだ。恨みであれ感謝であれ、何がしかの強い想念を核に力を得て生まれる妖怪達は、長じてもそれを捨てることのできないのが普通だ。姿かたちを自在にする化生とて同じである。

妖怪は人間に比べれば緩やかに生きるものだ。変化というほどの変化もなく、数十年、数百年をあっという間に過ごす。短い期間に生き急ぐことは、妖怪としてのあり方を歪めてしまいかねない。それらを外れる例がないではないが——

「マミゾウさん、私に化け方を教えてください」

「あー、おほん、うおっほん。ちいと落ち着け、橙」
飛び付いてきた橙を、マミゾウは洪面で引き剥がす。「焦る気持ちも分かるがの、いまのおぬしはいくつの事を同時にやろうとしておるんじや? 厳しい事を言

わせてもらえば、お前さんの式はまだ未熟。金貸しの代理も見習いに毛が生えた程度。化け猫としてもようやく髭が生え揃うかどうかじやろう。この上化術まで習って、他のことを疎かにせんという約束はできるかの？」

「う……」

囁んで含めるように言い聞かされ、橙は反論を失つてしまう。出来ると強弁するのは簡単だが、実際に思い返してみれば、最近の橙は焦るあまり小さな失敗をいくつも繰り返しており、マミゾウに頭を下げることも多かつた。マミゾウはそれを指摘する事もできたが、敢えて口にしなかつたのはそれだけ、橙の事を案じてくれているという意味だろう。

静かに諭されるのは、強い叱責よりも一層深く胸に染みた。

「足し算をする時に指を使わねばならぬ者に、複利の計算などできん。背伸びをしても手の届かん事に無理

に挑む必要はないんじやよ。辛いとは思うがな、まずは己を弁えよ、橙」

「すみませんでした、わがまま言つて……」

「良い良い。おぬしがやる気になつてくれて、儂も嬉しいんじやよ。弟子なんぞもう何百年もつておらんかつたからなあ。ぬえはあの気性じやし、人の話なんぞ聞きやせんし。その点おぬしは素直じやし、覚えも良い。儂の方も入れ込んでしまつたかもしれんな。

……おほん。兎も角、化術は儂が教えて良い事ではないのう。おぬしが八雲の式を外れて、狸の一門になつたいうのでもあれば別じやが」

「……………はい」

みるからにしよぼんと委縮し、耳を伏せ尻尾も垂れさせて、しよげ返る橙。マミゾウはそんな姿を見て眼鏡の奥で瞳を光らせた。

「——なんというか、九尾が入れ込むのも頷けるのお」

「はい？」

「ああ、こつちの事じゃ。気にせんで良いよ」

さて、とマミゾウは橙の隣に腰を下ろす。

「このままおぬしにこれも修行じやと威張りくさって放っておくのもひとつの手段なんじやが、儂の趣味ではないのでな、少しばかり余計なおせつかいをするでしょうかの」

ついと立てた指先にカラフルな使い魔達を集め、マミゾウは彼等に何事かを言い含める。

「猫も年経れば化けるものじやが、狸や鼬やらに比べると自由自在には言い難いのお。そこでまだ未熟な化生がどうするかといえ、手っ取り早いのはなにがしかの呪物の力を借りることじやな。狸であれば榆の葉、狐なら髑髏。……流石に寺で舍利をぞんざいに扱うのは色々と咎められそうじやがな」

マミゾウは苦笑しつつ、頭に乗せた榆の葉をひよいとつまんで見せる。

「これも、この葉そのものに誰かを化けさせる力が備

わっておる訳ではなくての、あくまで本人のきつかけを作るものにすぎん。癖のようなものでな、一度コツさえつかめば、同じものには割合化けやすくなるからの。

さて、化け猫となると定番は手拭いじやが、おぬしのように若い娘に手拭いで頬っかむりもないじやろくな」

榆の葉を懷に仕舞い、マミゾウは集めた化け式達をつるりと撫でた。ぽんと佐渡の化け狸が手を叩けば、彼等はたちまち夕焼け空のような山吹色に染まったマフラ―へと姿を変えた。

「わ……」

「ひとまずはこれを使ってみると良いよ。慣れてくればそのうち一人でも自由に化けられるようになるじやろ」

橙の首元へ温かな色合いの襟巻を巻いてやり、マミゾウは小さくウインクをしてみせる。

「今日のいんすとりくしよんじゃ。無理に新しい事を覚えようとする前に、おぬしに今できることで、どう工夫を凝らせばよいか。それを考えてみると良い。おぬしは頭がいい、じっくり腰を落ち着けて時間をかければ、すぐに思いつくじやろうて」

「そんなことないですつ。私はまだ全然……」

「嘘なんぞ吐いておらんよ。たとえばおぬしは自分の妖術が大したものではないと考えているようじゃが、子供騙しと馬鹿にされたところ、子供が騙せるならどうして大人が騙せん理屈があるかね。なに、妖怪なんぞ人間に比べりゃよつぽど単純じゃぞ。——ほれ」

マミゾウはぼんと指先を鳴らすと、先程の葉を一枚の蝶へと変えた。ひらひらと白い羽根を揺らせて舞い飛ぶ蝶が、視界をよぎる。思わずそれを追いかけた橙は——ふと気付けば、さっきまで自分が手にしていた杯がマミゾウの手の中にある事に気付く。

杯を器用に指先にのせてくると回すマミゾウは、

橙に問う。

「さて、この杯、いつから儂の手にあつたかの？ ①おぬしの隣に座つた時。②蝶を出した時。③おぬしが余所見をしている間。さて、どれじゃ？」

「え、えつと……②番？」

橙の答えを満足そうに聞いて、マミゾウは悪戯つぽく舌を出す。

「外れじゃ。正解は『どれでもない』じゃなあ。ほれ」

マミゾウが指した先、橙のすぐ隣に杯は置かれていたままだつた。慌てて振り向けば、マミゾウの手にあつた橙の杯は、ボンと音を立てて平たい石片へと戻る。

「ず、ずるいつ!! 今の——」

「考えもしなかつた、かの？ そう、その通り。おぬしが使う妖術も同じ原理じゃな。相手の思考を誘導し、自分に都合のよい選択肢を選ばせる——突き詰めればいかなる勝負にも対決にも用いられる、心理戦の基礎じゃ。」

化かすということは、妖力や力などとは関係ないぞ。前にも言ったが、相手を驚かせるというのは、そやつの思っていることの裏をかくことじやな。ゆえに相手をよく知り、何を欲しているか、何をしようとしているかを把握しておかねばならん。おぬしにはその素質が十分にあるぞ？ なにしろ、敵地のまっただ中に己を偽って潜入しようとするくらいじゃからなあ」

「そ、そんなのは、成り行きでそうなっちゃっただけで、別に……その、なにか考えがあつた訳じゃ……」

「だが、おぬしは正体が露見しかけたその窮地においても、形振り構わず逃げ出す事も、息を潜めて身を隠し潜む事も、堂々力押しで押し通る事もせず、寺の皆を化かしてやろうと考えた。身に危険が迫った時に、無意識で取る行動というのは、もつともその者の本質を良く顕しておる。つまりな、橙」

二ツ岩狸の手が、そつと橙の肩に掛けられた。九尾すら化かしてみせると豪語する彼女は、けれどどこま

でも真摯に幼い化け猫に諭す。

「おぬしには素質がある。気落ちせずに励むといい。具合よく、単純な強さだけでは勝敗の決まらぬ方法が、幻想郷にはあるのじやろう？」

手元からスペルカードを示し、マミゾウはかかかと笑うのだった。



早く休むようにな、と言い残して庵に戻るマミゾウを見送つて、橙はじつと月を見上げていた。そろそろ暁は重くなつてきていたけれど、いまだ気持ちが高ぶつていて、すぐには寝付けそうにない。短い間のやり取りは、言葉に言い尽くせないほどの様々なものを橙の胸に刻みつけていた。

「スペルカードか……」

自作の符を手の上に並べ、じつと月に透かして見る。

要は強さの定義問題なのだ。おそらく紫は幻想郷における最強の一人だが、スペルカード・ルールは彼女の強さがある意味で否定している。

幻想郷の命名決闘法は、人と妖怪の対立を可能にした。強大な力を持つ紫にすらも負けるだけの余地を作った。

逆に考えれば、紫はこのルールのおかげで、絶対的な強者でおらずとも良くなったのだ。

実際、あの紫でさえも巫女や魔法使いには良く泣かされている姿を見ることがある。それでも彼女の結界の賢者、八雲の大妖怪としての権威が傷付かないのは、スペルカード・ルールの存在があるからだ。

「勝てばいいってことだけじゃないんだ……」

たとえば。いつだったかの宴会の時にそこの雑魚妖精と紫が、最後に残った卵焼きの一切れをどちらが食べるかで揉めたことがあった。

あの時は紫は大人気なく妖精と弾幕をして相手をこ

てんぱんに叩きのめし、巫女に呆れられていたが——
まともに考えて、たかが卵焼きに八雲の賢者がそこま
で必死にこだわる必要はない。店で買っても良いし、
藍に作らせても良い。それこそスキマを使つたつてい
いはずだ。手に入れる方法はいくらでもある。

けれど、あそこでなんの理由もなく雑魚妖精ごとき
に譲ってしまうことは、以後、紫の権威を傷つけ、妖
精たちに不用意に舐められてしまう可能性を残すのだ。
だから紫は弾幕を持ちかけた。どちらが勝つても恨
みつこなしの真剣勝負で、後腐れなくきちんとその場
で決着が付くように。

命名決闘は、暗黙のうちにその問題における当事者
性と、関与する意識の強さを形にすることができる。
自分がどれだけ真剣にその問題に関わり、負けられな
いとするかの気持ちを解りやすく提示できることにな
る。

諦めない方が、勝つ。こんなに分かりやすいルール

はない。

「でも紫様、あのとき本気だったよね、きつと」

……そこで勝つてしまうあたりが、八雲紫の八雲紫たるゆえんなのだろう。測り知れぬすきま妖怪の生き方に思いを馳せ、橙はうにやあと大きく欠伸をした。

袖振り合うもた生の縁・廻





光陰矢のごとし。橙がどれだけ思い悩んでいようと、日々はお構いなしに過ぎていった。徐々に秋は深さを増し、朝夕は火鉢から離れがたくなってくる季節だ。まして人ならぬ化け猫の身ではなおのこと。

雲が刷毛のように薄く伸びた空の下、橙は分厚いどてらに袖を通し、お日様の差し込む縁側に座り込んで帳簿の整理をしていた。一心不乱に文字を追ひ、計算を確かめ、間違いがないかを丹念に確認する。明日までに纏めておかなければいけない書類だった。

集中していた頭の後ろを、こつんと硬い何かが叩いたのはその時だ。

「……？」

見上げれば、屋根の上にはぬえの姿があった。おや

つ代わりだろうか、炒った椎の実を齧っている彼女は、ぱらぱらと膝上の殻を払い落しては白い指で実を唇の中へと運ぶ。どうやらその殻がぶつかつたらしい。

最近、ぬえとは夕飯時にも滅多に顔を合わせる事がなくなっていたが、今日はこういう風の吹きまわしか、庵の近くでごろごろしている。と言って、橙に話しかけてくるでもなく、数刻前からずっと庭の木の枝の上だ。

橙にもぬえの相手をしている暇はない。畳に落ちた殻を庭へと払いのけ、作業に集中しようと帳簿に向き直つたところで——再び、こつん。

再度頭上を見上げるが、ぬえは相変わらずそっぽを向いたままだ。

「……………」

一言くらい詫びがあつてもいいじゃないかと懺然としつつも、橙は帳簿をまとめて縁側から部屋の中へと引つ込んだ。——が。

かつん。机の上に椎の実の殻が跳ねる。……どう言
い訳しても明らかな故意。狙ってやっているとした思
えなかった。ばん、と帳簿を閉じ、橙は縁側から庭へ
と駆け出す。

「もーっ!! なんなの、さっきからっ!!」

「……なんだよ、五月蠅いな」

馬鹿にした様子でぼりぼりと椎の実を齧るぬえに、
橙は尻尾を逆立てて唸った。

「とぼけないでよ! なんで邪魔するのかって言つて
るの!!」

「別にー? 気のせいだろう」

にやにやと口元を歪め、ぬえはぴんと木の実の殻を
飛ばした。見事な狙いで橙の鼻先をかすめ、椎の実の
殻はかつんと帳簿の上に転がった。流石に橙の堪忍袋
の尾も切れる。

「やめてよ! 私、忙しいの見て分かるでしょ!!」

「なにが忙しいだよ、わがままばっかでマミゾウの足

引つ張ってるくせに」

ぼそりとつぶやいた直後。ぬえの姿は橙の目の前に
あった。がらんと椎の実を入れていた器がひっくり返
り、中身を畳の上に撒き散らす。

瞬きすらしていなかったはずなのに——驚く橙の胸
に、ぬえの背中から伸びる奇怪な羽根の先端が突き付
けられる。

「だいたい、おまえ、いつまでここに居るつもりなん
だよ」

「い、いつって、……いつだっていいじゃないっ」

不意の一言に、橙は口籠ってしまう。突き付けられ
た鋭い羽根の尖端よりも、その指摘の方が恐ろしかつ
たからだ。

慌てて言い返したものの、橙に後ろめたいことがあ
るのは誰の目にも明らかだった。それを見て、ぬえは
口元にぞろりと牙を覗かせる。ひと噛みで頭からばり
ばりと橙を飲み込んでしまいそうな、不気味な笑み。

「へええ、いつだって、ねえ。じゃあもうお前の主って奴は、お前のことなんかどうでもいいってことだな」

「そ、そんなこと、っ」

ない——と、橙は言いきれなかった。澱のように胸にわだかまる後ろめたさが、少女の齒切れを悪くする。式と主の関係は、永続のものではない。主の式を受け入れさえすれば誰だって八雲の式になれるのだ。橙が数ある獣の中から、八雲藍の式に選ばれたのはただの偶然でしかない。

「だってそうだろ。本当にお前のことが大事なら、どうして迎えに来ないんだよ」

「う、うるさい、うるさい!! あんたなんかに分かる訳ないじゃんっ」

「わかるさ。……見くびるなよ、小娘」

ぞっとするほどの重い声。鋭い視線が橙の反論を縫いとめる。ばさりと背中の中の羽根を広げ、ぬえは舐めつける様に橙の顔を覗き込む。紅い瞳は固まりかけた血

のように、ぬめりを帯びて橙を睨む。まるで頭の中を覗かれているようで——橙は身を硬くする。

「私は京都の夜を騒がせた大妖怪ぬえ様だぞ。式つてのは道具だろ。きちんと役に立たない道具なんて邪魔なだけだ」

「じゃ、邪魔なんかじゃ——」

「だったら、早く出てったらどうなんだよ」

「——ッ」

そんなこと。

わざわざ言われなくなっただけに分かっている。確かに橙はここでの日々には馴染みはしたが、事の発端となった藍とのわだかまりはそのまま手つかずなのだ。いつかは向き合わねばいけないことだと分かっているが、ずるずると先延ばしにしてしまっていた。

痛いところを突かれ、絶句する橙に、ぬえはさらに詰め寄ってくる。

「ふざけんなよ。マミゾウが黙ってるからって、勝手に

に居座りやがってき。ここに居るのが当たり前前みたい
な顔して、生意気なんだよお前。マミゾウだって迷惑
に決まってるじゃ——」

「おんや、僕はそんなことを言うたつもりはないがの
う」

がらりと襖を開け、現れた二ツ岩狸に、ぬえはびく
りと背中を竦ませる。その隙を見て橙は力の緩んだぬ
えの腕の中から抜け出した。二人の諍いなど見えても
いないとばかりに、マミゾウは床に散らばった椎の実
を拾い集め、器用に片手で殻を割って中身を口に放り
込む。

「むぐ。橙にはよくやって貰っておるよ。この二月で
大分里の得意先も増えたしの。寝床と飯をあてがう位
の働きには十分じゃろうなあ」

対してすつかりただの居候となつたぬえは自分が責
められたように感じたのだろうか、苦いものを表情に
滲ませ、がりがりと歯を軋らせる。

「な、なんだよ、マミゾウまでこいつの肩持つのかよ。
そもそもこいつ、マミゾウの大っ嫌いな狐の子分なん
だろ。別に間違つたことしてないじゃんか」
「ふむん。……おぬしが拗ねて居るのを見るのも久し
ぶりじゃなあ」

「う、うるさいつ、なに言ってるんだよ!!」

あくまで余裕を崩さないマミゾウに、音を上げたの
はぬえの方。正体不明を標榜する妖怪は実に分かりや
すく顔を真つ赤にして身をひるがえした。

「もう知るか、マミゾーのばーかっ」

捨て台詞を遺し空の向こうに遠ざかる姿を見つめ、
マミゾウは顎をさする。

「……やれやれじゃ。しばらく相手をしてやってもら
んかったからのう。ヘソも曲げるか。……にしてもこ
のやり方は感心せんなあ。一度、新聞屋にでも剥いて
もらつて灸を据えた方が良くかも知れんの」

「あの……」

謝るべきなのか——橙が迷っていると、マミゾウは椎の実を戻した器をひよいと机の上に並べ、

「まあ、ぬえの言うておることにも一理あるか。橙」

「は、はい」

「おぬしが儂の元で働いてそれなりになる。そろそろ区切りが必要じやろう。——おぬしにひとつ、試験をすることにしようかの」

試験、と聞いて橙はびんと背を伸ばした。髭が飛び出し、尻尾がぴよこんと立つ。

藍から出される問題はとても難しいものが多く、いつも答えられずに赤点を貰うばかりだった。身構える橙に、マミゾウは眼鏡を光らせ——

「おぬしの思うやり方で、商売をして、儲けを出すこと。額は……うむ。一万円ほどで良かうな。これが試験問題じゃ。期限は——そうさな、いまから一月としようか」

なんとも、予想外な事を言ってきたのだった。



「……って、言われてもさ」

具体的に何をしろというのか、まったく分からない。博麗神社と人里を繋ぐ街道からほど近い草原で、橙は途方に暮れていた。

否、やるべき事はこれ以上ないくらい、具体的だ。「お金なんてどうやって稼げばいいんだろ……」

うにゃあ、と困惑を鳴き声にして、背中を投げだす。秋の近い草原は少し肌寒く、もらったばかりのマフラ―を首元まで引き上げて、手袋の手をそつと擦り合わせる。

「一万円かあ……」

——いくつか手段は思いつかないでもない。マミゾウの元でこの二月、働いてきた橙は、人里にもいくらか知り合いができています。彼等相手になにかしらの商

売をすれば、それなりの儲けが見込めた。

けれどそれは二ッ岩明神の奉公人である橙子としての信用であつて、橙個人のものではない。それはなんだか違う気がするのだ。

「でも、普通に働いて稼げるような額じゃないもんね……」

マヨヒガの品を売るというのも考えてみたが、あれも希少価値であるから意味があつて、たくさん流通すれば一気に単価が落ちてしまうだろう。下手にマヨヒガのことが知られて、強欲な人間達に押しかけられても面倒だ。

(んうー……)

眼を閉じて、痛むこめかみにぐりぐりと拳を押し当てる。頭がぷすぷすと煙を吹いているようだ。何かを思いついても、すぐにそれが実際にうまくいくかどうかの問題が出てきてしまう。

橙は難しい事を考えるのは好きではなかったはずだ

が、何故だか気になって仕方がない。一人で物想いに耽つていた橙の鼻先に、白い結晶がぱちんと弾ける冷たさに思わず飛び上がった橙の視界いっぱいに見慣れた顔があつた。

「なにやつてんのさ、橙、難しい顔して」

「……なんだ、チルノか」

ふわふわと宙を漂いながら、チルノは歯を見せて笑う。すっかり秋も深まつているというのに素足に半袖ドロワーズ揺れるスカートの裾から下着まで見えている。見ている方が寒くなりそうだが、実際氷精の周囲は温度が下がるのだ。

「なんだはないだろー冬に夏が来たみたいじゃんか」

よく分からない喩えを持ち出しながら、ひよいと隣に腰かける。

冬が近いからだろう、活性化した氷精の体温がひやりと二の腕を撫で、橙はぶるりと背中を震わせた。それでも本人は力を押さえているらしいが、橙としては

たまったものではない。厚手のタイツの膝を寄せ合わせ、胸元のマフラーを巻きなおす。

「チルノは何やってるの？」

「んー？」

聞くまでもなかったかもしれない。蛍、夜雀、闇妖、妖精——向こうからやってくるいつもの顔触れに、橙は立ち上がった。

「あれ、橙？ 珍しいね」

「なんか急に寒くなったよねえ」

「最近見なかったけど、冬ごもりの準備かー？」

「……こんにちわ」

ほんのひと月ふた月会わなかったただけなのに——皆の顔がやけに懐かしく思えた。



「……手っ取り早く言うとな、お金を稼がなきゃいけ

ないの。あと一月で」

チルノ達が解決方法を知っているとは思えなかったが、どうせ一人で考え込んでいてもいい考えが浮かびそうにないと判断して、橙はこれまでの大まかな経緯を話した。ややこしくなりそうなので、藍との喧嘩やマミゾウとの関係は伏せてある。

「……ふうん。お金儲けねえ」

「なんだかわからないけど、変なことやってるんだね、橙」

案の定、皆の反応は芳しくない。曲がりなりにも商売をしているミステイアなどは兎も角、チルノあたりはお金というのは巫女が欲しがっているものくらいの認識しかないようだ。ルーミアに至ってはほぼ無縁の生活を送っているし、一応は概念を理解しているらしいリグルに大妖精も、わざわざ人里に買い物に行くなんて年に一度あるかないかだ。

それでも。

「よし、いいこと思いついた！ かき氷屋やろう!!」

「もう冬だよチルノちゃん……」

「えー、あたいは何時だって食べれるよ？ 一〇杯くらい」

「この中でお金持つてるならみすちーだけど……」

「駄目だからね！ お店のお金なんだから！ リグルだって前に虫の知らせサービスとかってやってたじゃない」

「うーん。でもなんでだかあれ、人気なくて……。せつかく起こしてあげたのに代金もらいに行ったらものすごく怒られたんだよね」

「美味しかったのにねー」

各々好き勝手に喋るばかりで、でてくる案も的外れなものばかりだが、それでも皆はそれなりに、橙のためにあれこれと知恵を絞ってくれていた。

まさか本気で相手してくれるとは思っておらず、橙は驚きながらも、皆に頭を下げる。

するとチルノは、あっけらかんと笑うのだった。

「橙が困ってるんだから、手伝うに決まってるじゃん」

「……ありがと」

かくして六人で顔を突き合わせ、頭を捻り始めた橙たちだが、もともと妖怪に妖精たちの集まりだ。宝くじを買ってみるとか、悪人を退治してお金を貰うとか、埋蔵金を探すとか、文殊の知恵どころか人並みに届くのかも怪しい提案や意見が百出した。

いつしか当初の目的は忘れ去られ、妖怪の山と地底冒険に行くなら宝物はどっちがたくさん埋まっているのかという話題になりいよいよ議論は白熱してゆく。

橙もつい一緒になって地底に行く方法を考えて出していた時、騒がしい会議の場にちやっかりと割りこんでくる影が一つ。

「なんだか景気のいい話してるねえ。金儲けなんてどういう風の吹き回し？」

「あ、てみちゃん」

里での仕事の帰りなのか、大きな薬箱を背負つて現れたのは永遠亭の白兔だ。防寒対策なのかもこもこの毛皮の外套を着込んで、ブーツに手袋の完全装備。確かに寒いけど、まだ霜も降りてないのにそんなにしくてもいいんじゃないかなと橙は自分のマフラー姿を棚に上げて思つたりした。

「橙がね、大変なんだつて」

「ほほう？」

次々に噂が広まるのはなんだかこそばゆかったが、良く考えてみれば、彼女は数少ない里で商売をしている妖怪の一人だ。何か良いアイディアを持つているかもしれない。橙はそう考えてゐるにも相談してみることに決める。

ふわふわの耳を揺らして、因幡の素兔はチルノから説明を受ける。氷精の説明は実に適当だったが、大妖精やリグルがフオローを入れてくれたおかげで大意は伝わつたらしかった。

「ふむん。なるほど……」

てゐは何かしかを考えていたようだったが、やがてぼんと手を叩き、背中の背負子を漁つて中から黒い小瓶を数本、取り出す。手のひらに収まるくらいの小さな瓶のなかには、琥珀色のとろとろとした液体が詰まり、嚴重に蠟で封がされていた。一堂は揃つて瓶を覗き込む。

「だつたらちようど良かったよ。橙、手っ取り早く儲かる耳寄りな話があるんだ。これ、うちのお師匠が新しく作つた滋養強壮の新薬なんだけどさ」

竹林の永遠亭と、そこに住む薬師の噂は、病氣とは無縁の妖怪達にも良く知られているところだ。その永遠亭印の薬とあつて、皆の反応は様々だった。胡散臭げに瓶を手に取り、振つてみたり、興味深げに覗きこんでみたり、陽に透かしてみたり。

「……なんかあんまり美味しそうじゃないなあ」

封に手を掛けたチルノを、てゐは慌てて制した。瓶

を取り上げ、大事そうに胸元に抱え込む。

「あつと、開けたら駄目だよ。揮発性が強いから、飲む時までちゃんと封をしておかないとあつという間に有効成分が飛んじやう。ちよつと扱いが面倒だから、置き薬にするもんでもないし、どうしようかって思ってたところなんだよね」

「へえ……それで、これがどうなるの？」

問うミステリアに、てゐは急に神妙な顔をした。回りを窺うように見回して、ちよいちよいと手招きをする。顔を寄せて声を潜めるてゐに、自然皆は寄り集まるように顔を近付けた。

「お師匠はあの通り商売っ気ないし、姫様は姫様だし、鈴仙は外のことなんかお構いなしだから全蒸気にしてないけどさ、ぶっちゃけ私、これ、里の人間に相当売れると思うんだよね。だってあいつら、毎日毎日疲れた疲れたって言ってるじゃん？」

「じゃあ、それをみんなで売って儲けるの？」

リグルの素直な疑問に、てゐはちつちつちと指を立てて舌打ちする。

「分かってないなあ。いきなり妖怪がそんなこと言つて回つたつて、里じゃ誰も信用してくれないつて。怪しいものを売ろうとして何企んでるんだつて、巫女でも呼ばれるのがオチだよ」

「そーよ。私がお店やるのにどれだけ苦労してると思つてるの？」

ミステリアの実感のこもった同意に、橙は頷かざるを得ない。

「でも、なにも馬鹿正直に私らが看板背負つて薬でござい、お安うございますなんてやる必要ないのさ」

「どういうこと？」

「私らが売れるつて思うつてことはだ。里の人間だつてこれ売つて商売したいつて思うかもしれないじゃん？ いちいち里まで行つて全員に売つて歩くのも面倒だし。だから、手数料を取つて人間達に売らせよう

と思うんだ。効果は私が保証する。絶対欲しがる奴は大勢いるよ」

「へえ……」

いい考えのように思えた。少なくとも、妖怪が出入りするよりはだいたい現実的な話になる。

「でね、ここから先が肝心なんだけど」

ゆっくりと言葉を切り、てゐはさらに声を潜める。

「もつといいやり方があるんだ。これなら確実に儲けられる。……橙、元手はいくらあるの？」

「えつと……」

橙が心当たりを告げると、てゐは十分だねと頷き、
「まず、橙が私からこいつを仕入れるよね。んで、橙はこれを里の連中に売る。その時、一本売れるごとにその値段の二割を取るようにするんだ。それで、そいつらにも同じ商売をしないかって誘うんだよ。新しく客を探して、そいつらに薬を売ったら、売上の手数料から二割を取らせる。それで、そいつらはこの商売を

紹介してくれた親である橙にその二割をさらに渡す。あとはその繰り返し。橙がどんどんこの薬を仕入れて、他の奴にもこの商売を広めていけば、何もしないでがっばがっばだ♪」

「おお、すごいなー!!」

「んんん？」

「へえ……」

チルノが興奮して立ち上がる。大妖精が首を捻り、リグルとミスティアが感心したように声を上げた。

「すごいね、それならあつという間に大儲け——」

「……違うよ。それ、すぐに誰も買ってくれなくなる」
興奮に水を指したのは当の橙だった。橙は手袋の指を順に折り曲げ、素早く計算をしてゆく。算盤の代わりに指を用いる計算法は、藍に教わった方法だ。

「私が五人にその薬を売って、その商売を教えた人達がまだ五人ずつに薬を売るなら、初項一、公比五の倍数でしょ。一段ごとに人数は五倍になる。五回繰り返し

したら全員で約四〇〇〇人、六回目で二万人。里に人間達が何人いるのか分からないけど、七代ぐらいで幻想郷の妖怪と妖精と神様と、人間全員合わせても足りなくなっちゃうはずだよ」

「ふむん」

白いふさふさの耳を指に挟んで頬に当て、てゐは驚いた顔を見せる。

「……こりゃあ、ちよいと当てが外れたなあ。まさか気付かれるとはね」

悪びれもせず、てゐは苦笑いしてぺろりと舌を出した。そもそも因幡の素兎と言えば、神話の時代の昔からワニザメを騙してみせた筋金入りの詐欺兎である。見た目はさておき、彼女はこの場の誰よりも年長で、ずっと人生経験も豊富だ。橙なんかとは年季の入りが違うのだろう。

「知らなかった。案外頭回るんだねえ、橙」

「数字は嫌いじゃないから。ねえてゐ、それって本物？」

「……そこまで外道じゃないよ、ちゃんとした薬。たくさん作れるわけじゃないからネズミ講には向いてないけどね」

てゐは涼しい顔でばきんと瓶の蓋を開け、くいと中身を飲み干した。

「うー……まずい。もう一杯」

「……てゐ、橙のこと騙そうとしたの？」

「ちよつとした冗談だってば。まあ、これくらいの事も分からないで金儲けなんて言ってるやつは、簡単に騙されて有り金奪られちゃうだろうけどねえってことさ。おお怖い怖い」

濡れた口元をぬぐうと、てゐは素早く荷物を抱えてぴよんとその場を飛びのいた。呆氣にとられる皆を余所に、ひらひらと手を振りながら背を向ける。

「尻の青い妖怪が金もうけなんて、どだい無理な話ってことさ。悪いことは言わないからやめときな」

「……なんだよ、あいつ」

唇を尖らせるチルノの隣で、
橙はじつと手元に残さ
れた瓶を見つめていた。





その日の夜。急な用件ですっかり遅くなった橙が里外れの夜空を急いでいたところを呼びとめたのは、透明に澄んだ歌声だった。

不意に暗くなった視界を怪訝に思つて目を擦れば、ぼんやりと提灯の明かりを掲げた古びた屋台のそばで、見覚えのある姿が手を振っている。

「あ、橙、良かった！」

「みすちー？」

夜ということでミステイアはいつもの歌姫衣装ではなく、臙脂の着物に割烹着姿である。

彼女がこうして友人を店に招くのは割合と珍しいことだ。普段はチルノ達と一緒に遊んだりもしているけれど、八つ目鰻屋の屋台を出している間のミステイア

は一端の女将なのである。

地面に降りた橙に、ミステイアはお願いと手を合わせ、拝むように頭を下げる。

「ど、どうしたの？」

「橙、お金のこと詳しいのよね？　ちよつと相談したいの。——良かったら、ちよつと寄つて行つてくれなかな。ね？　夜食ぐらい奢るから！」

「う、うん」

いつにない神妙な表情と氣迫に押され、橙は椅子に腰を下ろす。

すぐに出てきた焼きたての八つ目鰻の串焼きを頼張り、妖怪の山の新酒をひとくち。

元は戯れで始めたような八つ目鰻の屋台だが、いつしか彼女の女将姿も板についてきていた。

鰻の味も昔に比べれば天地の差である。温かな夜食に舌鼓を打ち、一息ついた橙に、ミステイアは話を切り出した。

「ごちそうさま、みすちー。それで相談つて？」

「うん。昼の時に言いそびれたんだけど……」

深刻な様子の夜雀に、橙も思わず居住まいを正す。

「あのね、最近お店の経営がちよっと大変なの」

「——そりやそうだよねえ」

思わず素直な感想を返しそうになり、橙は慌てて口を噤む。ぶっちゃけて言えば一目見て分かる事だったが、ミステリアの悩みは深刻らしい。

「なんだか分からないけどどんどんお金がなくなってきたやつて……最近じゃほとんどお通しの材料も買えないし、お酒も手に入らないし、屋台が壊れても修理もできなくて……」

だから、橙が困つてもお金はあげられなかったのだと、ミステリアは言う。正直なのかなんなのか良く分からない。

夜雀の八つ目鰻屋台の経営は、以前からあまり健全なものとはいえなかったらしい。

客足が少ないという訳ではない。初めのうちこそ妖怪の店など信用できないと警戒していた里の人間達も、このごろはすっかり屋台のことを認知し、ちよくちよく顔を出すものも居るらしい。

夜道でほかの危険と出くわすこともあるが、少なくともミステリアの屋台では妖怪達が人間を襲うことはなかったし、人里の境界のすぐ外側で営業している分には咎められることもなかった。中には鳥目になる事を承知でミステリアの歌を聞きたがるものや、妖怪達と呑み友達になろうとする豪の者まで現れるようになってる。

実際、鰻の味も悪くなく鳥目への効果も靦面、里ではあまり飲めない地底や妖怪の山の酒も取り扱っているとなれば、呑ん兵衛たちの関心を引くには十分だったのである。

しかし、問題は支払いの方だ。支払いのツケや踏み倒しが横行し、気付いてみれば明日の仕入れにも事欠

く様子であるという。人間達はさておいても、妖怪の常連客が特にひどいということだった。

「チルノ達に悪気がないのはわかるんだけどさ……」

リグルは人間に対してはさておき、とりあえず身内には律儀なのでお金が有れば払ってくれる（まず持っていないが）。チルノにお金は期待するだけ無駄なので、夏場は氷なんかを作って貰い、冷酒などに使っているのだが、やはり冬場はどうしようもない。

そしてルーミアは根本的に通貨の意味が分かっている。しかし彼女は放っておくとミステリア自身が喰われかねない恐怖を感じるので、ただで食べさせる他ないのだという。大妖精はちゃんと代金の事は分かっているらしいが、基本的に妖精はご飯を食べなくても平気なので、ほとんどの場合皆の側に座っているだけであり、まったく稼ぎにならないのだ。

「そうすると、人間達に払ってもらえないんだけど。あんまり人里に近づきすぎると退治されちゃうし」

「ねえみすちー、この材料とかがって里で仕入れてるものもあるんだよね？ 仕入れ帳とかがって付けてる？」

「えっと……いちおう買ったものと、払ったお金は書きつけてあるけど」

ミステリアは再び屋台の下に屈み込み、ごそごそと棚をあさり始める。しばしの後に引っぱり出されてきた、皺くちゃに薄汚れた紙束を受け取り、橙は表面を浮かべてそれらを眺めていく。まだ駆け出しの橙がざっと眺めただけでも、はつきりと赤字だらけである事が分かった。

「みすちー、面倒だからってここに書くのサボってるでしょ」

「すごい！ なんで分かるの？」

橙は思わず溜息をついた。明らかにとびとびの日付、『醤油、味噌、あと適当に』『五〇円か……七〇円くらい？』『たぶん三日後』といった適当極まりない項目、書いている途中で居眠りでもしたのか、判読不明のもの

たうつ文字。

完璧な出納なんてもちろん期待はしていなかったが、これでは普通に読むのも一苦勞だ。

ミステリアが適當なのもあるが、人間達も大分ぞんざいな扱いをしているらしく、何が何やらさっぱり分からない。時間を取って順に解説していかなければ全容の解明は難しいだろう。

「あのさ、みすちーの屋台つて、ひと月にどれくらい稼いで、どれくらい支払いとかにかかつてるの？」

「えーつと……それ、今言わなきゃダメ？」

なぜか顔を赤らめ目を反らす夜雀。考え込んでいる振りはしていたが、あれは明らかに何も覚えていない証拠だ。

半分予想できていたが、ミステリアは経営の根本的なところすら理解が怪しかった。さらに彼女には、人間であれば必須の『食べていくため』という感覚がない。ミステリアにとって屋台は趣味の延長であり、食

事自体は妖怪として済ませているので、生計を立てるという概念がない。そこが根本的な問題だった。

だが、そもそもこのあたりの知識は橙もマミゾウの元で学んだばかりのことである。ミステリアが屋台を始めたのは突発的な理由であり、そもそも商売のなにかを学んで店を始めた訳ではないのだ。

むしろ、飽きっぽい彼女が良くここまで続けていると評価されるべきだった。

「要するに、お店が終わった時に余ってるお金で、足りないものがあつたら買う——ってだけ？」

「うん」

「……………」

悪びれもせずに答えるミステリアに、橙はぐいと杯を叩いた。やけ酒の一つくらいしたくなる。

八つ目鰻は川で獲っているので元手は掛かっていないが（それでも河童たちの住む流域に踏み込んでしまつて場所代などを払わされた事はあるらしい）、酒や肴

の仕入れ、タレ、炭、食器などなど、他のこまごました道具などに金は出てゆく。鰻の値段も実は決まっているように実は適用極まりなく、最初に店に来た巫女や魔法使いの言っていた価格をもとに、その日の気分で決めているのだという。

農閑期やお祭りの時期など、季節ごとに客足が多く、あるいは少なくなることも気にしておらず、せいぜいが雨の日は早く店を畳むくらいのことであつた。

つまりは、……適当もいいところ。

「どうしたの、橙？」

「うん……なんでもない」

すっかり痛くなった頭を抱え、カウンターに突つ伏して、橙はうにやあとひと鳴き。

正直に言つて経営状態を考える以前の有様だつた。

これでは借金がかさんでも不思議はない。良く潰れてないなあ、と、橙は口には出さずに感心する。

「それでね橙、今さ、里でお金つて貸してもらえん

でしょ？ そのやり方つて教えてくれないかな！ そうすればいろんなものが買えるし、屋台も直せるんだよね♪」

「……あー、うん、そうだね。……そう、なんだけど」
きらきらした笑顔でちらちらと歌い始めるミステア。
まるで借金というものを打ち出の小槌か何かと思つて
いるかのようなだ。

橙がこの窮状を一気に解決してくれると信じて疑わない、信頼一〇〇パーセントの笑顔。

この純粋な夜雀に一体何から理解させればよいのかと、橙は頭を抱えた。



大量の証文と書類を山と積み上げ、解説と計算に明け暮れること数日。

眼はかすみ、髪もぼさぼさ。筆を握り続けた手が強

張り、鈍く痛む。証文の最後の一枚を写し終え、机の上からずるずると滑り落ち、橙はぐてりと力尽きたように、畳に転がった。

「……………これで、終わり……」

喉が疲れきった声を絞り出す。

ミステシアの抱える借金のため、帳簿の整理を行って分かった事はふたつ。夜雀印の八つ目鰻屋台はあちこちに借財をしており、それらの複数の返済が滞っていること。現金が手元になくなってからは、ミステシアはツケで買っている材料や屋台の修理などを行っていたらしいこと。

証文をみるにそれらが負債になり、期限を過ぎてさらに利子がかさみ、仕入れが厳しくなってきたらしい。

当のミステシアはそれを差別だと憤っていたが、相手も商売だ。きちんと支払いのできない相手に物を売ってやる道理はない。

最初のうちは利子の催促に来ていた人間達も、ミステシアにろくな支払い能力がないことを知って途中から諦めていたらしい。まさか彼らも借金のカタに妖怪を遊郭に叩きこめる訳も無く、困窮した夜雀から本気で金を取れるとは思ってないようなのだが、少なくともこれ以上戻ってくる当てのないツケに応じる気はないということらしかった。

「疲れた……」

ばたり。庵の一部屋から這い出して、隈の浮かんた目元を擦る。元気を失ってしおしおの尻尾がぐたりと畳に倒れ込んだ。

ミステシアとは友達だし、八つ目鰻屋台は藍や紫と一緒に食べに来た事もある店だ。人間を鳥目にしてやるうという事で始めた動機はさておいて、せつかくの努力はなんとかしてあげたいと絆されていたが——あまりにも前途が多難である。

すでに屋台の経営は真つ赤どころか火の車。この有

様で経営の立て直しなんてできるもののだろうか、
 橙にはわからなかった。

「根本的にどうにかしないと駄目だなあ……」

右に大きく傾いた資産帳を眺めて吐息。

いまから新しいメニューを始めたり、宣伝を打ったりしたところで限界がある。少なくとも、ミステイアがあちこちに負債を抱えたままでは、まともな商売を行うのは不可能だろうと橙は判断していた。きちんとした仕入れができなければ鰻屋の利益もない。

少しくらいの金策では焼け石に水。どこからかまとまった資金を調達しなければならぬだろう。だがその調達先となるとまるで心当たりがなかった。

八つ目鰻屋台の借金先は人里のあちこちに点在し、ミステイアに返済能力がないことは知れ渡ってしまっている。この上で彼女に資金を出す相手などいるわけがない。仁愛で知られる二ツ岩明神、マミゾウですら、回収の見込みのない相手まで無条件に金を貸したりは

しないのだ。

勿論ながら、橙の手元にあるお小遣いなどでは全く足りない。

しかし、他ならぬミステイアの頼みだ。なんとかして解決案をひねり出さなければならなかった。

「んー……？ んにゃ？」

痛むこめかみを押さえて部屋の中に散らばった証文を眺めているうち、へたっていた両耳がぴんと跳ね上がる。

連日数字とにらめっこをして疲弊した、睡眠不足の頭が、不意に一つの解をはじき出す。

橙はがばと起き上がると、帳簿にある借金の名目を一つ一つ確認していった。証文をめくり、借り先を確かめ、期限を確認する。

「——これだ！」

会心の笑みとともに、橙は疲れも忘れて外へと駆け出して行った。



日も改まった翌週、人里の料亭『文福』の二階。

いつものように二ッ岩明神の取引相手が彼女を頼って訪れる慌ただしい時間が過ぎ、最後の客が店の門を出たのを見計らって、橙はミステアを招き入れた。

妖怪を店に上げる段になって文福の主人は半分渋ったが、夜雀の顔は里にも知られており、訝しがられたものの大きな騒動にはならなかった。彼女が割烹着の女将姿であったことも功を奏したのかもしれない。

「よろしく願います」

「……ふむ」

女将姿の夜雀を隣に、橙は深く頭を下げる。

差し出された書類の束に、マミゾウは難しい顔をしてそれを受け取った。

橙が考えた案というのは、あちこちにある八つ目鰻

屋台の借金の一本化だった。各所にばらばらと借りっぱなしの金額を橙が一手に引き受けることで、負債を一元化し、計画的な返済を行わせ、屋台の経営を立て直すのである。

要するに、ミステアが里のあちこちに借金を抱えてしまっているせいで信用を失くしているのが問題なのだ。一旦焦げ付きかけた借金を返せば、とりあえず新しく取引はできるようになる。その後、経営の健全化までを指導し、無理のない返済を実現するのだ。

マミゾウに提出した書面は、何度も計算し、念入りに検めた橙渾身の経営計画である。

「ふむ……」

啞え煙管のまま言葉少なに書類を捲るマミゾウの前で、ミステアは普段の奔放さもどこへやら、神妙な面持ちである。てっきり空気を読まずに余計なことを言い出してマミゾウの機嫌を損ねるのではないかと不安になっていた橙だが、その心配はなさそうだった。

むしろ、不安でたまらないのは橙の方だ。

ぺらり、ぺらり。一枚一枚、書類を丁寧にくめくり目を通してゆくマミゾウの前に、じつとりと背中に嫌な汗が浮かんでゆく。眼鏡越しに見える視線は普段とはまるで違う鋭いもので、橙は自分がその剃刀みたいな目でさくさくと切り裂かれているような錯覚すら覚える。これがニッ岩狸の本質なのかもしれない。

何度も精査して、文句の付けようがないように作つた返済計画だ。これで間違いなく、ニッ岩明神を納得させられるはずだ。

（大丈夫。これまでも何度もやつてることだもん。いつも通り、普通にしてれば……！）

自分を落ち着かせようと言ひ聞かせるそんな心のうちの動揺すら、マミゾウには見透かされているような錯覚が拭えない。正座した爪先はしきりに動き、尻尾がざわついて毛を逆立てる。

そして——橙にとつては無限とも言える時間の末。

「無理じゃな」

静かに、しかし重々しく、けして覆らないことを感じさせる声音で、マミゾウは書類を脇に放り、首を横に振った。

「このやり方では金は貸せん。済まぬが諦めてくれんか」

「そんな!!」

抗議の声を上げたのは橙のほうだった。書類のつくりは完璧だったはずだ。同じような条件で、マミゾウが金を貸してきた場面を橙は何度も見てきた。それなのに、どうして今日に限って——

「みすちーの屋台は美味しいし、人気だつてあるんです！ ちゃんと経営できれば、借金なんてすぐに返せるし、儲けだつて——」

「これを書いたのはミスティア、お前さんじゃなからう？」

きらりと眼鏡のレンズをきらめかせ、マミゾウ。

「……うん」

「おぬしには今より店を大きくする気はなからう。仮に客を大勢呼び込んでも、おぬしに出来る限界はあるうよ。並みの人間より勤勉に働こうなんぞというのは、ちよいとばかり妖怪にしちゃ不健康すぎるわい」

「そうよね、やつぱり」

全てを察したような、ミステリアの諦めの声音。橙は辛抱できずに立ちあがる。

「みすちー!!」

「……いいよ、橙。一応覚悟してたから。」

もしかしたら何とかなるかもって思ってたくらいで、駄目なら駄目でいいんだ。気まぐれで始めたことなんだし。どうせ人間たちだって妖怪から本気でお金取れるなんて思っていないんだから、私が屋台を止めればいいんだもん」

「いいの!? ミステリアはお店続けたいんじゃないのかったの!？」

「いいんだよ、別に。柄じゃなかったただだから」

ありがとうございました、と言葉を遺し、文福を去ってゆくミステリアの背中を見つめ、橙はぎりっと歯を噛み締め、そのまま二階へと取って返した。どかどかと乱暴に階段を登ってゆく橙の剣幕に、店の主人が驚いて道を譲る。

「マミゾウさんっ!!」

「騒々しいのお、ここでその名前は止めておくれと言ったじゃろう」

今日の取引の書面を揃えていたマミゾウは、使い魔たちに命じて襖を締めさせる。

「どうしてあんな意地悪言うの!? お金借りる時にもっと適当な事言ってた人間だったくさん居たのに、どうしてミステリアにだけお金貸してくれないの!？」
「そう怒るもんじゃない、橙。焦る商売人は稼ぎを減らすぞ」

「じゃあ、さっきの何がいけなかったの!! ミステイ

アが妖怪だから!？」

「……それは違うのお」

書面を束ねて仕舞い、煙管に火を付けたマミゾウは、ぷかりと煙を吐き出した。のらりくらりと答えるマミゾウに、橙は尻尾を膨らませて怒りをあらわにする。

「いかんと言ったのはお前さんにじやよ、橙」

「え」

紫煙を立ち上らせる煙管の先で橙を示し、マミゾウは橙の作った書面を指差す。

「——要するにの、こんな計算やら計画なんぞは正確であろうがそうでなからうが関係ないんじや。今月これくらい収入があつて、これくらい利益が上がるから——などというのはの、ちよいと数字に詳しくればどうとでも書ける。それよりもな橙。おぬしがミスティアに金を貸してやりたいと思つてしまつておるのがいいかのじやよ」

「だから、その何がいけないの!？」

眼鏡の端から見上げてくるマミゾウの視線にも、橙は怯まない。かつんと煙管を煙草盆に叩き付け、マミゾウは息を吐いた。

「おぬしの言う通り、ミスティアに金を貸してやつたとしようかの。その後何か不慮の事態があつて、ミスティアが返済できなくなるとする。その時おぬしは、あの子から金を取れるかね?」

「——つ」

平等な、冷徹に理と利を見極める、商売人の視線だった。

二ツ岩明神は時に、利子を取ることなく金を貸すが、それでも仁義にもとる行いをした者には容赦なく制裁を加えることでも知られていた。借りたものを返さぬ相手には二度と姿を見せず、貸したものは容赦なく取り立てる。

けつして施ではなく、慈善事業ではなかった。

「おぬしが商売でなく道楽で金を貸すのなら、それも

良からう。信頼は金で買えぬが、金にすることもできん。おぬしが勝手にそれをするのなら止めはせんよ。

だが、僕は商売しておる。商売とは何か分かるかね？」

いくつもの答えが橙の脳裏をよぎるが、もごもご口籠る以外にはつきりとした形をもたないまま、橙は答えられない。

「何度も言ったの、商売において最も大事なことは、公平であることじゃ。馬鹿正直に公正である必要はないぞ。これもれつきとした化かし合いじゃからな。だが、あいつは気に入らんから一〇〇円で売る。あいつは仲良しだから一〇円で売る。お前は大好きだから無料で良い。それを隠しめせず堂々とやっておったら、客はどう思うかの？ おぬしと仲が良いと思ってる者は、もつと安く——あわよくば金を払わずに済ませようと、おぬしに媚びようと考えるじゃろう。お前が嫌いな者は、高すぎて買うものかと思ひ、ますますおぬしを嫌うじゃろうな。そしておぬしはやがて、あ

つは人を見て顔色を変える信用ならん奴じゃと、誰からも相手にされなくなる。

それでは商売にはならん。施し、ぼらんていあじやな。橙。おぬしはの、ミスティアをちゃんとした客として扱ってやっておらんかったのじゃぞ。今さっきおぬしのした事は商売人の信義にもとることじゃ。それを自覚せい」

「……はい」

マミゾウの指摘はあくまで静かなものだつた。しかし穏やかであればあるほど、その言葉は深く橙の胸をえぐる。声が震え、涙が出そうになる。

ぐるぐると感情が渦巻く。自分が悪い事をしたという自覚と、どうして怒られなくちゃいけないのかという憤り。何もかもぶちまけ、わめいてこの場から逃げ出してしまいたかつた。

けれど、

ここで逃げ出したら、藍のところを飛び出した時と、

何も変わらない。橙はぎゅうつとマフラーに爪を立てて、叫び出したいのを堪える。痛いのよりも、お腹が空いたのよりも、この憤りを堪えるのは苦しかった。

じつと黙った橙を見、マミゾウは表情を緩める。煙管の灰を煙草に落とし、

「おぬしが作ってやったあの返済表、良く出来ておるよ。友達のために一生懸命考えてやったんじやろうなあ。じゃがそれがいかん。もう、おぬしには何故かはわかるな？」

「はい……」

「だから、ミステイアにはもう一度、自分で作らせて持つてこさせるように伝えておくれ。改めて審査するとな」

「え」

「儂は金を貸さんとは言っておらんよ。これではいかんと言っただけじゃ」

厳しくしていた声色を戻し、くすくすと、眼鏡の奥

の眼を細めるマミゾウ。茶目つ気たつぷりのウインクは、いつもの彼女の優しい顔だった。

「……わかりました!!」

ぱつと顔を輝かせ、走り出そうとした橙を、マミゾウは再度、呼び止める。

「……ああこれ、橙」

眼鏡の奥に、いつものにこやかな笑顔を覗かせて。

「いま、おぬしは儂をいい奴だと思わなかったかの？」

「……………」

あれだけ言われていたのに——虚を突かれた橙に、

ニッ岩狸はそつと諭す。

「人を信じるのも、大切に思うのも良いことじゃ。だが、友情や信頼を頭から信じて、一度も疑わんことは、決して良いことばかりではないぞ。ことさらに試せとは言わん。絆を持つなどとは無益言うつもりもない。が、心のどこかで、相手の言葉が本当かどうか、確かめようと思う心を持つておくことは、大切じゃぞ？」



かくして橙はミステイアに経理を教えることになった。経理と言つても、単なる簿記——家計簿のようなものである。商売をする妖怪自身の自助努力。それが二ッ岩明神が八つ目鰻屋の屋台の借金を一本化するにあたり、出した条件だ。

「これでいいの？」

「えーっと……」

思つていたよりずっと達筆なミステイアの書いた勘定科目を、アンチヨコを見ながら確認してゆく。

数字の羅列に最初は帳面を見るだけでも嫌がついてたミステイアも、簿記は計算ではなくただの作業の繰り返しなのだということが分かれば、意外と飲み込みは早かった。

毎日鰻をさばいて店を出すという、同じことの繰り返し

返しが苦にならないミステイアは案外几帳面な性格なのだ。生来の鳥頭は不安要素だが、鰻の味が良くなつていたことから分かるように、ひとつひとつ覚えるべき事に記録を残せば、さしたる不自由はなくやつていける。

「ここ、まだ回収してない売掛は、借方の方に書かないと」

「あ、そっか」

教える側になつて、橙の気を張り方も以前とは変わった。まだまだ頼りない先輩だが、それでもミステイアは橙ならなんでも知っているとばかりに質問をぶつけてくる。万が一にも間違つた事は教えられないし、知らないことは次までに調べて覚えてこなければいけない。

その責任感は従来の比ではなく、これに比べたらただマミゾウの使いとして人里を回っていた時なんて、一人で珍しいことを始めていきがっていたただとす

ら思える。

「橙、ここつてどう書けばいいの？」

「あのね、確か出納表の方から……」

こんな日々を繰り返すうち、橙は実感するようになった。ミスティアが新しく経理の事を覚えてくれると嬉しいし、彼女に教えると言葉を選び、説明をしよと頭を悩ませるのは、教える側にも成長を与えてくれるのだと。

自分の中でなんとなくしか覚えていなかったことを、はつきりと説明するには、それを言葉にして分解し、筋道立てて理解しなければならなかった。

そして思い返すのは八雲のお屋敷でのことだ。日々の式の講義が退屈で、居眠りや余所見ばかりの橙に、藍の指導はいつも厳しくて、橙はそれをちよつと……いや、かなり鬱陶しく思っていたが——今なら、真面目に講義を受けようとしないうちに藍が怒るのも当たり前かもしれないと思えてくる。

それでも藍は理不尽に怒鳴ることなく、丁寧に、橙のどんなつまらない疑問にも答えてくれたのだ。

初めての事ばかりだろうに、拙い自分の授業を聞いて、少しでも早くお店の経営の事を覚えようとしてくれるミスティアはすごい。

……それに比べて自分はどんなに不真面目な生徒だったのだろうか。教えた通りに帳票をまとめるミスティアを前に、橙は頬杖をついて晩秋の空を見上げた。





木々の梢は里の裾まで紅葉の色合いを広げ、朝晩には早々と霜柱が立つ。季節は晩秋から初冬へと移り変わり、八つ目鰻屋の経営は徐々に改善の兆しを見せるようになった。新しく客足も増えつつあり、ミスティアの歌声も一層艶を増したと評判である。

それに比例して忙しくなった仕事を抱え、橙は二ツ岩明神の橙子として人里と屋台とを往復し、通い慣れた道を急ぐ。

「うわ、遅れちゃったっ」

充実した毎日に確かな手応え、前途洋々と張りのある日々に、どこか浮かれた心があつたのは確かだろう。

——そんな気分を打ち砕くように、突如の災禍が橙を襲った。

前触れの無い不意打ち。音もなく放たれた弾幕が、頭上から橙に降り注ぐ。

ばら撒かれた粒弾が鼻の先を掠め、橙の髪の毛の先を焦がす。あと数センチ軌道がずれていれば、頭蓋を直撃していただろう。慌てて身を屈めた少女の頭上を、さらに十数発の散弾が行き過ぎる。

警告もなく撃ち込まれた弾幕は、地面に深く穴をうがち、命蓮寺参道の石仏を無残に打ち砕いてちゅいんちゅいんと剣呑な着弾音を響かせた。

命の危機を叫ぶ本能の警告のままに振り仰ぐ先。参門の屋根に黒衣の少女が腰を下ろしていた。

「——ッ!?!」

封獣ぬえ——マミゾウの仲裁以来、しばらく姿を消していた彼女が、無言のまま参門の上に立ち上がる。

開いた指に、ぽぽぽ、とカラフルな輝きが灯る。ぬえが無造作に放り投げた光はぱちぱちと火花のように弾け、不規則な軌道をとって橙を狙う。冗談では済ま

されない、明らかな敵意を孕んだ攻撃。

咄嗟に楔弾を撃ち返して相殺、橙子の成りをかなぐり捨てて尻尾と耳を立て、橙は牙を剥き出しにして門上に唸る。

「何するのっ!!」

「ばあーか。そんな事もわからないのか？ 憂さ晴らしだよ」

口元を歪め、ぬえは手を振った。鋭い短槍が少女の手に握られ、穂先が橙へと向けられる。予告線が空気を焦がす匂いを感じ、本能の警告のまま橙は身体を投げ出していた。地を転がる橙を掠めてレーザーが次々と放たれる。

ぬえのレーザーは直線のものではなく、蛇が身をくねらせ獲物に襲いかかるような複雑な曲線軌道だ。碧の閃光は鎌首をもたげて橙に喰らい付こうとする。四つ足になって逃げ回る橙の動きを見越して、敢えて鵬のような連射だった。

最後のレーザーをかううじて掠め、ぎ、と土埃を立てて着地する橙に、ぬえはけらけらと笑い声を立てる。「いい加減平和ボケしてる化け猫に、ここの流儀を教えてやってんだよ。感謝しな」

「……っ、なんでこんな事するの!? 私、なにか悪いことした!？」

「ああ、気に入らないね。お前みたいに勘違いしてるやつは、本つつ当に虫酸が走るんだよ。要するに——お前はここで終わりってことだ!!」

その口ぶりからするに、彼女が気に入らない相手を襲うのはこれが初めての事ではないようだった。

問答無用で攻撃が再開される。けたたましく笑いながら、ぬえは敵意に近い視線を橙に向け、正体不明の種を繰り出しては弾幕にかぶせて打ち込んでくる。

物の正体を失わせる力は、弾幕の種類すら曖昧に覆い隠す。軌道も数も当たり判定も読ませない弾幕が、容赦なく橙の手足を打ち据えた。両手を上げて顔を庇

うが、無数の弾幕に囲まれて橙は身動きが取れない。

「つあ!？」

避けたはずの一撃が、大きく弾道を変えて背後から脇腹を撃ち抜いた。着弾の激痛に耐えかねて、橙は地面を転がる。あくまで弾幕の体は取っているため、どれも致命の一撃には程遠い。——精々、当たり所が悪ければ死ぬ、程度の威力だ。

だからこそ、ぬえの敵意は本物だと判断するには十分だった。

「……、いい加減にしてよっ！ 怒るよ!？」

「大口叩くなよ小娘。だいたい、最初っから氣にくわなかったんだ。あんな幻影もんで驚いて逃げ出しそうになるくせにさ。ナズーリンの奴と引き分けるような雑魚妖怪に、このぬえ様が負けるはずないだろ」

「——言ったな!!」

地を蹴る橙だが、ぬえはそれを見越していたようにカウンターで符を宣言する。正体を失わせ、相手を惑

わす事に掛けてはぬえに一日の長がある。彼女の言動は挑発で頭に血を昇らせ、橙の動きを誘導するものだった。

——アンノウン「姿態不明の空魚」

波打つ鰭を振るい、空を泳ぐ半透明の棒状飛行物体スカイフィッシュが次々に出現する。スペルで作られたものとは言え、不定形に歪む空魚の外見は生理的な恐ろしさと嫌悪感を呼び起こす不気味なものだった。

警戒して射程外に逃れようとする橙の右腿を、高速で飛来した空魚が掠める。同時、ぞっとする悪寒と共に、橙は身体からごっそりと熱が抜け落ちるのを感じた。空魚のかすめた部分から、身体の温度が急速に低下してゆくのだ。両手足が鉛のように重くなり、押し寄せる眠気と疲労が橙の動きを鈍らせる。

がくんと傾く橙めがけ、空魚が群れ集う。高速で宙

空を泳ぐ半透明生物がつくる弾幕は、不規則な軌道と相まって回避を著しく困難にする。

「く、あつ」

反撃に撃ち返した楔弾は大半が空魚に飛ばれて撃ち落とされ、辛うじてぬえの身体を捕えた数発も、彼女の周囲を取り囲むぼやけた霧のようなものに絡め取られて不発に終わる。

「ほら見ろ。あん時の妙な術がなかったら、お前なんかただの化け猫だ」

無様な橙の姿をぬえは嘲る。悔しいがその通りだ。

弾幕では相手になりそうにないと判断し、橙は距離を詰めて左右の爪を振るうが、ぬえは背中の羽根を巧みに操ってそれらを受け止める。

さらに彼女の歪な三対の羽根のうち、赤は甲殻類の爪鎌、青は毒蛇の頭へと姿を変え、橙へ反撃してきた。

六本の羽根の連携に脚を掬われ叩き伏せられて、吹き飛ばされた橙は地に叩き付けられる。

「とどめだつ!!」

ぬえは構えた槍をくると回し、見事な捌きで橙の胸元へと突き込む。ギリギリのところで身をよじった橙の前で、しかし短槍はぐにやりと姿を変え、細い蛇へと戻る。

これは罠だ、本命は――

ぬえは酷薄な笑みを浮かべ、背中の羽根で握った槍を叩き込む。

その穂先が橙の額を貫く寸前で――力強い腕が、ぬえの手をしっかりと掴んでいた。

「ぬえ、待てい」

「――マミゾウ」

どろん、煙と共に現れた二ツ岩狸が、ぬえの握る槍を押さえ込む。眼鏡の奥でその表情は窺いしれない。

「なんだよ、見てただろ。これはこいつと私の勝負だ。いくらマミゾウでも、邪魔するなら黙ってない」

ぎざぎざの牙を剥き出しにして、ぬえはマミゾウに

噛み付かんばかりに迫る。ぎらぎらと戦意を滾らせるぬえに、マミゾウは大きく吐息した。

「そうじゃないわい。そういう血腥い事はやめておけと言っておるんじゃないよ。僕もおぬしも、建前上はこの寺の食客じゃ。その妖怪同士が争った場合、誰を困らせることになるか、わかって居らんとは言わせんぞ。……地底でした悪さの償いと、白蓮ちゃんへの恩返しをしたいと言ったのはどこの誰じゃったかのう」

「う……で、でもマミゾウ!! 私——」

正論を向けられ、敵意に染まっていたぬえの目が泳ぎ、徐々に落ち着きを取り戻してゆく。力の緩むぬえの手を離し、マミゾウは橙とぬえ、二人の顔を交互に眺める。

「無論、争うなどとは言わんよ。ガス抜きは徹底的にやらんといかんからのう。その方法を考えろと言うことじゃ。なに、幻想郷で諍いを決めるのは、ちょうどいい勝負事が有るのじゃろ?」



「どうしてこうなった……」

片付けられた広い境内の中央、どんよりを表情を曇らせてぼやくぬえ。橙も概ね同じ気持ちだった。どこから駆け付けたか境内には屋台まで出て、どっちが勝つか賭け事まではじまる始末。すっかりお祭り騒ぎである。

「橙ー、負けるなー!! やっちゃえー!!」

「橙ちゃん、頑張つてー!!」

周囲には物見高い参拝客のほか、ちらほらと妖怪達の姿まであった。ミステリアにチルノに、見覚えのある顔を見つけてしまい、橙は赤くなった頬を何度も擦る。

「つたく、マミゾウの奴……。いつもこうなんだよ……わかってんだけどさ……」

ぬえは恨みがましく観客席の一つ、二階の物干し台に陣取った古狸を睨むが、この場を設けた当の彼女は、涼しい顔で蒸し饅頭などをつまんでいた。さすが大妖怪の貫録は面の皮の厚さまで及ぶらしい。

「それでは、不肖ながらこの場の立会人を務めさせて頂きます」

境内の中央では命蓮寺の化主、白蓮が厳かに開会の辞を述べると、観客達がどつと沸いた。無論そんなもの正式な弾幕ごっこに決められた作法ではないのだが

——誰も野暮な口は挟まない。

あるいはこれも白蓮の人柄だろうか。

最初にあつたはずの敵意はすっかり中和され、当事者であるはずの橙もぬえもすっかり毒気を抜かれてしまっていた。

照れているのか、白蓮はこほん、と小さく咳払い。

「聖、しっかり！」

「姐さん、素敵ー!!」

「……落ち着きたまえ二人とも」

星に一輪に、寺の住人達が口々に声援を飛ばし、ナズーリンが呆れたようにたしなめる。

白蓮としては、普段から修業に励む弟子たちがその腕前を比べることで、新しく得るものがあるのだろうと固く信じているようだった。あの徹底した聖人ぶりは呆れを通り越し、いつそ感服したくなる。

これでは、お互いに死ぬまで戦うということはまずできそうにない。

「何から何まで余計な事しやがって……くそ」

揉め事の解決は基本、弾幕で。それがいまの幻想郷の流儀だ。

弾幕ごっこはその名の通り、あくまでも遊びではない。けれどそこに賭ける意志は、決して軽いものではなかった。ルールを定め条件を公平にする遊戯であるからこそ、真剣な方が勝つ。適当に戦っている決して我を通す事は出来ない。

お互いに譲れないことを決めるのに、これほど適した方法もないと言えた。

もつとも、すんなりとこの場が整った訳ではない。

ぬえの力は『物の正体を失わせる』事に尽きる。こんな明け透けな場での勝負は、彼女にとって一番の苦手とするところだ。当然ぬえはマミゾウに文句を付けたのだが――

『おや、ぬえ。まさかおぬし、橙になにもはんでくれてやらんつもりか。いやあ、さすがに大妖怪様は狡猾じゃのお。油断ならぬわ』

『なんだとー!?!』

『おぬしが普通に戦えば確実に橙に勝てるじゃろう。』

じゃがそれでおぬしの気は晴れるのかのう？ 格下の妖怪を叩き伏せて喜ぶような、そんなつまらぬ妖怪を友人にした覚えはないんじゃないやがのお』

……そんなやり取りの結果、符数は一死三符。橙にも辛うじて自前で相手になるスペルを揃えることがで

きる勝負となった。

「あーもうつ、なんでマミゾウの奴、そこまでお前に肩入れするんだよつ」

「知らないよ、そんなの」

「やかましいつ、ほえ面かかせてやるからな!! 見てろよ!!」

がりがりとくせつ毛の頭を搔きむしってぬえが怒鳴る。そこにはさっきまでの陰湿な負の感情は見当たらない。ただ、橙には負けたくない、シンプルなその意識だけが浮かび上がっていた。

マミゾウはぬえの感情から、譲れないと言う気持ちだけを引き上げ、対等で公正な勝負として卓の上に乗せたのだ。

実に見事な商才。これを見越して弾幕勝負を持ちかけたとするなら、マミゾウの手腕は恐ろしいものがある。橙は改めてそれを知った。

「良いですね? お互いに悔いの残らないよう、全力

で挑み、どちらが勝つても良い勝負となるよう、心がけてください。では、——始め!!」

白蓮が宣誓と共に手を振り下ろす。

憤りのままに先手を取ったのはぬえ。符の宣言は先程と同じ、姿態不明の空魚。

再び現れた空魚が橙を取り囲み、次々と襲い来る。

スペルの種は割れているが、今の橙には対策が難しい。先手を切るには相応しいものだった。直撃だけではなく掠めただけでも体温を奪う空魚の攻撃は、着弾ではなく弾幕の密度で橙の行動の自由を奪う類のものだ。

防御は不利だ。即座に判断して橙は手札を切る。

本来、橙の力量を上回っていないながらも、本尊を虎の化身とする命蓮寺であるからこそ、使うことが可能な一枚だ。

——鬼神「飛翔毘沙門天」

符に込められた式がスペルの助けを借りて活性化、無双の武神が橙に憑依し、その力を顕現させる。

式の力の根幹は回転にある。身を丸め飛び出した橙は身体ごと空魚の群れに突っ込んだ。黄金比率に従って旋回し、速度を増して威力を上げる。

一斉に襲い来る空魚を爪で払い、牙で噛み捨てて、ぬえに迫る。防御に回っても完全回避が難しい以上、消耗覚悟で突っ切る方が結果的には被害が少ないとしての判断だ。

「げっ」

まさか真つ向突っ込んでくるとは思わなかったか、ぬえは慌てて場を退いた。

正体不明を操って自分の力にするぬえは、相手の迷いを喰って強くなる。正体が分からない事は迷いを生み、時間を浪費させ、思考を空転させ、疑心暗鬼を生じて、その向こうにありもしない凶暴な妖怪を作り出

してしまう。ぬえの思惑はさっきの攻撃で橙の心に受け付けた恐怖心を煽ることだったのだろう。

けれど、橙だって化かすことには一端の経験がある。

ナズーリンのように部下達への巧みな指揮を用いて、臨機応変な布陣と戦術を用いるならともかくも、虚を突き驚かして化かすような方法は熟知していた。

「それはもう知ってる!! だから、効かないよっ!!」

「調子に乗りやがって!!」

スperlがお互いに効果時間を喰い合い、相殺する。

「――正体不明「赤マント青マント」!!」

ぬえは続けて手札を切った。左右に広がった二色の弾幕が翻り、交差するように襲いかかる。二択を迫る青と赤の弾幕は、その実どちらを選んでも自分から罠に飛び込む二重のひっかけだ。

攻略法は心を落ち着け軌道を見抜いてその隙間をくぐること――のだが、猫の本質ゆえ、橙には一所に留まってじっと様子を待つのは得意ではない。狩りの

タイミングならまだしも、相手のペースに嵌められてじつと見に回るのは不可能というくらい不得手だ。

「――式符「飛翔清明」!!」

元々地力では遥かに劣ることは承知の上。橙はさらなる相殺覚悟で符の宣言をする。

空に大きく、力に満ちた五芒星が描き出される。清明紋――京を守護する大陰陽師、妖怪を祓う安倍清明の敷いた陣は、ぬえの力を大きく削ぐはずだった。

――が。発動しかけた符は半ばでばかりと火花を立てた。起動しかけた式が途中で大きく歪み、構文が回文構造に陥り、致命的エラーを起こして煙を噴いた。出来損ないの符は焼き付いて燃え上がり、橙は慌ててそれを振り捨てる。

「にやああ!?!」

「あつはつはつは!! なんだそのポンコツ!! これなら符なんか使わなくなつて楽勝だな!!」

げらげら笑いながら、ぬえは槍を構え一気に身を寄

せてくる。背中の三対六本の異形の羽根が、甲殻類の爪鎌や蛇の身体めいてうねり、次々と繰り出される。拳や蹴り、肘に膝、手足の打突も交えて、隙の無い連撃は嵐のようだ。

さらに交えて打ち込まれる短槍の切っ先を、橙は獣の本能に任せてかわすので精一杯。

緑の帽子がぬえの槍に撃ち抜かれ、たちまち檻樓切れに切り裂かれた。スカートも大きく裂け、黒タイツにも穴があく。

赤い爪鎌を避け、毒蛇をかわし、槍をくぐり抜けたところで、ぬえの肘が強かに橙のみぞおちを抉る。たまらず吹き飛んだ橙は、ずきずきと痛むおなかを抱えて懸命に立ち上がる。

「被弾一！ 零死対一死!!」

白蓮の判定に観客が湧いた。

「こいつでとどめだ!!」

ぬえは攻撃の手を緩めなかった。槍と羽根を容赦な

く橙へと繰り出す。対する橙は、呼吸が乱れ、身体の奥にまで浸透する痛みに、ほとんど身動きも取れなかった。

もはや後がないところまで追い込まれた橙は、高コストの切り札を宣言した。黒髪の中から逆立った獣耳がピンと立って音を聞き分け、ほっぺからちよこんと飛び出した髭が揺れて風の流れを掴む。

「なあおおおお——うッ!!」

式を組み立てている余裕はない。素の自分——橙は自身が持つ化け猫の本性を剥き出しにして、ありったけの力を込めて吠える。

——化猫「橙」

頭の中から八雲の式として論理的に物を考える部分を追い出し、野生に戻るだけの単純な符である。これが今の橙の一番強力な符であり、切り札だった。

式の剥がれた状態のいわば素の橙、化け猫の本性は普段抑制している獣の瞬発力と、危機を避ける直観的な判断力を与えてくれるが、その状態で高度なスperlを使う余裕はない。

そして格闘戦に移行してなお、ぬえの速度と手数は圧倒的だった。橙はスperlを使ってようやく互角、その攻め筋は妖怪のそれとは思えないほど洗練された巧みなもので、まるで修業をした武術の達人のよう。

——ん？

羽根に爪を立て、槍を蹴飛ばし、繰り出される蛇に噛みつき——嵐のような攻防の中、橙の脳裏を疑問が掠める。なぜ妖怪のぬえを相手にそんな感想を抱くのか。その拭いきれない違和感に。

妖怪は武功を磨く事などない。もともと暴れたり人を苦しめたりする力を持って生まれる妖怪にとつて、力を振るうのは息をするのと同じ機能であり、自分の力を効率よく磨く意味はない。

だが——。

符の制限時間が残カウントを刻む中、橙は意識してぬえの攻め手を注視する。

二本の甲殻爪で空を挟み、その隙をつく様に蛇を突っ込ませ、死角から足払いを掛け、かわして不安定になった肩めがけ槍を打ち払う。背中の六本の翼を交えての見事な連携は、見れば見るほど洗練された巧みなもので、どう見ても妖怪の攻撃とは思えない。

妖怪として力を蓄えた者達は、こんな細かい技量に拘ったりしない。もつとどうしようもなく、抗いがたい圧倒的な力を振るうものだ。

化猫「橙」を繰り出し、橙がぬえに対処できるようになったのは、その攻め筋にどこか見覚えがあったからだ。

——ひよつとして!!

橙は半分勘で深く踏み込み、左右の爪を振るった。ぬえは落ち着いて槍で橙の爪をさばき、羽根を使つて

橙の身体を押さえ込む。そのまま跳躍と共に膝をがちあげ、橙の顔を狙う。

「やつ、ぱりっ!!」

予測通りの攻撃が来た事に、橙は強引に身体を反らしてぬえの身体を投げ飛ばした。

橙の疑問は確信に変わる。ぬえの動きは、マミゾウの戦い方に良く似ていた。橙がマミゾウに技術の稽古をつけてもらったのはほんの数回だが、驚くほどその判断、思考、攻撃がそっくりだ。

ずっと昔、一時期とは言えマミゾウはぬえの後見人のような事をしていたらしい。恐らくその時、ぬえはマミゾウに戦い方を習ったのだ。

ぬえの技量が高いのは、裏返せば、彼女自身が元は非力であったこと——鍛錬を積まなければ十分な力をもっていなかった事を示す。そしてその訓練された技量には、当然ながらひとつの法則がある。当たり前だ。

目的や意図をもたずに鍛錬を繰り返しても、力にはな

らない。

洗練されたぬえの技量は、本来の彼女の能力である『正体不明にする程度の能力』とあまりに噛み合っていないのだ。

効率よく相手を仕留める。戦意を削いで無力化する。逃げられぬよう移動力を削ぐ——戦い方に目的があれば、それを読んで、対応することは橙にも不可能ではなかった。

槍が脚を掠めると同時に、橙は姿勢を崩した。狙い澄ましたかのように立て続けに決る赤い甲殻の爪鎌を辛うじて避け——しゃあっと伸びた蛇の頭が、橙の足首を捕らえる。鋭い牙がタイツを裂いて食い込み、毒の激痛を走らせる。

悲鳴を上げ地面に転がる橙へ、ぬえは余裕の笑みを见せてくると短槍を構え、突き下ろした。

同時。

橙は地面に突き立てた両手の爪でその場を大きく跳

ね、逆立ちから無事な左脚をぬえの側頭部めがけて叩き付ける。

「んがっ!？」

直撃は辛うじて外れたものの、顔を庇おうとしたぬえの槍は弾かれて大きく上体が泳ぐ。そこへ続けて打ち込まれるのは化け猫の二本の尻尾。ばちん、と盛大な音を立ててぬえの頬を引っぱっていた。

歓声が上がる。

たまらずよろめいたぬえに、橙は爪にありつただけの妖力を込め、思い切り打ちふるった。狙いは彼女ではなくその背中の中。羽根。甲殻の爪鎌が一本。蛇頭のほうが二本、ざくりと切り裂かれて宙を舞った。

「うち」

舌打ちと共に、ぬえはぶるりと身を震わせ、四肢に力を込めると背中からあたらしく羽根を生やす。

「……生えるんだ、それ」

「当たり前だろ」

元通りの姿を取り戻した翼を振るって平気な顔をしてみせるぬえだが、橙は慌てない。いくら切つても生えたとしても、生やす度に妖力を消耗させることはできるはずだった。

「——そうじゃなくつても、別に相手が強くなつたわけじゃないもんね」

徒労を煽る作戦だろうが、橙は惑わされなかった。利点というのを見誤ってはならないのだ。いま見せたぬえの強みは、斬られた羽根を再生できると言うことだけ。羽根の動きの巧みさや力は、これまで見てきたものと変わらない。

化かし合いをする限り、相手と自分に何ができるかを常に把握することが重要な筈だ。

「被弾一！ 一死対一死!!」

戦績を五分に持ち込んだ橙に、声援が飛ぶ。

ぬえが続けて繰り出した惑わしの魔鏡、幻影を生む正体不明「紫鏡」を打ち破り、橙の化猫「橙」も効果

時間を終える。

これで双方のスペルが尽きた。

お互いに三符を使い切り、残機零で無事。とは言え一見して無傷のぬえと、あちこち擦りキズ怪我だらけの橙は互角とは言い難い。相対するぬえはじつと橙を見つめ、地上の白蓮へと呼びかけた。

「……白蓮!!」

「はい？」

「デツキの追加ってありかな」

「——どうなんでしょう？」

傍らのマミゾウに助言を求める白蓮に、マミゾウは首をかしげつつ、

「僕もそんなに詳しいわけじゃないが、まあ、双方の合意があるんなら良いんじゃないかのう」

命名決闘法に対する経験の差や理解なんて、ここにいるほとんどの者たちが似たり寄ったりだ。じゃあそれで行きましょう、という実にアバウトな白蓮の裁定

で、ルールの変更はあつさり許可された。

「気が変わった。……お前なんか使うつもりなかったんだけど」

ぬえは手元のサブデツキから、大事に仕舞っていた一符を引き抜き、伏せたまま符の使用を宣言する。彼女にいつにない真剣な表情があるのをみて、橙は尻尾を膨らませた。

(……どうしようつ……)

冷たい汗が背中を伝う。動揺は浮かべまいと必死に表情を繕いながら、橙は内心激しく慌てていた。

追加と言われても、もう橙には使える符が残っていない。式が剥がれてから何度も失敗を繰り返し、どうにか用意できたのが「飛翔毘沙門天」と「飛翔清明」の二枚だけなのだ。原則として同じスペルが宣言できない以上、化猫「橙」をもう一度使う事もできない。八方塞がりだ。

ぬえが伏せた符には強い魔力と怨念を感じる。相当

に強力なスペル——こんな戯れの試合にはちよつと相応しくないものだと分かる。それに釣り合う手札など、橙は持っていない。

「つ……」

破れかぶれで、橙は空白の符をデッキに突っ込んだ。完全なブラフ、はったりだ。しかし折角の流れで弱みは見せられない。

両者の準備が整ったのを見て、白蓮は命名決闘の再会を宣言する。

「……………」

追加された最後の一符を手に、相對する両者。激しい格闘戦から一転、痛いほどの静寂があたりを支配する。観客達も固唾をのんで見守る中、ぬえはわずかに口元を緩めたのを、橙は見逃さなかった。

（……気付かれてる!!）

橙が己の失策に気付くと同時、ぬえは躊躇わず符を切っていた。

——恨弓「源三位頼政の弓」

寺の境内にはあまりに似つかわしくない禍々しい怨念が空に渦巻いた。どこからともなく赤黒く濁った雲が湧き起こり、ぬえの背後、空に無数の矢が浮かび上がる。

怨讐の鏃が、ぬえの示した指の先、橙の射る方角めがけて無差別に放たれた。

「まずい!!」

「姐さんっ!!」

即座に動いたのは白蓮だった。一挙動で魔人経巻を広げ、引き出した法力で観客達を守る結界を張る。一瞬遅れて一輪が飛び出し、雲入道を掲げてそれに続く。直後に、凄まじい数の鋼の鏃が周囲を撃ち貫く撃音が轟いた。

間一髪、結界に阻まれた観客達が悲鳴を上げる中、

見上げるほどの巨体を膨らませた雲山が、豪快な拳を振るって流れ矢を次々叩き落してゆく。ムラサも錨を担いでそれに加わる。

危機を察したナズーリンは流れ矢から逃げるためいち早く寺の中へ引つ込み、響子も慌ててそれに続いた。物干し台を石櫓に化けさせて流れ矢を防いだマミゾウと、仁王立ちのままじつと様子を見上げる寅丸だけが、その場に残る。

——かつての平安京（たいらのみやこ）で射殺された怨念、いまだ晴れず。正体不明の妖怪、鶴を射殺した三位入道、源頼政の弓。封獣ぬえのもつとも根幹をなす途方もなく強力な最後の切り札。

その直射を浴びながら——橙は追い詰められていた。
「っ」

全身全霊を回避に集中し、ほとんど避ける隙間の無い矢襲の間に懸命に掻い潜る。だがそれもあと何秒持つだろう。被弾は時間の問題だ。せめてスペルの相殺

を試みたいが、正直、万全の状態であってもあの恨弓に適うだけの力をもった符は、橙のデッキには存在しない。切り札だったはずの化猫「橙」は身体能力強化のために使い果たし、デッキの残りははったりのための空白カードだ。あとはせいぜいが発動するかも怪しい、出来損ないの自作符。これであのスペルを押し返して被弾を奪えるとは思えなかった。

かつての京を騒がせた大妖怪と、式を失った一介の化け猫。力の差は歴然だ。

（式さえ残ってれば……こんなの、簡単に）
無い物ねだりをしようとする弱い心にするぶるとかぶりを振って、橙は両の頬を強く叩いた。

負けたくない。ぬえの放つ源三位の弓を前に、橙の心はいまだ折れてはいない。

もちろん、ぬえにだって負けたくない理由はあるのだろう。

「でもそんなの、私だって同じなんだからっ!!」

命蓮寺を訪れ、マミゾウに、ぬえに出会い、沢山の経験をして切望してきたこと。もつと強くて、立派な妖怪になりたい。その誓いは橙の胸の中で熱く燃えている。けれど——それを成すに足る、命をかけるに十分なスペルが、もう一枚も残っていないのだ。

普通に考えて、勝てるとは思えない。頭の中の冷静な部分が至極まっとうな計算結果を弾き出す。仮にこのスペルをくぐり抜けても、橙に反撃手段は残されていない。これ以上傷を負ってぬえと戦うのは不可能だろう。いいところ、降参するか、時間切れで負けるかのどちらかだ

絶体絶命、敗北必死。あまりにも明白で無慈悲な結論だ。

「——でもっ!!」

負けたくない。

最後まで、諦めたくない。

だから橙は多くの迷いを振り切って、まっすぐに駆

けだしていた。矢ぶすまの中をまっしぐらに、形振りなど構ってられない、少しでも早く、けれど身を低く、全力で、四つ足を付いて耳を伏せ、尻尾を振り立て、ぬえを目指して走る。

こんな時にも、信じられるものがあるとするなら、それは。

——それは。

最高速度での疾走を阻むべくぬえの放つ矢雨が橙を狙い撃った。手を掠め、腿を裂かれ、グレイズと呼ぶにも強引なダメージがみるみる橙を傷だらけにしてゆく。

「相討ち狙いか?! 無茶だ!!」

ナズーリンが叫ぶ。賢将の言葉通り、橙の行動はあまりにも無謀過ぎた。源三位頼政の弓はこれまでの弾幕とは密度も威力も違う。ぬえの本質に根ざし、耐久も兼ねた切り札相手では、スペルの相殺を狙って突っ込んでも、なお押し切る事のできないほどの力が込め

られている。

はじめ、およそ五十歩ほどだった彼我の距離は、橙の疾走で三十歩に縮まり、さらに二十歩を割る。だがその時、橙の胸元へと素晴らしい速度で鏖^あが走り、妖を払う一矢が突き立った。

橙はスperlを宣言する余裕もなく源氏の剛弓をその胸に受け、化け猫の小さな身体が大きく吹き飛ぶ。

「橙!!」

「やった!!」

歓声を上げるぬえ。勝負はついた——皆がそう判断し、白蓮が「それまで」の声を上げようとする。観客達が一斉に立ち上がるうとしたその時だ。

「まだじゃ」

マミゾウが低く呟いた。素早く白蓮の隣に移動した彼女は、振り下ろされようとした白蓮の手首を抑える。佐渡の二ツ岩は橙の変化を見逃していなかった。

胸を貫かれて吹き飛ばされたはずの橙の身体が、地

を転がる前に——宙へと跳ね上がる。

見開かれた彼女の瞳には、無数の式が溢れ、超高速の演算を始めていた。

どっと溢れ出す、数百万を遥かに超える無限の式。橙の深層心理の奥深く、正体を偽装し深く密かに常駐していた八雲式群^{ヤクモ・クラウド}が、一斉に活性化する。

——鬼符「青鬼赤鬼」

被弾覚悟のカウンター^{喰らいボム}。顕現した二匹の鬼が、橙の前後を固めて具現する。

「んなあ?!」

ぬえが度肝を抜かれたように叫びを上げた。

鬼神変——稀代の大術師、役小角の従えていた前鬼後鬼の守護を原型とした、橙を篤く護り備える防護プログラムだ。この二柱の鬼神、通常の式の稼働状態では命令を下し動かす権限は橙に与えられているが、危

急の時には自動で発現し、橙を守護する事を最優先とする。

自分の式は、村紗の水を浴びた時に全て剥がれ落ちてしまった。今の今まで、橙はそう思い込んでいた。何度も確認してたしかめた。式が一片も残っていないのは間違いないはずだった。

けれど。

（――藍様！）

最後の最後の窮地に、橙は信じることにしたのだ。

あのすきま妖怪の式、八雲藍が。敬愛し、信頼し、大好きな自分の主が、そんな適当な式を打つことはないはずだと。

命の危機があれば、必ず青鬼赤鬼は発動する。

この度団場で、橙は賭けたのだ。自分が、主にとつてどんな存在なのかという事を。

「私が、本当に藍様の式なら。藍様は、私を守ってくれるっ!!」

主従の絆を図ることなど、本来道具たる式の身では不相応かもしれない。けれど藍は、紫は、感情や信頼といった形のないものであるうとも、必要ならばそれを切り出し、戦いや交渉のカードにしてみせるだろう。大切にすることと、傷付かぬように恐れ、誰からも遠ざけることとは、違う。

「なああ——おお——うツツ!!」

裂帛の気合を伴い、化け猫の咆哮が響き渡る。

鬼神の力を宿した強固な籠手を纏い、橙の振り上げた爪は源三位の弓を打ち砕き——空に巨大な亀裂を穿った。

両者スペルブレイク。二つの爽快な破壊音が青を取り戻した空に響き渡る。先程にも増した大歓声が寺の境内に轟く。

双方一死、残符〇。

だが、窮地を粘って同条件に持ち込んだ橙と、絶対有利を掴んでいたところを詰め寄られたぬえ、あとは

心の勝負になる。果たして、動揺を隠せなかったぬえは、たった数度の交差で橙の放った楔弾を避けきれず、その場に撃ち落とされる。

今日一番の大歓声が、境内に轟いた。

予想外の勝利に沸き立ち、興奮冷めやらぬ境内。

信じられないと言う顔でへたり込んでいたぬえだったが、やがて我に返り、チルノやミスティア達に囲まれてぎゅうぎゅうと抱きしめられている橙に向けて叫ぶ。

「待てよ、なんだよ今の!」

胸上げ途中の妙な体勢で動きを止めるチルノ達に、

ぬえはよろよろと身を起こし、詰め寄った。

「ずるいじゃないか、どう見たつて今の、お前の符じスベルやないだろ!」

「かっかっか。負け惜しみはやめておけ、ぬえ」

「マミぞー!」

「デッキの追加を申し出たのはお前じゃろ。大技で勝

ちたかったんじやろうがなあ、事前に宣言がなからうと、カウンター喰らいボムのスベルは反則とは言えん。端から相手を舐めてかかったのはお前じゃよ。

……いやまあ、儂も初めは十番勝負なんぞと大きな口を叩いておったからのお、人のことは言えんが」

博麗神社での巫女との一戦を思い返し、マミゾウは苦い顔。

「それに、橙の符は勝負を五分に持ち込んだまでのことじゃろう。おぬしは最後の符を破られた時点で、他の戦い方を考えるべきじゃったし、普段のおぬしなら間違いないくそうしておったろうよ。……そうさなあ、儂の知るおぬしなら、こんな勝負になった時点ですつとと放り出して、もつと自分に都合の良い条件で橙を手玉に取っておったかの」

「……………」

「ちいとは頭は冷めたかの、ぬえ」

被弾や疲労の度合いをみるに、橙が勝者とはとても

見えない有様だ。それでも勝敗を分けたのは、弾幕こつこつという遊戲に、どれだけ真剣になったかの差。

古い妖怪は、自分が妖怪であることに拘り、人との関係を崩さず、新しい変化を受け入れることを好まない。それではこの幻想郷ではやっていけないのだと、マミゾウは痛感している。

「放つたらかしにしとつてすまんかったの、ぬえ。色々寂しい思いをさせた」

「なんだよ、来るなよツ!! 今更そんな顔したつてつ」
「かつつか。この二ツ岩、女子を泣かせたままにし
ておけるほど薄情ではないぞ」

「……まみ、ぞー……ツ」

涙ぐむぬえを抱き寄せ、マミゾウは小さな背中をポンポンと叩いてやる。ぬえの顔は見る間にくしゃくしゃになった。

「ほれ、あまり意地を張るのは止めておけ」

「うえー……んんっ!!」

火の着いたように、ぬえは泣きだした。さつきまでの恐ろしさはどこに消えたか、橙もさすがに面食らう。

「まみぞーの馬鹿つ、せ、せつかく、私が迎えにいってやったのに、つ、ひとの事なんかどうでもいいって顔しやがつてつ、あ、私が、どんだけ、まみぞーに会いたかったのかも知らないでつ、ばかつ、うう、うああああー……んんっ!!」

皆が目を丸くする中、京の夜を脅かした大妖怪は、子供のように泣き続けた。



大一番は無事に終わって。泣き疲れたらしいぬえは、マミゾウの膝の上ですやすやと寝息を立てていた。

ずっと年上なのだし、もつと格上の妖怪と想っていたのだが、案外自分と大差ないのかもしれない、などと橙は思う。

「普通、千年も生きればもうちよいと落ち着くもんじゃないが……こやつはいくつになっても成長せんのか。まあ、儼からしてみればそこが可愛いもんじやが、羨ましい限りよのう」

年経た妖怪にとつて、心の若さ、言い換えれば不安定さを保つことは何よりも重要視される。長く生きれば生きるほど、妖怪はその方向性が固定され、そこから逸脱することが難しくなるのだ。力を得ると同時に、彼等の燃費や効率も著しく悪化する。

正体不明という本質をもつゆえに、ぬえはその例外に位置しているのだろうと、マミゾウはぬえの頭をそつと撫でた。

「ぬえはの、正体不明うんぬん言うておる割には、曖昧なことが嫌いだなあ。お前さんの態度にいろいろ思うところがあったんじゃないやろな。……不器用なやり方しかできんのがどうかと思うが」

額にかかったくせのある黒髪をそつと梳いてやり、

マミゾウは苦笑。

「こいつなりのお節介だったと、そう思つてやつてくれると有り難いのお」

つられて笑う橙に、マミゾウはゆつくりと鼻上の眼鏡を押し上げた。

「どうかね橙、少しはすつきりしたかの」

「——はい」

ぬえも橙も全力を尽くしたのだ。心地よい疲労感と、達成感が胸の中にあつた。落ち着いて答える橙に、マミゾウはそうかと頷いて杯を呷る。

「さて、試験の期限まであと十日。……おぬしが良い答えを出せることを期待しておるよ」

「が、頑張ります」

忘れかけていた事に釘を刺され、橙はびくりと背筋を伸ばした。ぎざぎざと頷く首の動きがぎこちないのは、疲労のせいばかりではない。

まだ何の目途も立っていないけれど——

なんとかなるかもしれない。実にお気楽ながら、
はそんな予感と共に、青い空に向けてなーおうと一声
鳴いた。





暦はいよいよ師も走る暮来月。冷え込みは日々厳しさを増し、あたりはすっかり冬を迎える装いだ。

丑三つ時をさらに過ぎ、里の呑ん兵衛たちもようやく重い腰を上げる時刻。けれど妖怪達にしてみればこれからが一日で一番楽しい時間だ。人間達が千鳥足で帰途に就くのと入れ替わりに、ミステリアの屋台には妖怪達が次々と姿を見せる。

筆書きで仕込み中と記された木板を吊るした八つ目鰻の屋台には、簡素な椅子に卓を広げて妖怪達が酒を囲み思い思いに喋くっている。名目は橙の祝勝会の八次会ということだが、何のことはない、ただ集まって騒げれば良いのである。

「よし、つと。今月分これでおしまい！」

手慣れた様子で晦日のベを記す夜雀の邪魔にならないうよう、リグルやルーミア達は持ち寄った山菜や炒った木の実、残った魚のアラなど、秋の実りを囲んで杯を傾ける。

「ねえみすちー、仕入れのことなんだけど」

そんな中、割烹着姿の夜雀女将のご相伴に預かりながら小さな杯を傾けて。台帳に並ぶ数字を示し、橙はかねてからの疑問をぶつける。鰻のたれに使う醤油、酒、味醂、酒のアテとなる乾物や豆腐等々。呑み屋としてみればありふれた品揃えだが、問題はその金額だ。

「こんなに高いの？」

「うーん。そうなんだよね。でも他の人にはもっと安く売ってるんだけど、私のだけそれじゃ足りないってもつと沢山出せって言うんだ」

「なにそれ、酷いよ」

「横暴だなー？」

リグルの反応ももつともだろう。いまはきちんと地

代まで払つて、人里のルールにのっとり商売をしているミステイアに対して、流石にあまりの扱いだ。借金の返済はまだ終わっていないが、以前のような問題はもう解決済みである。

「でもね、この前もいつものところで仕入れようとしたんだけど、これじゃ足りないって言われたもん」

「どういうこと？」

「分かんないよ、このお金じゃダメだっていうの」

丸く頬を膨らませ、ミステイアはカウンターに頬杖を突く。橙はふと頭をよぎった猛烈に嫌な想像に、椅子を蹴立てて立ち上がった。

「ミステイア、ちよつと金庫見せて！」

ほろ酔い気分も一気に醒めていた。

なによつと文句を言う夜雀を急かし、店の売り上げを納める手提げの金庫を開けさせて、橙はその中から錢束を引っ張り出した。屋台の明かりにかざし、一枚一枚を改める。特に重要なのは手触り、重さ、全体の

造形の甘さだ。

「これって……まさか……」

屋台の暗い照明の下で確たることは言えなかったが、橙の胸の中にははっきりと一つの解が浮かび上がる。

「んあー、どしたの？」

ひょいと顔を覗きこませてきたのは珍しく屋台の端に陣取っていたてゐた。寒さ対策なのか、すでに真冬のようなふかふかのマフラーとコートに身体をうずめ、爛酒をちびちびとやりながら人參の胡麻炒めなどを齧っていた彼女は、深刻な表情をしている橙の前から一枚錢貨を拾い上げ、卓上の洋燈に透かすようにして眺めて眉を潜める。

貨幣の端をガリと齧つて、自慢の前歯に感じる金臭さに顔をしかめ、てゐは吐息。

「やられたねミステイア」

「え？」

「見てみな、こいつは鏝錢だよ」

「やっぱり……」

てゐは永遠亭の置き薬のやり取りで橙よりも人里の通貨に詳しい。そもそも生きている年月で言えばこの場の誰よりも大先輩なのだ。彼女が保証するとすればほぼ間違いないのだろう。

できれば外れていて欲しかった想像が的中してしまった事に、橙はその場に膝をつく。

「びた、せん？」

「……出来の悪いお金ってこと」

「え、お金はお金でしょ？」

きよとんと首を傾げるミステイア。もともと買い物なんてしない妖怪に区別をつけろというのが無茶な話ではあるが、橙は憤りを理解してもらえないことに唸り声を上げる。

鏹銭は質の悪い貨幣の総称である。鑄造の過程で失敗があったり、含まれる金属の比率にむらがあったり、欠けたりして不揃いになってしまったものをそう呼ぶ

のだ。多くは貨幣の不足に伴って、急場凌ぎに鑄造されたものだが、中には有力者が正規の手続きを踏まずに砂型などを用いて勝手に鑄造した私鑄銭も含まれる。これらは事実上の贋金だ。

一応、正規の貨幣として流通しているだけに、一律に偽物と断じることができず、実に性質が悪い。

額面こそ正規の銭貨と同じだが、質の悪い鏹銭は取引には敬遠されることが多く、おおよそ、市価の四分の一から五分の一ほどでしか価値を認められない。

この銭束も、額面上は一〇〇円だが、実際はその四分の一に満たない価値しか持たないのだ。ミステイアの持っている金庫の中身は、半分以上がこの鏹銭で占められていた。

「どうしてこんなこと——」

呆然とつぶやく橙。だが問うまでもない。誰かが、ミステイアの無知に付け込んでこれを押しつけたのだ。妖怪には貨幣の良し悪しなど分かるまいと、明らかな

悪意を持つて。

おそらく交換は直接の取引ではなく、高額な紙幣かなにかを両替するか、ツケの掛け払いや仕入れの時だ。その方法は想像するしかないが、大口の取引が有った時をねらつて、ミステリアに鏹銭で高額の支払いをした相手がいたのだ。

大結界で幻想郷が隔たれる以前、鏹銭を良貨と区別する選銭行為は、一般常識として禁止されていた。閉鎖後も幻想郷の流通は八雲紫や天魔をはじめとした一部の力のある妖怪と、里の有力者である商家、名家による寄合、貨幣の材料となる貴金属を供出する是非曲直の三者によつて通貨の統制が行われている。

それでも、彼らが統制を握るまでの大結界敷設直後の混乱期には、一部の悪意を持った者たちによつて私鑄銭の鑄造がおこなわれていた。貨幣の一枚一枚に名前が書いてあるわけではなく、一旦流通に載った貨幣を選別することも難しく、一定量の鏹銭が出回つてし

まったのである。

いまも選銭は禁止されているが、実際には質の悪い鏹銭は人里の多くで好まれず、額面通りの値では受け取られないことがほとんどである。

「大方、どうかで悪知恵の働く人間が考えたんだろうねえ。どうせ妖怪相手だ、銭の価値も分からないだろうってね。案の定、橙が来るまで気付かなかつた訳だ」「みすちー、どいつがやったのか覚えてないの!？」

「うーん……」

肩を掴まれて揺さぶられながらあれこれと首を捻るミステリアだが、その鳥頭にどこまで期待できるものか、案の定ぶすぶすと煙を吹くばかりではつきりとした答えは出てこない。夜雀に何月も前のことまで鮮明に思い出せと言うのはどだい無理な話だ。

「それでなんだね。この前の買った分が払えなかったもの」

「なんだか失礼な奴らだなあ。そんなのもう食べちゃ

えびいのに」

「そうなんだけど……でも、そうしたら、妖怪が人間を襲ったって、巫女に言い付けるって言うし」

誰も好きこのんで退治なんてされたくない。人間達に痛い目をみせるのはいいが、そのたびに巫女に追い回されていては割に合わなすぎる。

「よく考えるもんだねえ」

てゐは感心した様子で頷いた。要は、ずる賢い人間達がミステイアの店を鑢銭の引受先にして、実際の四分の一以下の価格で安く買い叩いていることになる。事によると、他にも被害にあっている妖怪が居るかもしれない。

「最近じゃ鑢銭なんて誰も使わないから、ひと山いくらで壺の中に溜まつてもんだけど、そいつを上手いこと金の山に変えて見せた訳か」

証拠もない、記録も定かでも無いとなれば泣き寝入りするしかないのか——橙は頭を抱える。

「さすがのあたかも頭にきた！ 仕返ししてやろうよ、みすちー！」

「そうだよ、このまま黙ってるつもりなの?！」

「手伝うのか」

これ以上人間達の横暴を許すなど、声を上げる一堂怒りの声は次々に伝播し、このまま人里に突撃だと叫ぶ氷精に皆は賛同する。

皆が一斉に地面を蹴って空に舞いあがろうとした矢先、橙は両手を広げその前に立ちふさがった。

「……ちよっと待って、皆!!」

「おや」

ただ一人蚊帳の外とばかりに独り酒を決め込んでいたてゐるが、思わぬ展開に面白そうに片眉を上げていた。



白み始めた空の下。命蓮寺の境内には、すでに待ち

合わせたマミゾウの姿があつた。どこかで一杯ひつかけてきたところなのか、少々顔が赤い。装いはまだ二ツ岩明神のもので、寒そうに巻いたチェック模様のマフラーの下から白い息が覗いている。

寺のあちこちにはすでに早くから起き出した妖怪達が朝の準備と勤行に忙しく走り回っている。

「みんな、こっち」

ぞろぞろと皆を引き連れて、橙は参道を歩く。ついできた妖怪達の中にはいい加減うつらうつらと船を漕いでいる者たちもいたが――

「おはよーございます!!」

「うわあ!?!」

早朝の境内に響き渡る大声。元気いっぱい、のヤマビコに、チルノ達も思わず目を覚まし、姿勢を正して挨拶を返した。元気な挨拶は心の栄養。慧音先生による妖怪青空教室の成果である。

なお、この衝撃的な出会いがヤマビコと夜雀の最初

の邂逅であり、後に一世を風靡するパンクロックバンド、鳥獣伎楽の結成秘話となるのだが――今は全く関係がないので脇に置く。

「遅くなりました!!」

「おや、早かったのう」

「みんなを集めるのに時間がかかっちゃって……」

橙が式を使つて飛ばした手紙を眺めていたマミゾウは、くると宙返りをしていつもの狸の姿へと戻り、眼鏡を押し上げて一堂を見回す。見事な変化を見せた大妖怪を前にやや気後れしている皆を代表し、橙はマミゾウの前に出る。

「事情はあい分かった。して、どうする?」

マミゾウには先に下調べをして貰っていた。橙の予想通り、この鏢銭による詐欺は、経済や数字に疎い妖怪をターゲットにしたもので、被害者も複数にわたっていた。いざ発覚しても実力行使に出ないような、おとなしく力の弱い妖怪を狙い打っているあたり、相当

に性質が悪い。このまま放置すれば被害はさらに広がるだろう。

「——やつてみたいことがあります。そのために力を貸して下さい」

「ほう？」

背を伸ばして耳打ちをする橙に、佐渡の二ツ岩狸はふむふむと頷き、面白そうに口元を緩める。

「どうしたんだい皆、大勢集まって何の騒ぎだい」

子ネズミ達に騒ぎの報せを受けたのだろう、早々と寺にやってきていたナズーリンがやってくる。ダウジング用のロッドを腰から外してくると回し、完全に警戒モードだ。

そんな彼女にチルノがぶんぶんと手を振る。

「あ、ナズりん」

「おはよー」

「……君達もか。あまり朝から騒がないで欲しいね」
多少毒気を抜かれたように、ナズーリンがため息を

ついた。橙は知らなかったが彼女達、どうも顔見知りらしい。

それにしても珍しい顔ぶれだと、賢将はちらりとマミゾウへ視線を放る。

「厄介事を持ち込むようなことは止めにして貰えないかね、マミゾウ。仮にもここは寺なんだ、聖の善意に付け入るようなことは感心しないよ」

「いやあ、違う違う。今回の首謀者は儂じゃないよ。

この——橙じゃ」

ずいと橙を前に押し出し、マミゾウは笑う。ナズーリンは露骨に顔をしかめた。

「やれやれ……今度は一体何を企んでいるんだい。この前の弾幕勝負だって、参拝客に怪我人が出なかったから良かったようなものの、一歩間違えばどんな事になっていたか。少しは寺の一員である自覚をして貰えないだろうかね」

「——あの事は謝るけど、今日は星さんに大事なお話

があるの。たぶん、このお寺にも良い事の筈。なんだつたら、聖さんに一緒に居て貰ってもいいから」

賢將の洗面はますます深く案る。

「胡散臭い……そんなものを信じるとでも思うのかい。ご主人様だつて忙しいんだ。益体も無い話に付き合っている暇は——」

「私の事は信じられなくていいよ。でも、この話が断られたら、私とマミゾウさんは他の……太子廟の仙人のひと達か、八坂の神様のところに話をもっていくつもりだから」

山の信仰を集める守矢神社に、仙界の道場に住む仙人たち。仏門である命蓮寺が意識する他宗派の名前を出したことに、ナズーリンが明らかに動揺したのを橙は見逃さない。

彼女は基本的に堅実であり、慎重だ。臆病であると言つてもいい。だからこそ、前触れなく自分の手に余る大きな話を突き付けられた時、即座の決断を苦手と

する。事前に十分に調査をし、証拠を固めからでなければ動けないのだ。橙の持ちかけた交渉はそこを突いた形になる。

「それでも駄目だつて、あなたが判断をできるなら、好きにすればいいんじゃないかな」

「む……」

思わぬ斬り込みに虚を突かれ、答えあぐねるナズーリン。その背後ですらりと僧坊の障子が開く。香木の穏やかな匂いをほのかに香らせ、虎縞の毘沙門天が姿を現した。

「いいでしょう、話を聞きましょう、橙さん」

寅丸に迎え入れられ——ぞろぞろと集まる一堂の中。橙は皆と顔を見合わせ、小さく頷き合つた。



それから程なくして。

命蓮寺に、浄財を交換するという銭洗毘沙門天が建立された。僧坊の増築の際に毘沙門天の化身である星が地面を突いたところ、新たな泉が沸きだしたというのである。この靈験あらたかな泉で洗った銭には福が集まるという御利益があるとの触れ込みであった。ご本尊には愉快な顔をした寅の張り子が用意され、寺の者たちも率先してそのことを触れ回った。

事前の根回しで天狗の新聞がそれを取り上げたことから噂は広まり、人里に近いと言う立地も相まって、銭洗毘沙門天は御開帳の当日から参道に小店も並ぶなど、かなりの賑わいを見せることとなった。従前より寺の本尊である寅丸は福を集める力を持つ事も広く知られていたことも話題の後押しをした。

この機会に、噂の聖の法会に出てみようと思う者も多く現れ、寺の檀家は一気に数を増したのである。以後境内で月ごとに古物市が開かれる事も決まったため、命蓮寺は以前にも増して人出で賑わうこととなった。

清貧を旨とする寺に似合わない思わぬ一手に、守矢の二柱や仙人達もこぞって様子を見に来るほどであったという。聡い者の中には、それまでの命蓮寺の方針には似合わない催事であることに気付いた者もいたかもしれない。

そして、その裏で飛ぶように回った噂が一部の商人達を震撼させたのである。

件の銭洗毘沙門天では、銭を洗い清める時に、欠けたり刻の薄れたりした質の悪い銭を、新品の貨幣に交換してくれるというのだ。

これは鏹銭の価値を良貨と同じものにすることを意味し、悪貨を扱い、不正な利益を得ていた商人達を少なからず動揺させた。銭洗毘沙門天の建立の真意がこの鏹銭と良貨の交換にあることは明白だったからだ。実際に身分を隠して毘沙門天を訪れた彼等の一人が、まるまるひと束、鏹銭を良貨に交換することに成功し、噂が真実である事は決定的なものとなった。

もともと人里では鏝銭を選んで流通されることは建前上禁じられており、額面上はあくまで等価のものを交換しているだけに過ぎない。実際は寺が損をしている事になるのだが、それを化主である白蓮も、毘沙門天の代理である寅丸も意に介さない以上、わざわざ口を出すのはばかられる。

なによりも、これまで鏝銭をこつそり使っていた事に対する後ろめたさもある。その事実が暴露され、霧雨商店や稗田の家などに知られれば、以後まともな取引ができなくなる可能性まであった。

そして、使い辛い悪貨を回収、処分し通貨の是正に協力する銭洗毘沙門天は多くの商人達からは歓迎されたのである。

なにしろ表向き鏝銭などはないことになっているのだから、おかしいと主張すれば何故そんな事を言うのかと問われることになる。藪を突いて蛇を出したいと思うものが居る訳もなく、これまで妖怪達を使って鏝

銭を処分し儲けを出していた者たちは、苦い顔を隠して受け入れざるを得なかった。

賑わう境内を遠巻きに、二ツ岩明神とその弟子、橙子に扮したマミゾウと橙は、市の盛況を見渡していた。恒例となった月に二度の古物市では、思い思いの品を並べて多くの人々が行き来する。妖怪寺という立地もあって、永遠亭の兎や河童たちもこつそり店を並べていた。

並ぶ品々を目ざとく目利きしては競り落としてゆくマミゾウの隣で、橙はどこか緊張の面持ちだ。

「おおむね、狙い通りといったところかの」

「良かった……」

大仕事の絵図面を書いた橙は、マミゾウの太鼓判にほっと胸を撫で下ろす。それなりに目安は立てていたものの、最終的に上手くいくかは一か八かだった。何しろ大掛かりな割に橙の手持ちにはなにもない。度胸一発の交渉頼りである。人里での商売の経験がなければ

ば思いつきもしないことだっただろう。

橙の仕掛けとは至極単純。妖怪に貨幣でのやり取りを学ばせることだ。里に流通する通貨には二種類あり、良いものと悪いものがある。表向きこれらは同じ額面だが、そう考えないものが居る——等々。

他にも、妖怪の山や地底の妖怪達との流通体制との連携も視野に入っている。河童や天狗、そして緊張緩和の進む旧地獄街道からの物流にも一役買うものであった。

茶店の椅子に腰かけ、串団子を頼んでのんびりと茶をすすり、マミゾウは袖を絡めて腕組みをする。

「むぐ。……橙、そろそろ、どうしてこのやり方を選んだか教えてくれんかの」

「はむ。……はい。私たちは人間に人間のやり方で騙されました。妖怪の流儀でやり返すこともできると思います。でも、それじゃあ人間達には、私達の意図は伝わらないと思いました」

ミステリアをはじめとした妖怪達を食いものにした人間達を告発し、その不正を正々堂々と暴いてから、改めて鏢銭と良銭の区別を禁じる方法もあっただろう。けれど橙は、あえてその手段を取らなかった。

従前までの人間と妖怪の関係であれば、それで良かったのだろう。首謀者を見つけ力で脅して、以後損となるような取引を妖怪に押し付けぬよう釘を差すことでも問題は無かったはずだ。しかし、力で強いたやりかたには必ず反発が生じる。まして人間と妖怪とでは、溝が深まることは必然であった。

だから橙は妖怪の無知に付け込むようなやり方そのものを、無意味にしてしまう必要があったのだ。

——鏢銭と良貨を区別せず、平等に扱うこと。

橙のとった手段は、そのお題目を事実にしてしまう方法だった。

人里の中でも、鏢銭を抱えている人間達にしてみれば悪い話ではないのだ。酷い目を見るのは、妖怪相手

に詐欺や阿漕な商売をしていた連中だけになる。厳密に言えば流通する通貨量の増加によって、相対的に物価の高騰が起ることが懸念されたが、そこはマミゾウが上手く手を回してくれている。

いかな財を集める寅丸の能力があると、実際、全ての鏝銭を交換できるほどの蓄えが命蓮寺にあったわけではない。半分は賭けのようなものだった。

しかし、鏝銭を良貨と等価で交換する場所があるという保証ができたことで、既に二つの通貨に価値の違いはなくなった。噂を広めたのは里に入り込んだ狸やマミゾウ、そして永遠亭のウサギ、チルノ達である。

悪徳商人たちは煮え湯を飲まされることになり、妖怪相手の商売を無知に付け込むのは割に合わないというイメージは商人達の間に浸透した。その一方で、妖怪達が新たな市場、商売相手になることを理解し、さっそくそのために商売を考える者たちがいた。野良妖怪達の中には、妖怪の山とも交流のあるものがある。

目端の利く商人たちは彼らを通じて、常々人脈を広げたいと考えていた妖怪の山や、地底の妖怪たちとの交易を始めているのである。

「ふむ、八方丸く納まったか。見事見事」

からからと笑って、マミゾウは餡のついた串をぐいと扱く。

「これで、おぬしも気兼ねなく戻れるのお」

「え？」

いきなり急な事を言われ、橙は目をぼくりさせて驚く。

「試験じゃよ。これなら文句なしの合格じゃ」

「あ……」

言われるまですっかり忘れていたが、最初に言い渡された期限はもうとくに過ぎていて。

「おぬしのしたことは、金では買えん大事なことじゃ。おぬしは儂よりもずっと広い視点で、幻想郷を見ておった。八雲の式を捕まえて、一万円などと染みつけたれ

たことを言うておった儂の方が、まだまだ考えが浅かつたということじゃな。」

「そんな、私はただ、みすちーが心配で……」

「前にも言ったと思うがの、友情は金で買えんし、金に換えることもできん。商人にとつて一番大事なものは、金で買えんものをどれだけ得られるかということじゃよ。おぬしは多くの事を学び、良い出会いをし、良い友を持ったんじゃ。誇つてよいぞ。……良く頑張つたの、橙」

賑わう市をゆつくりと眺め、マミゾウは満足げに茶をすすつた。急に褒められて、橙はなんだか居心地が悪いくらいだ。

「……九尾も心配しておつてな。何度も何度も様子を見に来ておつたが——その様子じゃ気付いておらんかつたな」

「藍様が!？」

あまりにも予想外の名前を出され、あんぐりと口を

開ける橙に、マミゾウはくすくすと笑う。

「で、でも一度も見たことなんて——」

「あの過保護が黙つて見ておるだけなんぞ出来るわけなからうよ。お前さんを泣かせたら八つ裂きにする程度度睨まれたことか。

……しかし、成程のう。己の式にも気付かせんか。流石に大した化けつぷりじゃな。ほれ、文福で何度も会つておつたらうに」

橙の脳裏に糸目の商人の姿が浮かぶ。

「あ! ……え? で、でも、あれ? 藍様が?」

突然の種明かしに思考がついて行かない。困惑と混乱がぐるぐると橙の頭の中で渦巻く。目を回す橙に、マミゾウはかかかと笑つた。

「おぬしを騙しておつた形になるわけじゃしな。腹も立とうが、余計な口出しをせず、助けてやりたいのをぐつと堪えて見守つてやつておつたことは汲んでやれ。狐であるあやつが、お前さんを儂のところに預けておつ

たこともな」

藍にも立場というものがあるのだらうと、マミゾウは言う。

「おぬしは決して必要とされておらん訳ではないぞ、橙。猫又のお前さんが、九尾狐の式であること、それ自体が重要なんじゃよ」

「にや？」

「考えてみい。あやつがどうして、化け狐を式にしておらんのか。九尾の威光にあやかりたい狐なんぞ、それこそ掃いて捨てるほどいる。幻想郷の化け狐なら、おぬしよりも遥かに優秀な者も多かろうな。じゃが、八雲藍の式はお前さんじゃ。何故か分かるのかの？」

それは、八雲藍が幻想郷の賢者、八雲紫の式であるからだ。

いかに有能だからと言って、紫の式である藍が狐の部下ばかりを使っていたら、紫は狐の派閥に肩入れしているを取られかねない。

紫はあくまで、妖怪全体の代弁者と言うスタンスを取らねばならないのだ。

「——もし、おぬしが狐だったら、こうして儂のところに置いてやることはできなんだろうし、おぬしも儂に気付かれた時、おとなしく儂の元に居る気になったと思うかの？ つまりはそういうことじゃよ、おぬしがいずれ幻想郷を継ぐのなら、覚えておくといい」

「へ？」

突然、壮大な話になった。間抜けな顔をする橙に、マミゾウは意外そうに眼を開く。

「おんや、違うのかい？ おぬしはあのすきま妖怪殿の式の式じゃろ？」

「え……あ、はい」

その通りだ。けれど橙にとつて、藍は主ではあるけれど、式としての自分はいくまで式であり、いずれ、その主人がいなくなることなんて、考えもしなかったことだったのだ。

「妖怪と言うのは、強い力を持てば持つほど些細なことでは動けなくなるものじゃ。おぬしの主人の主人も、年の半分は寝ておると聞くが……長い長い時が過ぎていけば、この幻想郷^{ザナドゥ}とて変化とは無縁ではいられんじやろうよ。その時お前さんは、もつと優秀な妖怪に式をゆずるのかね？」

「そんなこと……!!」

反論しようとして、自分の中にそんなにもしつかりと、責任感があつたことに驚く。

マミゾウはそんな橙を見て、それ、おぬしが一番良く解つておるとにつこりと笑つた。

「おぬしが主人のようにする必要はなからうて。できんことをやれと言われても道理は引つ込まんからの。」

おぬしはおぬしのやり方で、大きくなれば良い」

マミゾウは呼び出した使い魔の鳥から文を受け取つて、懷にしまう。

「これで卒業じゃな。では、最後のいんすとらしくしよ

んじや、橙。化術の極意を教えてやろうかの」

大げさに咳払いをして、マミゾウはそつと橙の頭を撫でる。初めて感じた二ツ岩狸の手のひらは、とても大きくて暖かかった。

「と言つても、もうおぬしには言わんでも分かつておる事じやろう。……化術の最大の極意はの、化かさぬ事じやよ。

相手を化かしたくなくなるくらい良く知つて、仲良くなつてしまふことじや。どんな相手とも隠しごとや、騙すことをなく信頼し、助け合えるのが一番良いに決まつてるからの。それをどうか、忘れんでおくれ」

多くの時代を、誰よりも人に寄り添つて生きてきた風変わりな妖怪——佐渡の二ツ岩狸は、眼鏡の奥目を細める。

「おぬしが式の式であることはきつと意味がある、それを信じてやれ」

「——はい!!」



餞別にと渡したマフラーを大切そうに握りしめ、何度もち止まっては深く頭を下げながら去ってゆく橙の、小さな背中を見つめながら、マミゾウはそつと目を細める。

「と、まあ、これを直接伝えてやれんのが、心苦しい立場じゃろうなあ、九尾の」

二ツ岩狸が呼びかけるように視線を向けると、そこから白い煙を纏いするりと姿を見せたのは、八卦を刻んだ道服に耳を納める白い帽子。見事な金色の尾を九本束ねた傾国の化生——橙の式にして、すきま妖怪の式、八雲藍そのひとである。

「橙が色々世話になったな」

「なに、いろいろと吹き込ませてもらったからの。これからは素直におぬしに従ってばかりでもなくなる

ぞ？」

「……式が受けた恩義を無碍にするほど、無礼ではないつもりだよ」

静かに目を伏せる藍だが、その実狸に対しての忸怩たる思いを抱えているのを隠そうともしない。お互い性分じやなあとマミゾウは喉の奥で小さく笑う。

「建前の上では、我儘で自分のところを飛び出していた式を、戻ってきたからと言ってただ出迎えるだけではいかんわけじゃろうしな。式が成長する為の試練には儂が丁度良かったということか。いやあ、こいつは一本取られたかの」

「……白々しい。解っていて付き合っていたのが丸見えだぞ」

「同じ化生として、後輩には遅しくあつて欲しいと思うのは間違ったことじやなかる。同族ならなお良いがなあ」

かかかと貫録を見せ笑うマミゾウは、取りだした煙

管に煙草を詰める。火打石を探す彼女に、藍は迷惑そうに狐火を灯して差し出した。ん、と螺細細工を火にかざし、マミゾウはうまそうに紫煙をふかす。

「――しかし、世話を焼くならもう少し上手く焼いたらどうじゃ。見ていていつ気付かれるかとほらはらし通しだったわい。過保護もいい加減にせいよ」

「性分だな」

素直に認め、藍は首を振った。親馬鹿も大概じゃなあとつぶやくマミゾウの煙を避けるように目を細め、

「里の通貨流通に問題があったのは事実だ。是正を呼び掛けるのはもう少し先でも良いかと思っていたが、結果的に上手くまとまったことになるな」

「それで悪役を被つても良いとなあ。やはり、その度量には見習うべきものがあるのお」

「心にもないことを抜かすな、狸め」

「かつかつか。言うのう、狐風情が」

二ツ岩狸と九尾狐は親しげに、鋭い視線を交わし合

う。

「こんな所で油を売っておつて良いのかね。可愛い式が帰つてきた時に迎えてやれんぞ」

「言われるまでもない」

元々織り込み済みのだろう、藍はひよいと開いたスキマの中へと身を潜らせる。一時的に主より借り受けた力だろうが、その割には十全に使いこなしているようだった。

その機能が十全に働かさえすれば、式は主と同等の力を発揮する。冬を迎えるこの季節、八雲紫が眠りについている間は、その代行を任されているのは藍だ。

強大な妖怪の式に身をやつすことで、彼女は本来自分には扱い切れなかった力を得ている。

「いやはや、儼もまだまだ、修行が足りんな」

煙と共に消え失せる九尾の狐を見送り、マミゾウはふかりと煙の輪を吐きだした。





「かくして、世界を徘徊する資本主義という名の怪物は、幻想郷へと招かれました。

幻想郷は全てを受け入れます。

……それはそれは、残酷な話ですわ♪」

袖振り合うも化生の縁・廻

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。
ます。

この本、『袖振り合うも化生の縁・廻』は、ニッ岩の大親分マミゾウの元に弟子入り（？）することになったすきま妖怪の式の式、橙の日々の奮闘とちよつとした成長を描いたりする、当サークル2冊目のオフセット本にして二十四冊目のSS本となります。

タイトルからお分かりの通り、昨年十月の紅楼夢で頒布した作品「袖振り合うも化生の縁」の補完・完全版となります。序盤部分もかなり書き直しております

すのでいくらか印象が変わっているかもしれません。
マミゾウさんに加えてぬえちゃんにみすちーの出席がどばつと増え、橙がすきま妖怪の式の式として一つの答えを出すまでのお話となりました。

二次創作では主人である藍との関係性がクロースアップされることの多い橙ですが、八雲の式としての立場だけではない、マヨヒガの化け猫、橙の魅力が少しでも描けていますかどうか。

楽しんでいただければ幸いです。

なお、ミステリアの屋台の経営改善という本作のストーリーは、ブログに頂いたコメントを参考にさせて頂いたものです。ありがとうございます。感想、レビューなどはなによりの励みになります。

今回の表紙は、サークル「九十九のキセキ」のはいばね様にお問い合わせしました。

愛らしくもどこか頼もしげな橙、大妖怪の貫録たつ

ぷりなマミゾウさん、可憐なおかみすちー、ひと癖ありそうで寂しがりなぬえちゃんと、作中の賑々しさを伝える素晴らしいイラストを描いて頂きました。お忙しい中本当にありがとうございます。

また、いつものことながら内容についての相談、装丁等について白身氏、R i z a氏には様々な形でお世話になりました。

この場を借りてお礼をさせていただきます。

———
— それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

そで ふ あ けしょう えん めぐる
「袖振り合うも化生の縁・廻」

平成25年3月3日

八雲幻想祭2 ～スキマ感謝祭～

オルハザカサンパンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがね
著者 銅 おりは

印刷所 コミックモール様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。





折葉坂三番地

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>

表紙：はいばね（九十九のキセキ）

<http://tukumonokiseki.web.fc2.com/>